

富士市埋蔵文化財発掘調査報告書

静岡県 富士市

宮 添 遺 跡 IV

個人農地改良工事に伴う E 地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2011 年 3 月

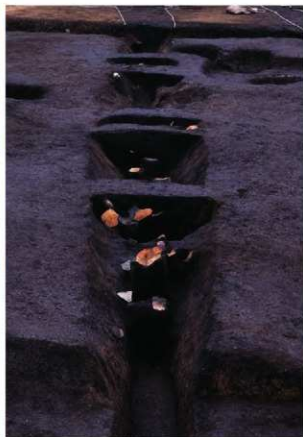
富士市教育委員会



調査区と浅間古墳を望む（南東から）



1. 環濠 (SD1・2) 完掘状況 (東から)



2. SD1 遺物出土状況 (西から)



3. SD1 出土土器



1. S B 24 床面・遺物出土状況（西から）



2. S B 24 カマド・遺物出土状況（東から）



3. S B 24 スコリア下層 遺物出土状況（東から）



4. S B 24 出土土器



1. S B 42 出土土器



2. 鍛冶関連遺物

序

私達のまち富士市は、平成20年11月に旧庵原郡富士川町との合併を果たし、人口26万人を擁する静岡県で三番目の都市として成長を続けています。北には世界遺産登録を目指す霊峰富士がそびえ、南には駿河湾が朝日に輝き、日本三大急流の一つである富士川も本市の豊かで多様な自然環境を形成しております。私達の祖先は、この豊かな自然環境のなかで、一万年以上も前の旧石器時代から大地に生活の痕跡を刻んできました。そして、時には荒れ狂う自然の脅威や、噴火する富士山にも畏敬の念を抱きつつ、現在の私達に継承すべく、確実な歩みを続けてきたのです。

埋蔵文化財は、私達の先祖が日々の生活を大地に刻んできた貴重なあかしです。それらの遺構や遺物は、唯一無二の歴史情報を内包して私達の前に現れます。物言わぬ歴史情報は多忙な毎日を通ず私達に、過去へのロマンと、連綿として続く大河のような時の流れをイメージさせてくれます。この大きく豊かな心が、私達のまちづくり、地域づくりの原動力となることを確信しております。

教育委員会では、これらの歴史資料を多くの人々に公開し、博物館展示・各種講座等で活用されることを期待して日々の事業に取り組んでおります。

今回報告するのは、個人農地改良事業に伴う宮添遺跡E地区の発掘調査の成果をまとめたものです。本遺跡は、縄文時代から連綿として営まれており、地元の土器はもとより、東海地域や信濃・甲斐地域の土器も出土し、沼津・三島地域に連なる交通・交易の拠点という役割も担っていた遺跡です。特に、今回報告する遺物のなかに、静岡県下でも極めて類例の少ない小銅鐸の石製舌と推定される資料や、907年に鑄造された「延喜通宝」という古代の銭貨も含まれております。これらの資料の評価、地域の歴史への位置付けは今後の課題ですが、私達の富士市の歴史を彩る貴重な証拠として、大切に守り育ててまいりたいと思います。




最後になりましたが、現地調査や資料整理にあたり、ご支援・ご協力をいただいた地元の皆様や関係者に深く感謝申し上げる次第です。

平成23年3月
富士市教育委員会
教育長 平岡彦三

例 言

1. 本書は、静岡県富士市増川718番地外に所在する宮添遺跡E地区の発掘調査報告書である。
2. 調査は、個人農地改良事業に伴い、富士市教育委員会が実施した。
3. 調査費用は、『平成10・11年度文化財保存事業補助金』による補助を受けた。
4. 調査は以下の体制で行われた。
 - 本発掘調査 宮添遺跡E地区第1次調査（平成10年10月20日～平成11年3月19日）
担当者 田中淳一・前田勝己・久保田伸彦
 - 宮添遺跡E地区第2次調査（平成11年4月19日～平成11年11月22日）
担当者 田中淳一・前田勝己・吉田博子
 - 整理作業（平成22年4月1日～平成23年3月31日） 担当者 佐藤祐樹
5. 本書の執筆は、佐藤祐樹・佐野五十三・小島利史が行い、編集は佐藤が行った。
執筆分担は以下の通りである。
 - 第1章、第2章、第4章第2節・第3節＝佐藤 第4章第4節＝佐野 第4章第1節＝小島
 - 第3章の遺構部分は主に小島が執筆し、遺物については弥生・古墳時代を佐藤、それ以降は佐野が執筆した。
6. 調査における基準点測量、空中写真測量は（株）フジヤマに委託した。
7. 遺構・遺物のトレース業務の一部は（株）イビソクに委託した。
8. 現地における写真は、各担当者が撮影し、遺物写真は大部分を寿福滋氏（寿福写真）が撮影し、SB42の集合写真のみ小田貴子（富士市教育委員会臨時職員）が撮影した。
9. 本遺跡の出土遺物・実測図・写真はすべて富士市教育委員会にて保管している。
10. 調査および本書を作成するにあたり、次の方々に御指導、御協力を賜った。
稲田健一・岩崎しのぶ・岩本貴・植松章八・及川司・笹原千賀子・佐藤達雄・柴田稔・前嶋秀張・馬飼野行雄・山本恵一・渡井一信・渡井英誉（敬称略）

凡 例

1. 座標は、平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系を使用して調査した。ただし、全体図などの数値は、世界測地系（平成14年4月施行）に変換した数値を使用している。抄録のデータはE03杭の数値である。
2. グリッドは、宮添遺跡全体を覆うように設定した任意グリッドによる。真北は、グリッドより18度西傾する。また、レベル高は海拔である。
3. 本書における遺構の標記（記号）は次の通りである。
SB：竪穴建物跡 SH：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝状遺構 FP：穴跡 SX：性格不明遺構
4. 土器については、実測図断面を以下のように表現することで、種類の違いを示した。
土師器： 須恵器： 灰釉陶器・山茶碗：
5. 土層・遺物の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
6. 本書では、遺構などの時期について、6世紀以前は時代名称による表記をおこない、7世紀以降はできるだけ世紀を用いた表記とした。古墳時代の時期区分については、大賀克彦氏の編年を参考にした。

古墳時代前期は和田編年一期～五期、中期は六期～八期、後期は九期～十一期に対応する。

大賀克彦 2002 『凡例 古墳時代の時期区分』『小羽山古墳群』清水町教育委員会

和田晴吾 1987 『古墳時代の時期区分をめぐって』『考古学研究』第34巻第2号

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
挿表目次	
図版目次	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の体制と経緯	1
第2章 遺跡の立地と調査履歴	3
第1節 遺跡の立地	3
第2節 宮添遺跡の調査履歴	3
第3節 宮添遺跡の基本層序	5
第3章 遺構と遺物	9
第1節 竪穴建物跡	9
第2節 掘立柱建物跡	82
第3節 溝状遺構	84
第4節 土坑・炉跡・性格不明遺構	89
第5節 遺構外出土遺物	94
第4章 総括	99
第1節 E地区における遺構の変遷	99
第2節 E地区における調査成果	104
第3節 弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化	108
第4節 古代富士郡域における宮添遺跡の役割	112
出土遺物観察表	117
図 版	127

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置と周辺地質図	2	第 43 図	S B 8 遺構実測図	36
第 2 図	周辺の遺跡	4	第 44 図	S B 8 カマド実測図	36
第 3 図	基本層序	5	第 45 図	S B 8 遺物実測図	36
第 4 図	調査区位置図	6	第 46 図	S B 23・16・46・13・44 重複関係図	37
第 5 図	遺跡断面図	7	第 47 図	S B 23 遺構実測図	38
第 6 図	遺構全体図	8	第 48 図	S B 23 遺物実測図	39
第 7 図	S B 1 遺構実測図	10	第 49 図	S B 16 遺構実測図	40
第 8 図	S B 1 カマド実測図	11	第 50 図	S B 16 遺物実測図	41
第 9 図	S B 1 遺物実測図	11	第 51 図	S B 13 遺構実測図	42
第 10 図	S B 2 遺構実測図	12	第 52 図	S B 13 遺物実測図	42
第 11 図	S B 2 カマド実測図	13	第 53 図	S B 46 遺構実測図	43
第 12 図	S B 2 遺物実測図	13	第 54 図	S B 46 遺物実測図	43
第 13 図	S B 3 遺構実測図	14	第 55 図	S B 44 遺構実測図	44
第 14 図	S B 3 カマド実測図	14	第 56 図	S B 44 遺物実測図	44
第 15 図	S B 3 遺物実測図	15	第 57 図	S B 14・20 遺構実測図	45
第 16 図	S B 12・10・4・11・5 重複関係図	16	第 58 図	S B 14 カマド実測図	45
第 17 図	S B 12 遺構実測図	17	第 59 図	S B 14 遺物実測図	46
第 18 図	S B 12 カマド実測図	17	第 60 図	S B 20 カマド実測図	47
第 19 図	S B 12 遺物実測図	18	第 61 図	S B 20 遺物実測図	47
第 20 図	S B 10 遺構実測図	19	第 62 図	S B 15 遺構実測図	48
第 21 図	S B 10 カマド実測図	19	第 63 図	S B 15 遺物実測図	48
第 22 図	S B 10 遺物実測図	20	第 64 図	S B 17 遺構実測図	49
第 23 図	S B 4 遺構実測図	20	第 65 図	S B 17 カマド実測図	49
第 24 図	S B 4 カマド実測図	21	第 66 図	S B 17 遺物実測図	50
第 25 図	S B 4 遺物実測図	21	第 67 図	S B 18 遺構実測図	51
第 26 図	S B 11 遺構実測図	22	第 68 図	S B 18 カマド実測図	52
第 27 図	S B 11 カマド実測図	23	第 69 図	S B 18 遺物実測図	52
第 28 図	S B 11 遺物実測図	23	第 70 図	S B 19 遺構実測図	53
第 29 図	S B 5 遺構実測図 (1)	24	第 71 図	S B 19 カマド実測図	54
第 30 図	S B 5 遺構実測図 (2)	25	第 72 図	S B 19 遺物実測図	54
第 31 図	S B 5 カマド実測図	26	第 73 図	S B 21 遺構実測図	55
第 32 図	S B 5 遺物実測図	27	第 74 図	S B 21 遺物実測図	55
第 33 図	S B 6・9・7 重複関係図	29	第 75 図	S B 24 遺構実測図	57
第 34 図	S B 6 遺構実測図	30	第 76 図	S B 24 カマド実測図	58
第 35 図	S B 6 カマド実測図	31	第 77 図	S B 24 遺物実測図	59
第 36 図	S B 6 遺物実測図 (1)	32	第 78 図	S B 25 遺構実測図	60
第 37 図	S B 6 遺物実測図 (2)	33	第 79 図	S B 25 遺物実測図	60
第 38 図	S B 9 遺構実測図	33	第 80 図	S B 26 遺構実測図	61
第 39 図	S B 9 遺物実測図	34	第 81 図	S B 26 遺物実測図	61
第 40 図	S B 7 遺構実測図	34	第 82 図	S B 27・28・29・32 重複関係図	62
第 41 図	S B 7 カマド実測図	35	第 83 図	S B 27 遺構実測図	63
第 42 図	S B 7 遺物実測図	35	第 84 図	S B 27 遺物実測図	64

第 85 図	S B 28	遺構実測図	64	第 121 図	S K 3・4	遺構実測図	90
第 86 図	S B 28	遺物実測図	65	第 122 図	S K 6	遺構実測図	90
第 87 図	S B 29	遺構実測図	66	第 123 図	S K 7	遺構実測図	90
第 88 図	S B 29	遺物実測図	66	第 124 図	F P 1	遺構実測図	91
第 89 図	S B 32	遺構実測図	67	第 125 図	F P 2	遺構実測図	91
第 90 図	S B 31・30・33・35・40	重複関係図	68	第 126 図	S X 1	遺構実測図	92
第 91 図	S B 31	遺構実測図	69	第 127 図	S X 1	遺物実測図	92
第 92 図	S B 31	遺物実測図	69	第 128 図	S X 2	遺構実測図	93
第 93 図	S B 30	遺構実測図	70	第 129 図	遺構外出土遺物実測図 (1)	95	
第 94 図	S B 30	遺物実測図	71	第 130 図	遺構外出土遺物実測図 (2)	97	
第 95 図	S B 33	遺構実測図	71	第 131 図	遺構外出土遺物実測図 (3)	98	
第 96 図	S B 33	遺物実測図	71	第 132 図	宮添遺跡 E 地区における竪穴建物跡の 平面形態の変化	100	
第 97 図	S B 35	遺構実測図	72	第 133 図	宮添遺跡 D 地区・E 地区の 遺構変遷図	101	
第 98 図	S B 40	遺構実測図	73	第 134 図	宮添遺跡における「環濠」と 弥生時代後期の建物跡	104	
第 99 図	S B 40	遺物実測図	73	第 135 図	大淵スコリア降下前後の土器群	105	
第 100 図	S B 34・36	遺構実測図	74	第 136 図	宮添遺跡における鍛冶関連遺物の 出土位置	106	
第 101 図	S B 34	遺物実測図	74	第 137 図	宮添遺跡を取り巻く遺跡・古墳の分布 (S = 1/20,000)	108	
第 102 図	S B 37・38	遺構実測図	75	第 138 図	神田遺跡第 133 次調査地点出土 珠紋鏡 (原寸)	109	
第 103 図	S B 37	遺物実測図	76	第 139 図	浅岡古墳測量図 (S = 1/1,000)	109	
第 104 図	S B 38	遺物実測図	76	第 140 図	天神塚古墳測量図 (S = 1/500)	110	
第 105 図	S B 41	遺構実測図	77	第 141 図	山の神古墳測量図 (S = 1/500) と 出土填輪	110	
第 106 図	S B 41	遺物実測図	77	第 142 図	富士山麓・愛鷹山麓における 主要古墳の変遷	111	
第 107 図	S B 42	遺構実測図	78	第 143 図	古代富士郡と周辺遺跡分布	112	
第 108 図	S B 42	遺物出土状況図	79	第 144 図	古代後半 (8~9 世紀) の遺跡と 交通路	114	
第 109 図	S B 42	遺物実測図 (1)	80	第 145 図	古代後半 (10~12 世紀) の遺跡と 交通路	114	
第 110 図	S B 42	遺物実測図 (2)	81				
第 111 図	S H 1	遺構実測図	82				
第 112 図	S H 1	遺物実測図	82				
第 113 図	S H 2	遺構実測図	83				
第 114 図	S D 1・S D 2	遺構実測図	85				
第 115 図	S D 1	遺物実測図	87				
第 116 図	S D 1	遺物出土状況図	88				
第 117 図	S D 3・4	遺構実測図	88				
第 118 図	S K 1	遺構実測図	89				
第 119 図	S K 1	遺物実測図	89				
第 120 図	S K 2	遺構実測図	89				

挿 表 目 次

第 1 表	調査・整理作業体制	1	第 3 表	竪穴建物跡一覧	9
第 2 表	宮添遺跡 調査履歴	3	第 4 表	古代富士郡と周辺遺跡の消長	113

図版目次

- 巻頭図版1 調査区と浅間古墳を望む(南東から)
- 巻頭図版2 1. 環壕(SD1・2)完備状況(東から)
2. SD1 遺物出土状況(西から)
3. SD1 出土土器
- 巻頭図版3 1. SB24 床面・遺物出土状況(西から)
2. SB24 カマド・遺物出土状況(東から)
3. SB24 スコリア下層 遺物出土状況(東から)
4. SB24 出土土器
- 巻頭図版4 1. SB42 出土土器
2. 鍛冶関連遺物
- PL. 1 1. 調査区垂直写真 E地区とK地区〔平成16年調査「宮添遺跡」I〕との合成写真
- PL. 2 1. 調査区と愛鷹山丘陵を望む(南から)
2. 調査区と駿河湾を望む(北から)
- PL. 3 1. SB1(南から) 2. SB1 カマド(南から)
3. SB2(西から) 4. SB2 カマド・遺物出土状況(南から)
5. SB3(南から) 6. SB3 カマド・遺物出土状況(南から)
7. SB11・SB10・SB12(西から) 8. SB12 カマド(西から)
- PL. 4 1. SB10 カマド・遺物出土状況(南から) 2. SB11 カマド(南から)
3. SB4(西から) 4. SB4 カマド(西から)
5. SB7(南から) 6. SB6・SB9(南から)
7. SB6 カマド(南から) 8. SB6 カマド遺物出土状況(南から)
- PL. 5 1. SB5(南から) 2. SB5 作業風景(南から)
3. SB5 カマド遺物出土状況(南から) 4. SB8(南から)
5. SB8 カマド(南から)
- PL. 6 1. SB23・SB13(南から) 2. SB16(南から)
3. SB23・SB13(南から) 4. SB15(北から)
5. SB17(東から) 6. SB17 カマド(南から)
7. SB18(東から) 8. SB18 カマド(南から)
- PL. 7 1. SB24 遺物出土状況(南から) 2. SB24 カマド遺物出土状況(南から)
3. SB24 遺物出土状況(西から) 4. SB24 土層(大淵スコリア)堆積状況(南西から)
5. SB24 スコリア下層 土器(255・260)出土状況
- PL. 8 1. SB19(西から) 2. SB19 カマド(西から)
3. SB26(南から) 4. SB27(南から)
5. SB27 埴(南から) 6. SB27 土層堆積状況(北東から)
7. SB29(南から) 8. SB30(南から)
- PL. 9 1. SB42(東から) 2. SB42 遺物出土状況(南から)
3. SH1(南から) 4. SH2(南から)
5. SX1(北から) 6. SX1 遺物(373)出土状況
7. SK7(南から)
- PL. 10 1. SD1・SD2(東から) 2. SD1・SD2土層(東から)
3. SD2土層(東から) 4. SD1 遺物出土状況(1)(西から)
5. SD1 遺物出土状況(2) 6. SD1 遺物出土状況(3)
- PL. 11 SB1・SB2・SB3出土遺物

- P L . 12 S B 3 · S B 10 · S B 12出土遺物
P L . 13 S B 10出土遺物
P L . 14 S B 4 · S B 5 · S B 11出土遺物
P L . 15 S B 5 · S B 6出土遺物
P L . 16 S B 5 · S B 6出土遺物
P L . 17 S B 6 · S B 7 · S B 8 · S B 9出土遺物
P L . 18 S B 7 · S B 23出土遺物
P L . 19 S B 16出土遺物
P L . 20 S B 13 · S B 14 · S B 16出土遺物
P L . 21 S B 14 · S B 15 · S B 17 · S B 20出土遺物
P L . 22 S B 17 · S B 18 · S B 19出土遺物
P L . 23 S B 19 · S B 21出土遺物
P L . 24 S B 21 · S B 24出土遺物
P L . 25 S B 24 · S B 25 · S B 26 · S B 27出土遺物
P L . 26 S B 27 · S B 28 · S B 29 · S B 31出土遺物
P L . 27 S B 30 · S B 31 · S B 34 · S B 37 · S B 38 · S B 40 · S B 41出土遺物
P L . 28 S B 41 · S B 42出土遺物
P L . 29 S B 42 · S H 1 · S D 1出土遺物
P L . 30 S D 1 · S K 1 · S X 1出土遺物
P L . 31 包含層出土遺物
P L . 32 包含層出土遺物
P L . 33 包含層出土遺物
P L . 34 包含層出土遺物
P L . 35 包含層出土遺物
P L . 36 包含層出土遺物
P L . 37 包含層出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

富士市増川718番地は、「周知の埋蔵文化財包蔵地」宮添遺跡のほぼ中央に位置している。当該地で茶畑を経営する大塚京治氏は、隣接する市道が改良されたため（宮添遺跡B・C地区）、より効率的に耕作を行うために地面を現況道路面まで削平する農地改良工事を計画した。

平成10年、富士市教育委員会は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）第57条の2第1項の規定に基づき大塚京治氏より提出された「埋蔵文化財発掘の届出書」を文化庁長官宛に進達した。それを受け、静岡県教育委員会より、文化庁の指導（昭和56年2月7日付け庁保記第11号）により、工事着工前に発掘調査を実施するよう通知がなされた。

調査は富士市教育委員会教育長 太田均のもと、文化振

興課職員が担当することとなり、本発掘調査は二ヵ年かけて行うこととなった。

発掘調査費用については「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」（昭和50年10月20日 庁保記第211号）に基づき、『平成10・11年度文化財保存事業補助金』を得て、二分の一を国庫補助、四分の一を県費補助、四分の一を市負担とした。

本発掘調査では、竪穴建物跡42軒等を検出・完掘し、その結果を静岡県教育委員会教育長に「発掘調査終了報告」として送付した。

また、遺失物法に基づき、富士警察署長宛に埋蔵物の発見届を提出するとともに、同日、静岡県教育委員会に埋蔵文化財保管証を提出した。

第2節 調査の体制と経緯

第1項 調査の体制

調査は以下の体制で行った。

年 度	平 成 10 年 度	平 成 11 年 度	平 成 22 年 度	
事 業 区 分	本 調 査	本 調 査	整 理 作 業	
調 査 主 体 【 事 務 局 】 教 育 委 員 会 文 化 振 興 課 文 化 財 担 当 ※1	教 育 次 長 長 官 補 統 括 主 幹 ※2	太 田 均 中 澤 健 一 遠 藤 貞 幸 殿 岡 孝 則	太 田 均 中 澤 健 一 小 林 孝 征 殿 岡 孝 則	平 岡 彦 三 堀 内 哲 雄 友 野 貴 正 若 月 正 己
	主 幹 ※3	池 田 晴 夫	渡 井 義 彦	木 ノ 内 義 昭
調 査 ・ 整 理 担 当	調 査 主 幹 文 化 財 課 主 事 臨 時 職 員	田 中 淳 一 前 田 勝 己 久 保 田 伸 彦	田 中 淳 一 前 田 勝 己 吉 田 博 子	佐 藤 祐 樹 藤 村 翔 佐 野 五 十 三 小 島 利 史 若 林 美 希
	臨 時 職 員	秋 山 小 百 合 井 倉 洋 子 石 井 雅 子 市 川 喜 代 子 小 籠 純 子 小 林 恵 子 小 林 弥 作 鈴 木 朱 美 田 中 洋 子	秋 山 小 百 合 井 倉 洋 子 石 井 雅 子 市 川 喜 代 子 小 籠 純 子 小 林 恵 子 小 林 弥 作 鈴 木 朱 美 田 中 洋 子	稲 葉 万 智 子 井 上 尚 子 小 田 貴 子 金 刺 才 己 牧 野 か お り 加 藤 咲 子

第1表 調査・整理作業体制

※1 調査中は文化財課
※2 調査中は文化財課
※3 調査中は保保員

第2項 調査の経過

発掘調査

発掘調査は、平成10年10月20日～平成11年3月19日、平成11年4月19日～平成11年11月22日まで本発掘調査を行った。

①重機による表土掘削(排土は場外搬出)→②確認面検出→③確認面調査(遺構発掘・測量等)→④全体写真撮影の順序で調査を行った。発掘された遺構・遺物の情報を管理するために、調査区全体に5m方眼のグリッドを設定した。①～④に至る過程の適宜必要と認められる場面で、遺構・遺物出土状況の測量および写真撮影を行った。

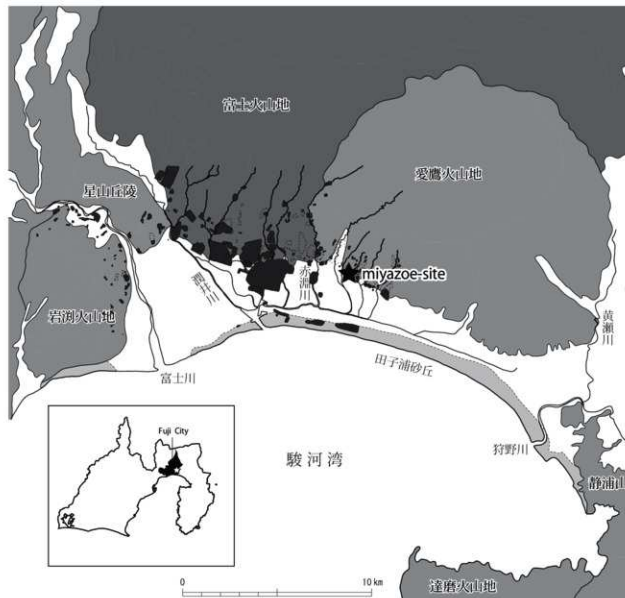
遺構掘削は覆土の違いから古墳時代中期と後期の間を境として二時期に区分して調査した。古墳時代後期以降を平成10年度に、それ以前の遺構は平成11年度に調査した。

また、各年度の調査終了段階で空中写真撮影を行った。調査面積は1,532㎡である。

整理作業

整理作業は調査終了後、基礎整理を断続的に行い、平成22年4月2日より本格的な整理作業を再開し、本書の刊行をもって終了した。

期間中に出土土器の洗浄・接合・復原、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。さらにこれらを編集して報告書を作成した。本書で報告する遺物・図面は富士市教育委員会にて保管・管理されている。



第1図 遺跡の位置と周辺地質図

第2章 遺跡の立地と調査履歴

第1節 遺跡の立地

静岡県富士市は、東経 138 度 40 分 35 秒、北緯 35 度 9 分 41 秒（市役所）に位置し、東京まで 146km、大阪まで 410km の県東部に位置する。北側には雄大な富士山を望み、南は駿河湾に面しており、平均気温 16.7℃と一年を通じて比較的温暖な地域である。平成 20 年 11 月 1 日には、富士川を挟んだ富士川町と合併し、人口 261,654 人（平成 21 年 11 月 1 日現在）、面積 245km²を有する東部地域を代表する都市である。

市域は、西方に岩淵火山地、星山丘陵、北方に富士火山地、東に愛鷹火山地、南方は駿河湾と富士川河口から沼津市の狩野川まで続く田子の浦砂丘に取り囲まれ、平野部は富士川の運搬した堆積物によって形成されたデルタ地帯に

より形成されている。また、愛鷹火山地と田子の浦砂丘に挟まれた低地部は「浮島ヶ原低地」と呼ばれ、古墳時代以降、肥沃な生産基盤として存在していたものと考えられる。

「浮島ヶ原低地」と愛鷹火山地の境には、富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道 22 号三島富士線」通称「根方街道」が存在する。この街道沿いの丘陵上に弥生時代以降集落が営まれていることは、街道として整備される以前から、人の往来のあった「路」の存在を想定させる。増川に所在する宮添遺跡は愛鷹山南西麓に位置し、「根方街道」の丘陵先端部に立地しており、遺跡の北西 400 m には、国指定史跡の前方後方墳「茂岡古墳」が存在する。

第2節 宮添遺跡の調査履歴

宮添遺跡は、昭和 60 年度の調査を皮切りに、継続した調査が行われ、旧石器時代から近世までの遺構・遺物が発

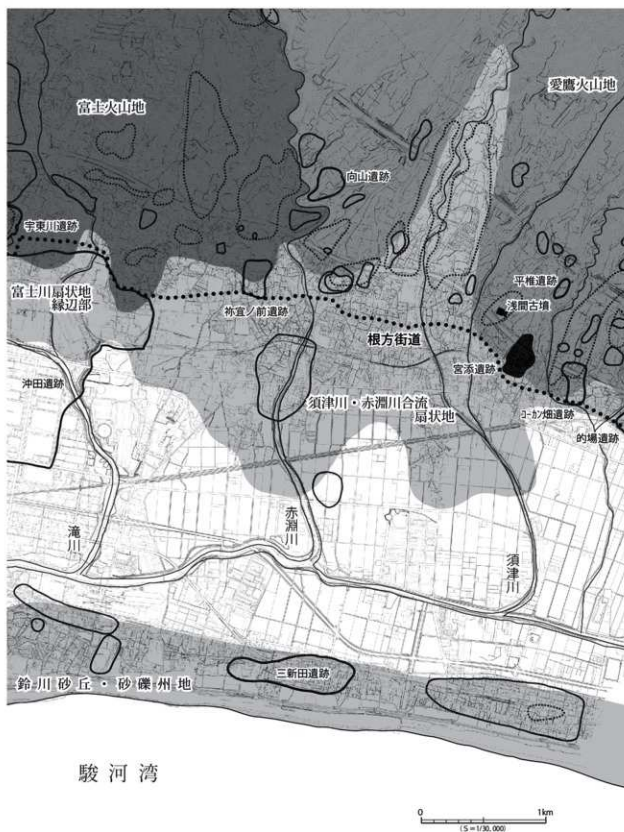
掘調査されてきた。調査履歴一覧を提示し、また歴史的環境については、過去の文献を参照していただきたい。

地区名	調査種別	地番	調査経緯	調査開始年度	主な時代	主な遺構	文献
A地区	本調査	増川 692-2	墓地造成	昭和 60 年度	古墳・平安	方形周溝墓・建物跡	富士市 1986
B地区	試掘・本調査	増川 698-2 外	市道建設	平成 5 年度	旧石器・古墳～平安	建物跡	
C地区	試掘	増川 719 外	市道建設	平成 6 年度	古墳	方形周溝墓・建物跡	
D地区	本調査	増川 698-1	農地改良	平成 6 年度	旧石器・弥生～平安・近世	建物跡・溝	富士市 2010b
E地区	本調査	増川 718 外	農地改良	平成 10 年度	旧石器・弥生～平安・中世	建物跡・溝	富士市 2011
F地区	試掘	増川 721 外	農地改良	平成 11 年度		なし	
G地区	試掘・本調査	増川 716 外	農地改良	平成 13 年度	弥生～平安	建物跡	富士市 2009a
H地区	試掘	増川 697 外	駐車場造成	平成 14 年度	古墳～平安	建物跡	富士市 2010a
I地区	試掘	増川 710-1 外	農地改良	平成 14 年度	弥生～平安	建物跡	富士市 2010a
J地区	試掘	増川 700-9 外	土砂採取	平成 15 年度	古墳	建物跡	富士市 2009b
K地区	本調査	増川 696	農地改良	平成 15 年度	弥生～平安	建物跡・溝	富士市 2008
L地区	試掘・本調査	増川 720-1 外	駐車場造成	平成 19・21 年度	古墳～奈良	建物跡	富士市 2009b

調査主体はいずれも富士市教育委員会

富士市 1986	富士市教育委員会 1986	『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市 2008	富士市教育委員会 2008	『富士市の埋蔵文化財（遺跡編）』
富士市 2009a	富士市教育委員会 2009	『宮添遺跡Ⅰ』
富士市 2009b	富士市教育委員会 2009	『宮添遺跡Ⅱ』
富士市 2010 a	富士市教育委員会 2010	『平成 15・19 年度 富士市内周縁発掘調査報告書』
富士市 2010 b	富士市教育委員会 2010	『平成 14・20 年度 富士市内周縁発掘調査報告書』
富士市 2011	富士市教育委員会 2011	『宮添遺跡Ⅲ』（本書）

第2表 宮添遺跡 調査履歴



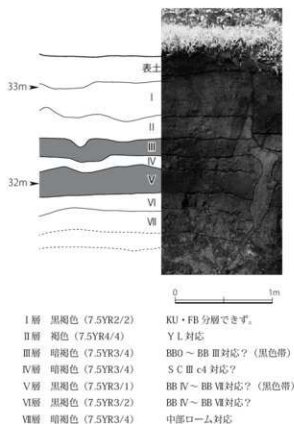
駿河湾

第2図 周辺の遺跡

第3節 宮添遺跡の基本層序

宮添遺跡E地区は、愛鷹山麓に伸びる標高30mの丘陵先端上に立地している。南方に向かって緩やかに傾斜する調査地周辺は、茶栽培のために傾斜が削平を受けており、特に北側部分においては著しい。宮添遺跡の基本層序については、D地区の報告（『宮添遺跡Ⅲ』）でも、述べたとおりであるが、中部ローム層から富士黒土層まで、すべてが残存する箇所は限られている。E地区の南側に接するD地区においては、南北方向に浅い埋没谷が存在した可能性が指摘されているが、E地区では確認されていない。その他、E地区の基本層序は、D地区と大きく変わらない。

右図は、E地区の北隣L地区における、地表面から中部ローム層までの土層である。他の地区同様、愛鷹ロームにおける分層に対応できるほど、細かな分層は認識できなかった。



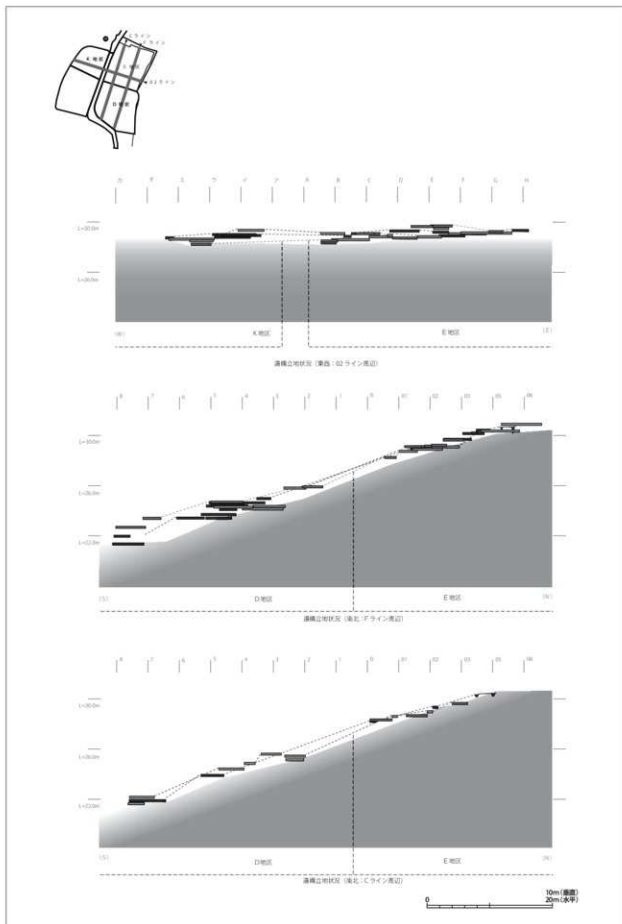
第3図 基本層序



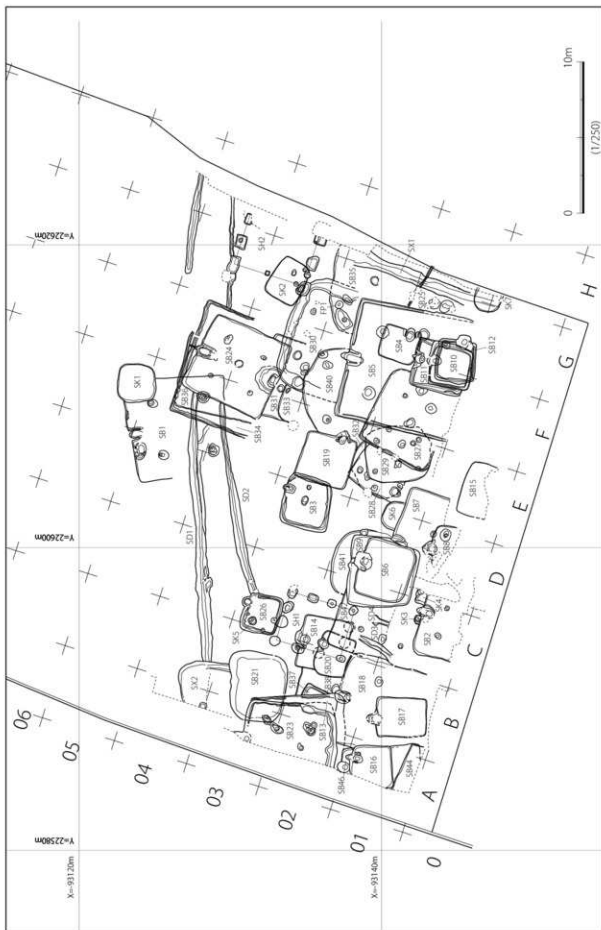
新河湾から望む周辺地形



第4図 調査区位置図



第5図 遺跡断面図



第6図 遺構全体図

第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡

E地区の調査では、弥生時代後期から12世紀前半にかけての竪穴建物跡が42軒検出された。そのことは、長期間にわたり、人々がこの地で生活していたことを表しているが、その半面、古い時代の遺構は、大規模に改変されてしまっている。以下の報告では、基本的には遺構番号順に報告するが、切りあっている遺構を合わせて報告するなどするため、時代も遺構も統一のない報告になっている。そのため、下記の一覧表・掲載頁を参考にしたい。

時期	遺構	頁	Gr	規模	伊・坪?	特記
弥生時代後期	S B 29	65	E02	(3.70 × 4.3)	伊?	
弥生時代後期	S B 32	67	E03	(3.93 × -)	-	
弥生時代後期	S B 40	73	E03	(5.34 × 2.78)	-	
弥生時代後期	S B 41	77	C02	4.62 × (3.42)	-	
弥生時代後期?	S B 35	72	G03	(3.70 × 7)	伊 (北)	
古墳時代前期	S B 44	44	A01	-	-	
古墳時代前期	S B 31	68	E04	5.41 × (2.54)	-	
古墳時代前期	S B 30	69	F04	7.64 × (3.90)	伊 (西)	
古墳時代前期	S B 33	71	E04	-	-	
古墳時代前期	S B 37	76	B02	(1.13 × 1.65)	-	
古墳時代前期	S B 38	76	B02	(1.96 × 2.88)	伊	
古墳時代前期?	S B 25	60	G02	-	伊2基	
古墳時代中期?	S B 27	62	E02	5.50 × 5.10	伊 (東)	
古墳時代中期?	S B 28	65	E02	(2.7 × 4.1)	-	
古墳時代中期?	S B 34	74	E05	7.8 × (5.20)	-	
古墳時代中期?	S B 36	75	E05	(4.80 × 5.10)	-	
古墳時代中期末	S B 42	78	C02	(3.96 × 5.12)	-	
古墳時代後期	S B 9	34	C02	4.64 × 4.37	北?伊?	
古墳時代後期	S B 7	35	D02	-	北?伊?	
古墳時代後期	S B 18	51	B02	6.22 × (5.3)	北?伊?	
古墳時代後期	S B 24	56	E04	5.40 × 5.63	北?伊?	大淵2?伊?

時期	遺構	頁	Gr	規模	伊・坪?	特記
7世紀	S B 1	9	D05	6.70 × 6.84	北?伊?	
7世紀	S B 2	12	C01	-	北?伊?	
7世紀	S B 5	27	F02	8.08 × (7.59)	北?伊?	
7中～8初?	S B 23	39	A02	-	北?伊?	
7世紀?	S B 13	42	B02	6.34 × (4.92)	北?伊?	
9世紀前	S B 16	40	A01	2.85 × 2.82	北?伊?	
9世紀前	S B 14	44	B02	3.58 × 3.24	北?伊?	
9世紀前	S B 20	47	B02	2.94 × 2.3	北?伊?	
9世紀前	S B 26	61	C03	2.65 × 2.54	北?伊?	
9後～10初	S B 15	48	E01	3.66 × (2.2)	-	
9世紀	S B 8	36	D01	-	北?伊?	
9世紀	S B 46	43	A01	5.20 × (3.20)	北?伊?	
9世紀後	S B 11	22	F02	3.27 × 3.62	北?伊?	
10世紀前	S B 19	54	E03	3.50 × 3.5	北?伊?	延喜通寶
10世紀	S B 3	14	D03	3.48 × 3.18	北?伊?	
10世紀	S B 6	29	D02	3.93 × 3.50	北?伊?	
10世紀	S B 17	49	B01	2.6 × 2.34	北?伊?	竈の羽口
10世紀	S B 10	18	F02	2.87 × 2.88	北?伊?	
10世紀以降	S B 12	18	G02	2.83 × 2.66	東?伊?	
10世紀以降	S B 4	20	G02	2.20 × 2.52	東?伊?	
11後～12前	S B 21	55	A03	4.60 × 3.97	-	0?調整皿

第3表 竪穴建物跡一覧

S B 1

遺構(第7・8図・図版3)

位置: D 05・E 05 グリッド

重複関係: (古) S D 1・2 → S B 36 → S B 34 → S B 24 → S B 1 → S K 1 (新)

主軸方位: N-7.5°-E

残存状況: 上面が削平を受けているため、覆土のほとんどが残存しない。とくに斜面下方の南西部は検出に至らなかった。平面形は方形を呈し、東西6.70m、南北6.84mを測る。カマド東側の床面からまとまって遺物が出土している。

覆土: 大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されな。

柱穴: 4基検出。径60～90cm、深さ20～50cmを測る。

その他の遺構: 北西部のカマド西側に土坑を1基検出。

90×40cm、深さ27cmを測り楕円形を呈する

貼床: 厚さ12cm程度の暗褐色土が、検出範囲全面に認められる。

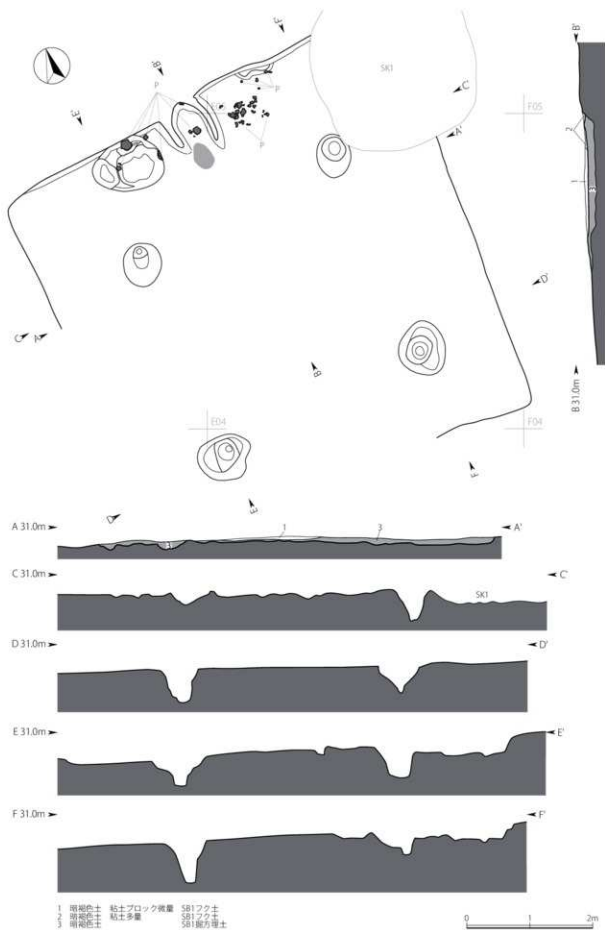
カマド: 北壁は中央に存在。上面は削平されてはいるが袖部・燃焼室などが遺存する。全長102cm、中央内寸幅41cm、中央外寸幅90cmを測る。

出土遺物(第9図・図版11)

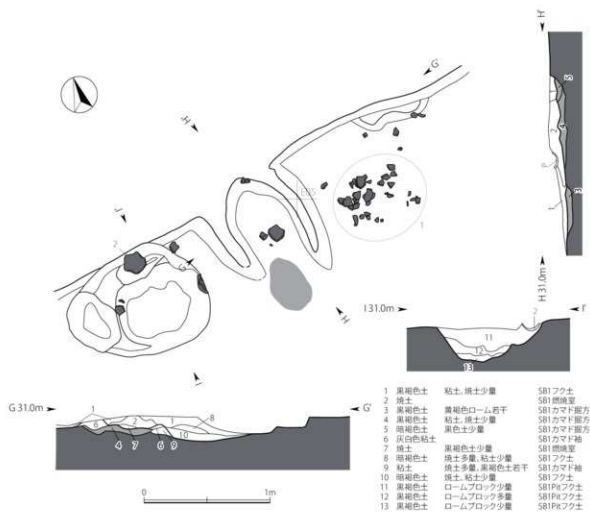
土器が6点図示された。1～5が駿東型甕で、6は丸底環の口縁部である。甕のうち1～4は球胴甕で、最も球胴化する段階以前の時期に位置づけられる。6は小破片ではあるが、口縁部下の屈曲が弱い。

所見

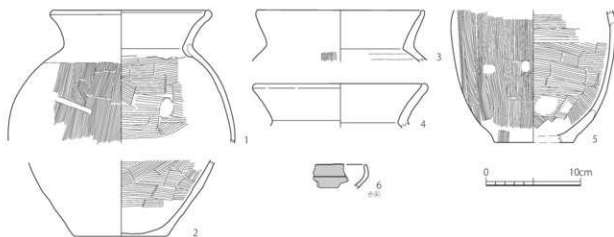
出土遺物や遺構の切り合いから、ほぼ7世紀前後の建物跡と考えられる。



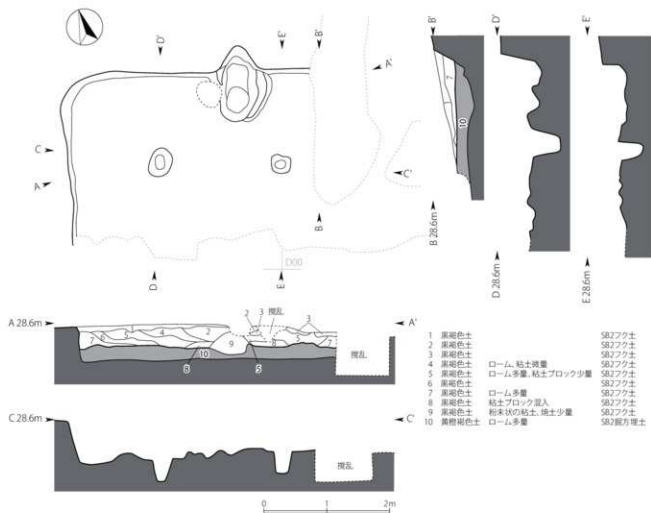
第7図 SB1 遺構実測図



第8図 SB1 カマド実測図



第9図 SB1 遺物実測図



第10図 SB2 遺構実測図

SB2

遺構 (第10・11図・図版3)

位置: C 01 グリッド

重複関係: (古) SK3・SK4→SB2 (新)

主軸方位: N-17.0°-E

残存状況: 東部及び南部は激しく覆瓦を受けており、建物北西部のみ残存し、方形を呈するものと考えられる。カマド燃焼室及び焚口付近からまもって遺物が出土している。

覆土: 大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 北側の2基検出。径約40cm、深さ35~50cm

貼床: 29cm程の厚さで黄褐色ロームが検出範囲全面に認められ、上面は硬化している。

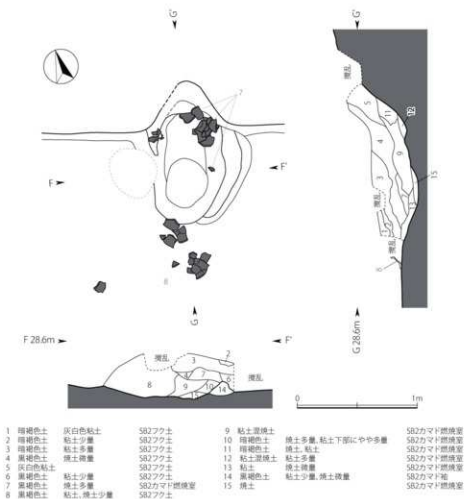
カマド: 北壁に存在。西側(左側)袖部付近の破壊が著しく右側の袖部・燃焼室のみが遺存する。全長119cm、中央内寸幅35cmが遺存する。

出土遺物 (第12図・図版11)

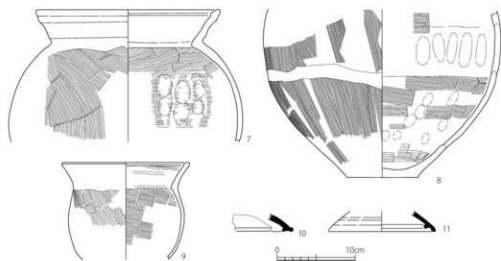
7~11の5点を図示した。7と8が大型の鞍車型球脚甕、9は小型甕、10と11は須恵器環蓋である。7と8の胴部は球脚に近い形態であるが、胴部外面のヘラミガキは認められない。10と11は須恵器環蓋に身受けのついた形態を呈し、7世紀後半の特徴をもっている。須恵器環蓋及び環が最も最小値となる段階である。

所見

出土遺物から、7世紀の建物跡と考えられる。



第11図 SB2 カマド実測図



第12図 SB2 遺物実測図

SB3

遺構（第13・14図・図版3）

位置：D03グリッド

重複関係：(古)SB3→SB19(新)

主軸方位：N-135°-E

残存状況：東壁はSB19より削平を受けているものの、壁溝は残存する。平面形は不整形な隈丸方形を呈し、東西3.48m、南北3.18mを測る。

覆土：大淵スコリアを少量含む黒褐色土による自然堆積層。

壁溝：幅30cm、深さ11cmの壁溝が全体をめぐる。

柱穴：検出されない。

その他の遺構：ピット2基検出。

貼床：中央付近には貼床はなく、東壁及び西壁付近のみ厚さ8cmの貼床が確認される。

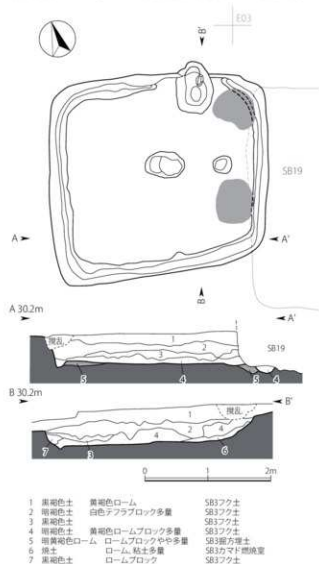
カマド：北壁やや東寄りに存在。掘り方のみ残存し、他は破壊を受けている。ただし、燃焼室と推定される場所に支

脚石が残されていた。

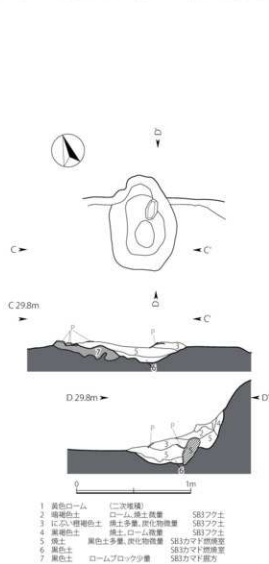
出土遺物（第15図・図版11・12）

12～32の21点を図示した。器種をみると、12～19の8点が甕類、20～32の13点が杯蓋類である。12～15は、緩く弓なりに外反する口縁部を有する駿東型長胴甕であり、16と17は底部周辺の破片であるが、形態や調整手法から前者と同じ駿東型長胴甕と判断した。18と19は、胴部外面に指頭押圧痕が顕著に残り刷毛目はない。内面には横の刷毛が施される。この形態と調整手法から、18と19の二点は、甲斐型小型甕の在地化したものと考えたい。

20と21は、信濃地域で生産され当地域に搬入された軟質須恵器と呼ばれる環である。形態は、底径が縮小した無高台環で、底部は回転糸切り難しされる。焼成は弱く軟質である。22は須恵器で深い体部をもつ箱環の形態を呈す



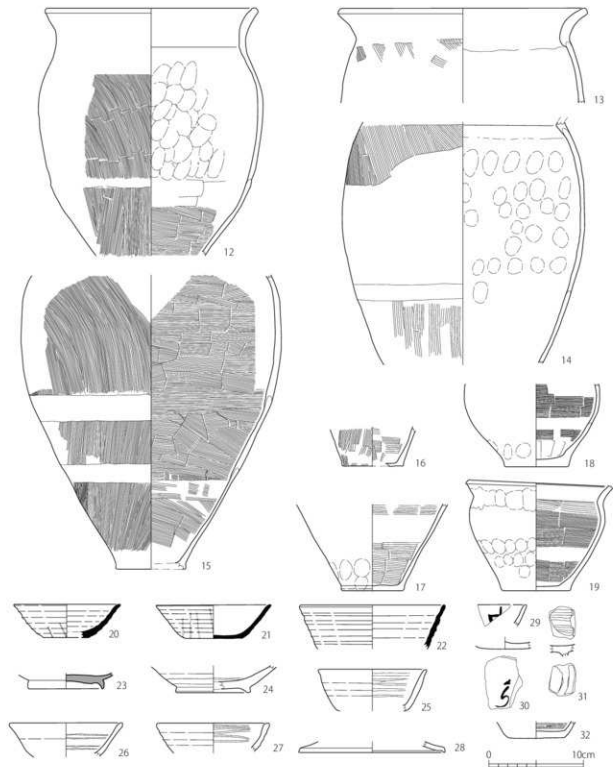
第13図 SB3 遺構実測図



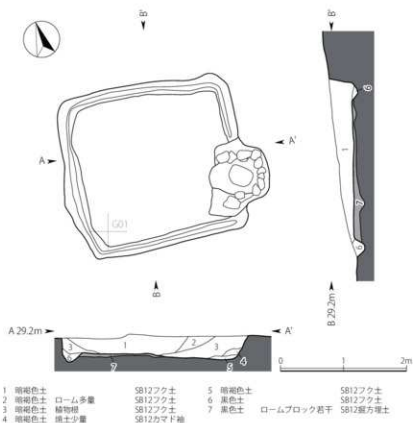
第14図 SB3 カマド実測図

る。8～9世紀前半の藤枝市助宗窯の製品と思われる。23の灰軸陶器碗は、退化した三日月の高台形状から黒笹90号窯式の新しい時期と推定される。24は灰軸陶器模倣の土師器碗で、体部下半には回転ヘラ削りがみられる。25～27の3点は鞍東型環の体部、32は底部破片である。25は比較的立ち上りが強く、箱環の形態をとどめ、内面

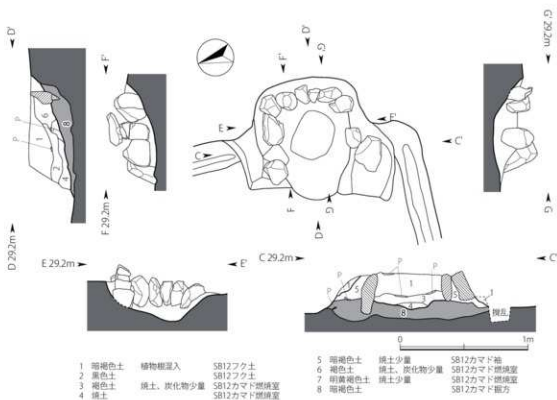
には横ヘラミガキが施される。見込みの状態は不明であるが、形態と調整からみて9世紀前半に位置づけられる。32は鞍東型環の底部周辺の破片で、底部手持ちヘラ削り、内面ヘラミガキを施すことから、25と類似した時期と思われる。26と27は体部が大きく開き底径が縮小した形態で、内面には複雑な横ヘラミガキを施す。この2点は



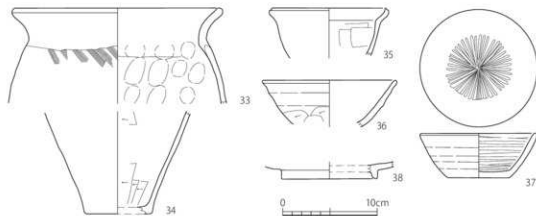
第15図 SB3 遺物実測図



第17図 SB 12 遺構実測図



第18図 SB 12 カマド実測図



第19図 SB 12 遺物実測図

SB 12

遺構 (第17・18図・図版3)

位置: G02 グリッド

重複関係: (古) SB 5 → SB 11 → SB 4 ・ SB 10 → SB 12 (新)

主軸方位: N - 94.0° - E

残存状況: 南側が削平を受けているものの立ち上がりは確認できる。平面形は隅丸方形を呈し、東西2.83m、南北2.66mを測る。

覆土: 大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 幅28cm、深さ14cmの溝が全体をめぐる。

柱穴: 検出されない。

貼床: 検出されない。

カマド: 東壁南寄りに存在。煙道及び袖部の端部が残存しないが、両袖及び燃焼室奥に20cm大の礫が芯材として配列されている。中央内寸幅45cm、中央外寸幅116cmを測る。

出土遺物 (第19図・図版12)

33～38の6点を図示した。器種の内訳は、33～35

は甕、36は鉢、37は環、38は高台付盤である。

33と34は大型の駿東型長胴甕で、33が口縁部から胴上半で口縁部が弓なりに大きく外反している。34は底部周辺である。刷毛目を僅かに残し、大半をナデ調整している。内面調整は、33が指頭押圧、34は横位の板ナデで仕上げている。35は小型甕で、緩やかに開く胴部から僅かに屈曲する口縁部にいたり、口唇部が尖る形態を呈する。全体に内外をナデ調整している。36は駿東型に伴う鉢である。口径は環よりやや大きいのが、形態・調整手法が類似している。その下半に手持ちヘラ削りを施す。37は駿東型環で、底径が縮小した形態を呈し、底部手持ちヘラ削りを施す。見込み部には放射状凹文、体部内面には横ヘラミガキが認められる。

所見

遺物の多くが混入しており土器から遺構の年代は決定できないが、切り合いから10世紀以降の建物跡と考えられる。

SB 10

遺構 (第20・21図・図版3・4)

位置: F 02・G 02 グリッド

重複関係: (古) SB 5 → SB 11 → SB 10 → SB 12 (新)

主軸方位: N - 10.5° - E

残存状況: SB 12による削平を受けていない北壁及び西壁については立ち上がりが残存するものの、大部分は掘方と壁溝が認められるのみである。平面形は、隅丸方形を呈すると考えられ、東西2.87m、南北2.88mを測る。

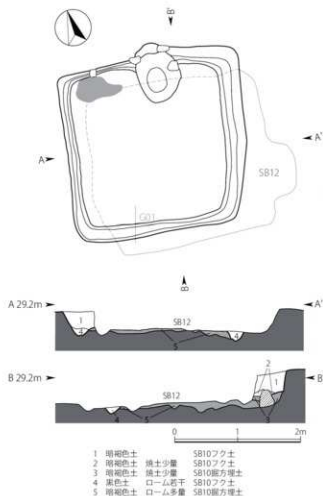
覆土: 大淵スコリアを含む自然堆積層。北西部床面には焼土が検出され、SB 12による削平部分にも広がるものと考えられる。

壁溝: 幅15cm、深さ19cmの溝が全体をめぐる。

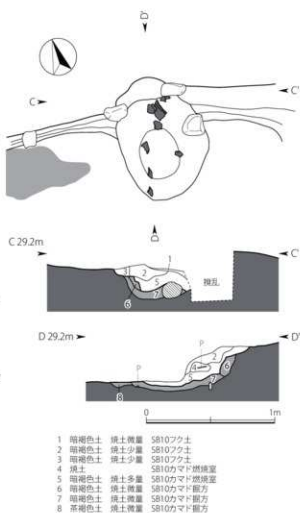
柱穴: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ19cm程度、全面に認められる。

カマド: 掘り方のみ検出される。芯材と考えられる礫が掘



第20図 SB 10 通構実測図



第21図 SB 10 カマド実測図

りに埋まる様に確認できる。

出土遺物（第22図・図版12・13）

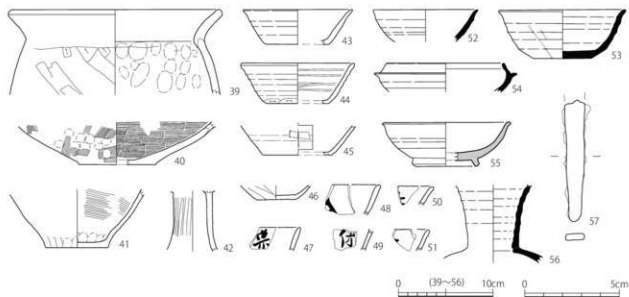
39～57の19点を図示した。大型甕の39と41は鞍東型長胴甕であり、特に39は緩く弓なりに屈曲する口縁部をもち、胴部外面は全面ヘラナデ調整である。40は、底部が大きく開く胴部をもつことから鞍東型球胴甕であろう。42は坏部と脚部下半を欠損する円筒形を呈する高环脚である。胎土は精選され、明赤褐色で内外ともに丁寧に調整される。

土師器環のうち43と44は鞍東型環、46は甲斐型環である。43の鞍東型環は体部が開き底径が縮小する段階であるが、44では体部下半に手持ちヘラ削りが認められる。46の甲斐型環は、体部外面下半に斜位のヘラ削りを施している。45の土師器碗は、手持ちヘラ削りにより高台を作りだしている。底部端を削るため、高台と底部が同一の面となる、擬似高台である。外面下半に「中」という文字

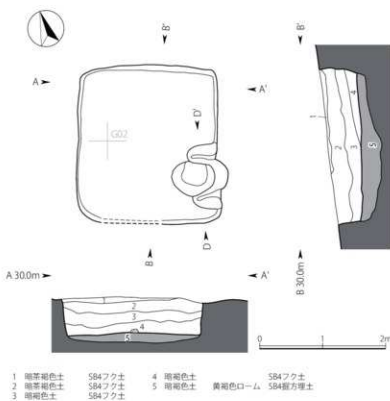
が刻書される。47～51の墨書は鞍東型環の外面に書かれている。52・53は須恵器無高台環で、体部は丸みをもつ。54は蓋受けをもつ環で、TK43・209段階の6世紀後半に位置づけられる。この1点のみ、他の土器とは隔絶する年代を示している。55は無軸の灰軸陶器碗である。体部は丸みをもち、高台は方形に近い三日月を呈している。体部の回転ヘラ削りは体部中位に達し、素地は灰オリブ色を示す。

所見

遺構覆土の残存は少ないものの、SB 10として扱われている遺物が多く、しかもその時期幅が大きい。これは発掘時における遺構認識の問題なども考えられ、建物の年代決定は難しい。SB 12にSB 10の遺物が混入している可能性を考えれば10世紀頃とすることもできるが確定的ではない。



第22図 SB 10 遺物実測図



第23図 SB 4 遺構実測図

SB 4

遺構 (第23・24図・図版4)

位置: G 02・G 03 グリッド

重複関係: (古) SB 5→SB 11→SB 4 (新)

主軸方位: N-108.0°-E

残存状況: 良好な状態で検出される。平面形は、隅丸方形

を呈し、東西 2.20 m、南北 2.52 mを測る。

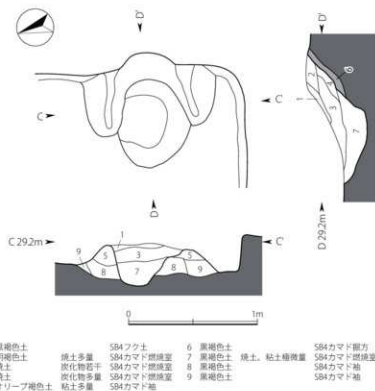
覆土: 大溜スコリアを含む自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

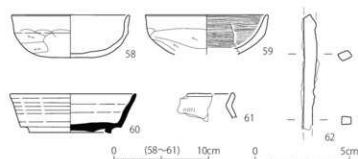
柱穴: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が厚さ 32cm 程度、全面に認められる。

カマド: 東壁南寄りに存在。両袖及び燃焼室が残存する。



第24図 SB4 カマド実測図



第25図 SB4 遺物実測図

全長90cm,中央内寸幅56cm,中央外寸幅102cmを測る。

出土遺物(第25図・図版14)

土師器環(58・59)、須恵器高台環(60)、小型甕(61)と、鉄鏝(62)を図示した。

58・59の土師器丸底坯は、口縁部回転横ナデ、体部外面手持ちヘラ削り、59の内面は丁寧なヘラミガキを施す。

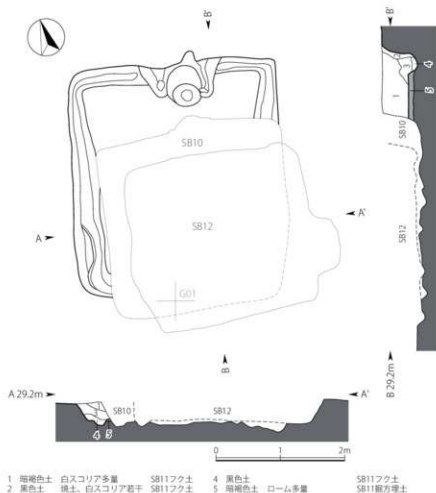
60は方形高台、体部の立ち上りは強く「コ」字状の形態を呈する。口径が13.8cmに対し、器高は4.1cmと低い。底部は回転ヘラによる切り離しである。

61は緩く「く」字に屈曲する小型の甕である。口縁部及び周辺が回転横ナデ調整を受けている。

62は鉄鏝の頭部と思われ、長さ5.9cm、断面は方形である。

所見

出土した遺物の時期幅が大きく、建物跡の年代を示すものが明らかでない。ただし、切り合いからSB11より新しい10世紀以降と考えられる。



第26図 SB 11 遺構実測図

SB 11

遺構（第26・27図・図版3・4）

位置：F 02・G 02 グリッド

重複関係：(古) SB 5 → SB 11 → SB 10 → SB 12 (新)

主軸方位：N - 15.0° - E

残存状況：SB 10による削平を受けていない北壁及び西壁周辺のみ残存する。平面形は、長方形を呈し、東西 3.27 m、南北 3.62 mを測る。

覆土：大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝：幅 34 cm、深さ 15 cmの溝が検出範囲全面に認められる。

柱穴：検出されない。

貼床：黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ 9 cm 程度、検出範囲全面に認められる。

カマド：北壁ほぼ中央に存在。煙道、袖、燃焼室が良好な状態で検出。両袖のそれぞれの端部に芯材として礎が配置されている。全長 87 cm、中央内寸幅 55 cm、中央外寸幅 101 cmを測る。カマド燃焼室付近からまとまって遺物が

出土している。

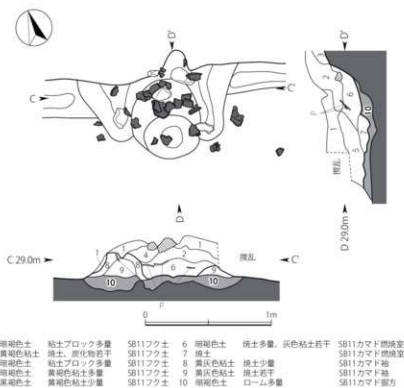
出土遺物：(第28図、図版14)

63は鞍車型長胴甕で、大きく湾曲する口縁部で口唇部はわずかに肥厚している。斜位の刷毛目調整後に丁寧なナデにより仕上げている。胴部上半のみの破片であるが、ナデ調整が優位であることが端的にみてとれる。64は鞍車型鍋といわれる口径が 40 cm に達する大型の煮沸具で、口縁部は緩く外反している。外面は縦刷毛目、内面は指押圧によりなでている。ともに丁寧な調整を施す。65の土師器鉢は、甲斐型の环系鉢といわれるもので、体部がわずかに丸みを持ち底部はヘラ削りされる。坯より大きく口径は 20.2 cm を測る。66は鞍車型環である。

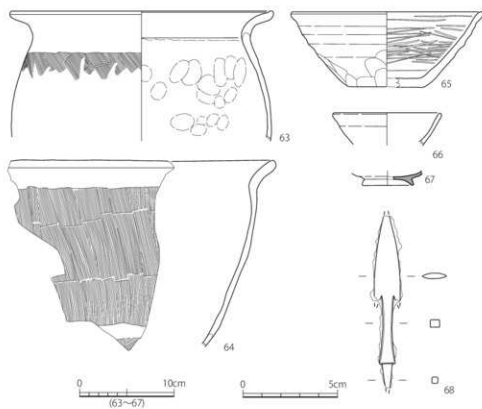
67は灰軸陶器碗で、高台は細長い三角形で径 5.6 cm と比較的小型である。

所見

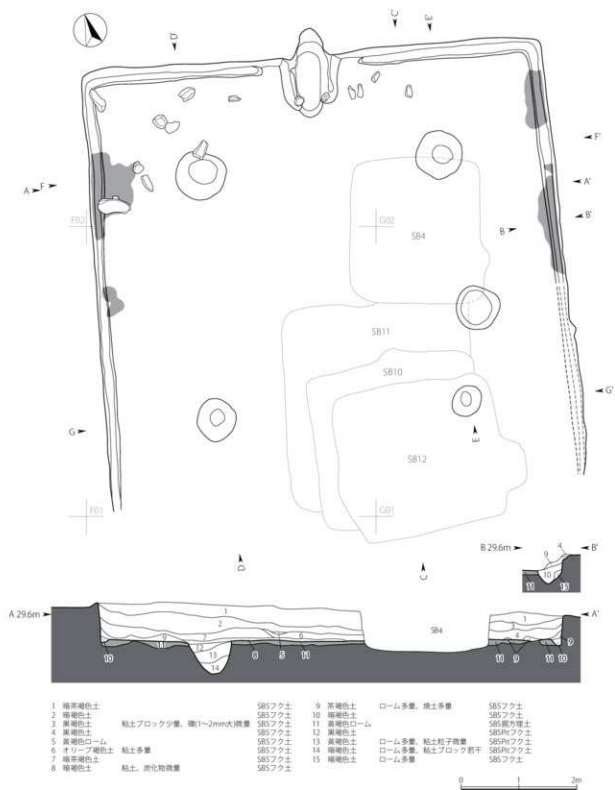
65の鉢から、9世紀後半の建物跡と考えられる。



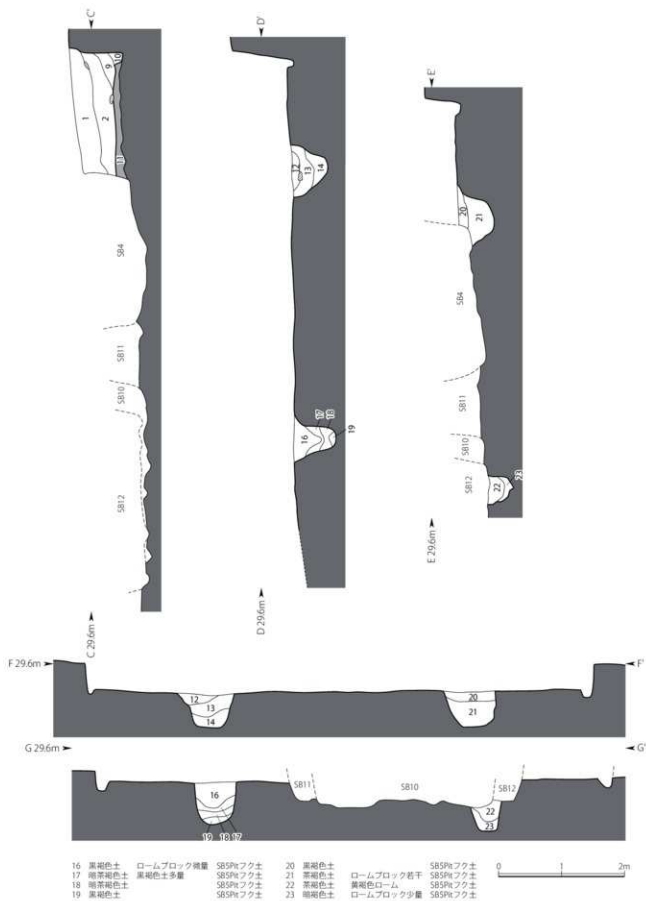
第27図 SB 11 カマド実測図



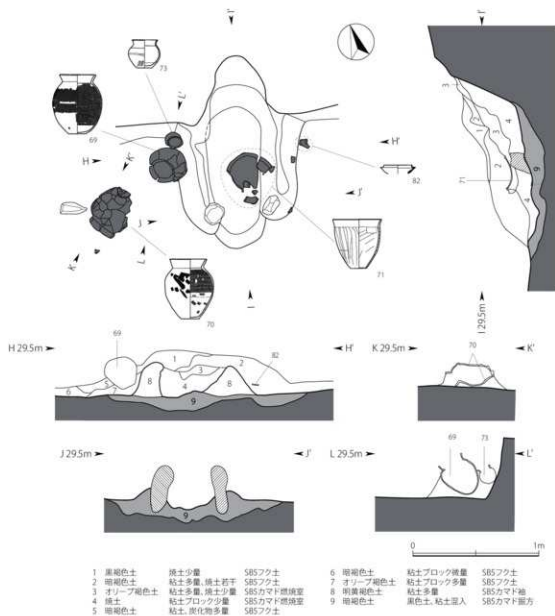
第28図 SB 11 遺物実測図



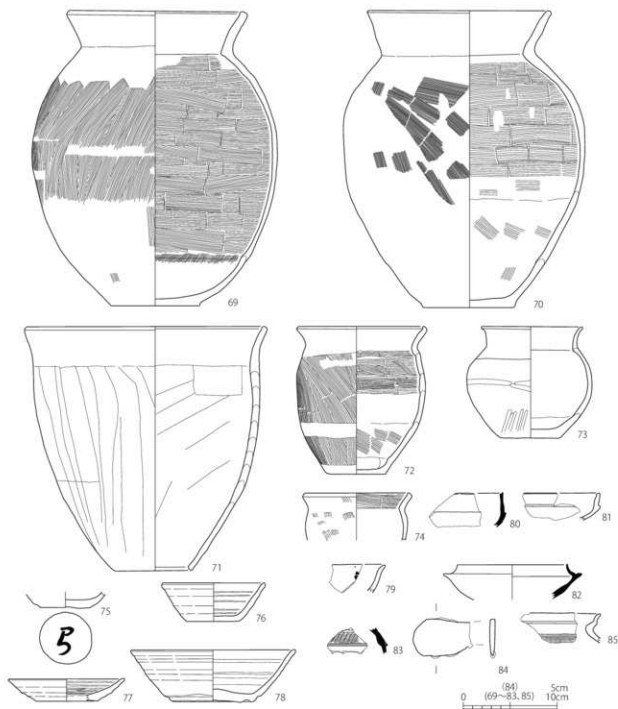
第29図 SB5 遺構実測図(1)



第30図 SB5 遺構実測図(2)



第31図 SBS カマド実測図



第32図 SB5 遺物実測図

SB5

遺構 (第29・30・31図・図版5)

位置：F 02・F 03・G 02・G 03 グリッド

重複関係：(古) SB5→SB11→SB10→SB12(新)

主軸方位：N-14.0°-E

残存状況：南側が削平を受けている。平面形は、東西 8.08 m、南北は検出範囲最大値で 7.59 m を測る比較的規模の大きい方形を呈する。カマド周辺からは、数個体の甕が方形に近い状態で出土している。

覆土：上層には大澗スコリアを多量に含む暗茶褐色土が堆積しているが、床面付近の下層大澗スコリアは少量となる。東壁及び西壁付近に焼土が点在するが、炭化材などは認められず焼失建物と断定するには至っていない。

壁溝：幅 22cm、深さ 12cm の溝が検出範囲全面に認められる。

柱穴：4 基検出。径 50～90cm、深さ 60～80cm を測る。その他の遺構：ピット 1 基検出。

貼床：黄褐色ローム土が厚さ 14cm 程度、検出範囲全面に認められる。

カマド：北壁ほぼ中央に存在。煙道、袖、燃焼室が残存し良好な状態で検出。両袖の端部に芯材として礫が配置されている。全長 154cm、中央内寸幅 42cm、中央外寸幅 94cm を測る。

出土遺物（第 32 図 図版 14・15）

土器類 16 点、鉄製品 1 点を図示した。鉄製品は 84 の板状を呈するものである。

土師器大型甕 2 点（69・70）、土師器甕 1 点（71）、土師器小型甕 3 点（72～74）、土師器杯 5 点（75・76・78・79・81）、須恵器杯 2 点（80・82）、土師器皿 1 点（77）、須恵器甕 1 点（83）、S 字状口縁甕 1 点（85）である。

69 と 70 は駿東型球胴甕で、69 は口唇部の肥厚が認められ、胴部内外が刷毛目調整され駿東型球胴甕の特徴を良好にそなえている。一方の 70 は、胴部外面の調整は刷毛目よりナデ調整が優位であり、内面の接合部位より下半もナデが多くを占めている。両者ともに底部の木葉痕が顕著に認められる。

71 の甕は丸みを持つ長胴で、弓なりにわずかに外反する口縁部を持っている。外面には輪積み成形による凹凸が顕著に認められる。口唇部はわずかに肥厚する。調整は内外ともにヘラナデにより、丁寧に仕上げられている。口縁部の内外は回転横ナデ調整を受けている。煮沸形態の土器としては、焼成は軟質で艶い印象をうける。

72～74 は土師器小型甕である。72 の口縁部は「く」字に屈曲し、口唇部が内傾している。内外ともに刷毛目調整され、胴部は丸みをもっている。この 72 は、口縁部形態と調整手法から、駿東型長胴甕の小型化した系譜のものと考えられる。73 は完形の小型甕で、口縁部の屈曲が強く、弓なりに外反し、胴部は球胴を呈する。全体がヘラナデとヘラミガキで仕上げられている。形態・手法ともに在地の土器とは異なる。74 も 72 同様、口縁部の屈曲の強い「く」字状口縁の小型甕である。胴部上半は丸みをもち、外面は荒い刷毛目が残るが大半はナデられている。

75 は駿東型杯で底部が残存する。底部には中央部に小口痕を残し、周辺をヘラ削りする。底部に一文字墨書がみられ、「弓」または「臣」の可能性がある。76 も駿東型杯で、体部が大きく開き底部の縮小化した形態をしている。内面の調整は横位の荒いヘラミガキ、外面は工具によるノ

タ目みられる。底部は木口痕の周囲をヘラ削りしている。79 は口縁部の小破片で、外面に黒痕が認められる。

77 は土師器皿である。器高 2.4cm で、体部はわずかに丸みをもち大きく開く。内面には荒いヘラミガキが認められる。

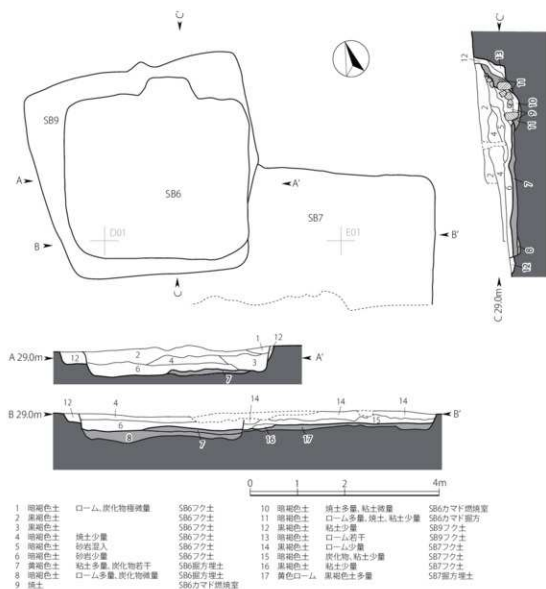
78 の土師器高台杯は須恵器の模倣形態で、直線的に大きく開く体部をもち口径が 17.6cm の大型品である。削出高台は、手持ちヘラ削りにより作り出されており、高台中が一定ではない。体部外面は荒い横位ノタ目、内面は丁寧にナデ後、ヘラミガキを施している。

80 は須恵器杯身である。蓋受けの張り出しはわずかに認められる程度で貧弱な形態をなす。蓋受けの立ち上りは直立し、口唇部は外側に尖る。体部下半には、回転ヘラ削りが施される。

82 の須恵器杯は、蓋受けが弓なりに立ち上がる口縁部をもち、体部下半は回転ヘラ削りが認められる。83 は須恵器甕の胴部破片で、外面に三角形の凸帯をもちその上に櫛描波状文を施している。

所見

切り合い関係及びカマド周辺の出土遺物から、7 世紀の建物跡と考えられる。



第33図 SB6・9・7 重複関係図

SB6

遺構(第33・34・35図・図版4)

位置: D 02 グリッド

重複関係:(古)SB41→SB7→SB9→SB6(新)

主軸方位:N-17.5°-E

残存状況:良好な状態で検出されている。平面形は隅丸方形を呈し、東西3.93m、南北3.50mを測る。

覆土:大淵スコリアを少量含む自然堆積層。

壁溝:検出されない。

柱穴:検出されない。

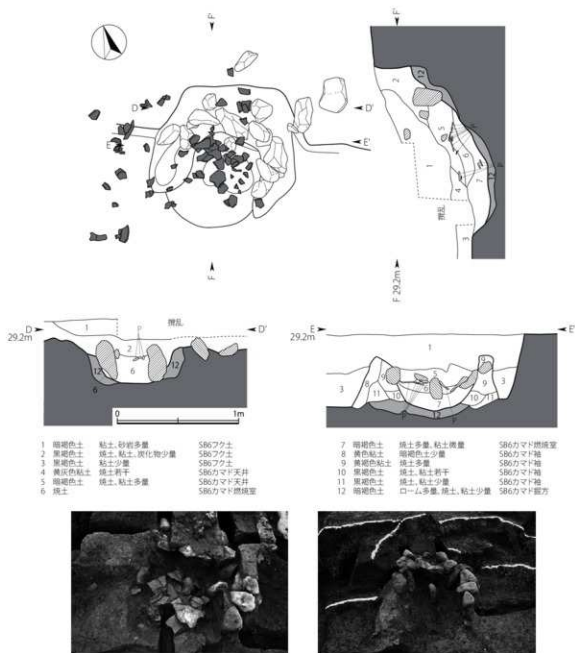
貼床:黄褐色ローム土が厚さ13cm程度、住居跡南側を中心に認められる。

カマド:北壁ほぼ中央に存在。袖、燃焼室が残存し、両袖及び燃焼室奥周辺に20cm大の礫及び砂岩が点在し、芯材として配列されていたと考えられる。燃焼室中央に支脚石が検出された。全長117cm、中央内寸幅50cm、中央外寸幅120cmを測る。カマド周辺からは、燃焼室を中心に多数の土師器片が出土している。

出土遺物(第36・37図 図版15・16・17)

土器類を35点(86~120)、鉄製品を1点(121)図示した。

土師器大型甕(86~92・94~96)10点、土師器小型甕(93・97~101)6点、鞍車型環(102~111・



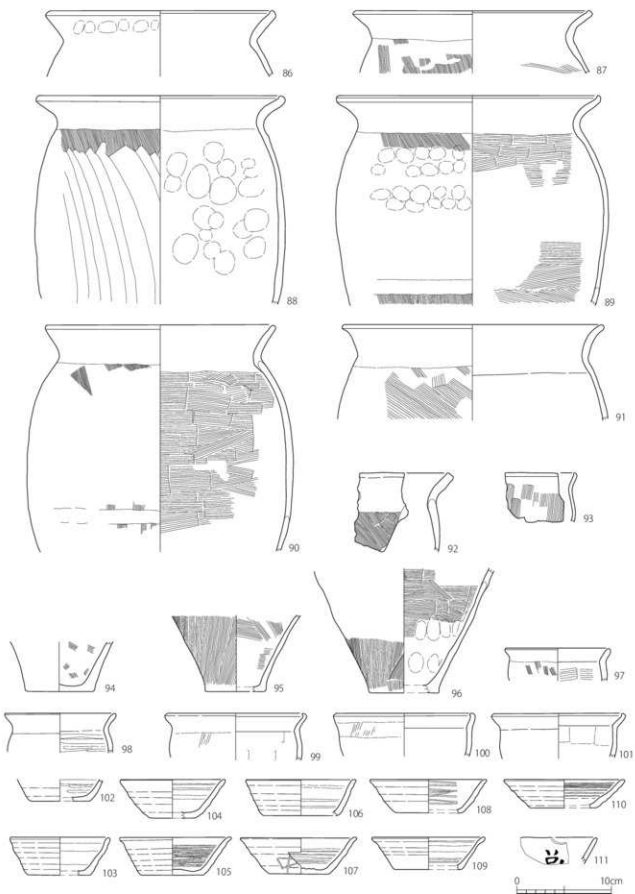
第35図 S86 カマド実測図

は不能であるが、刷毛目調整の例は少なく99でわずかに残される程度である。特に、98はロクロク成形であり、内外に回転により生じたナデ調整が顕著にみられる。内面は丁寧な横へらミガキが施される。

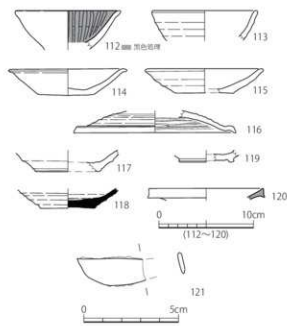
11点の鞍東型環は、形態から大きく三つに分けられる。(A)箱環の退化したものでわずかに体部の開きが大きくなる103・106、(B)底部の縮小化がすすんだ形態104・105、(C)底部縮小化が最大に達し、かつ器高も低くなる形態107・110の三者が認められる。体部は横へらミガキが施され、形態ごとの差はみられない。底部は

へら削りを受けている。107は体部下半に「中」の刻書が認められる。また111は墨書土器であるが墨痕は薄く、文字は判読できない。

土師器皿は114・115ともに法量の差は少なく、形態も類似する。底部はへら削りにより仕上げられる。117の土師器高台環は、手持ちへらケズリによるもので、体部は大きく開く。この高台手法はS B 10の45、S B 05の78にも認められる。121の鉄製品は先端が弧状を呈する板状製品である。両端部断面が丸みをもつことから、刃物ではないと推定される。



第36図 SB6 遺物実測図(1)

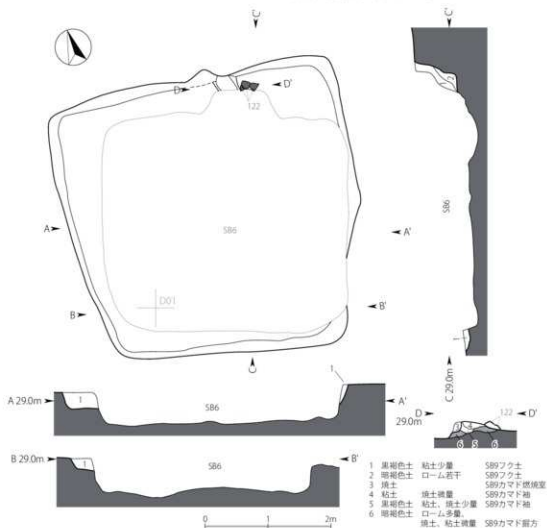


第37図 SB6 遺物実測図(2)

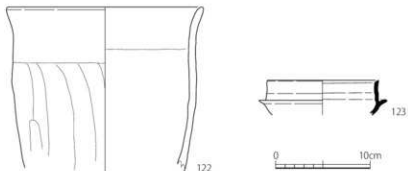
所見

大型・小型の甕類については、前述の通りナデ調整優位の手法を認めることができる。さらに鞍東型の球胴甕を伴わないことから、9～10世紀に位置付けられる。鞍東環は大きく三つの形態が指摘された。(A)が9世紀中頃、(B)が9世紀後半～10世紀初頭、(C)を10世紀においた。117の手持ちヘラ削り高台は、静岡県東部地域において鞍東型環の最終段階の10世紀の土器に伴って出土する。これは出土量が限られているため明確な年代観は検討されていないが、9世紀前半に盛行する藤枝市助宗窯産のロクロ回転による削出し高台手法とは連続しない。98は信濃国諏訪地域のロクロ成形甕で、信濃国から美濃国にかけて東山道に分布する。生産された時期は10～11世紀である。

以上のように、出土遺物は、一部114や115の土師器皿のように後出の要素として時期差はみとめられるが、おおよそ10世紀の土器群として位置づけられることから当該期の建物跡と考えられる。



第38図 SB9 遺構実測図



第39図 SB9 遺物実測図

SB9

遺構 (第33・38図 図版4)

位置: C 02・D 02 グリッド

重複関係: (古) SB 41 → SB 7 → SB 9 → SB 6 (新)

主軸方位: N - 4.0° - E

残存状況: 住居跡内部の殆どを SB 6 に削平されている。

平面形は不整形な方形を呈し、東西 4.64 m、南北 4.37 m を測る。

覆土: 大淵スコリアを少量に含む自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

貼床: 検出されない。

カマド: 北壁ほぼ中央に存在。右袖の一部が残存するのみ

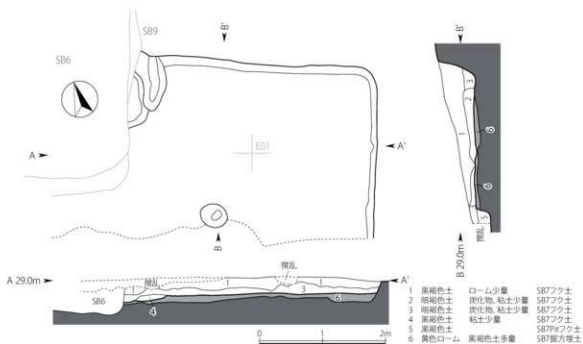
で、規模、構造については不明。

出土遺物 (第39図 図版17)

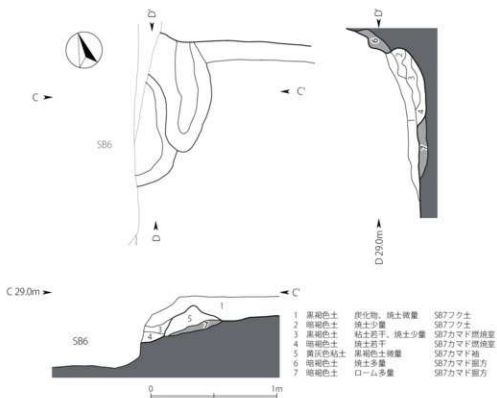
土師器甕 (122)、蓋受けの付く須恵器環 (123) を図示した。122 は、甕の上半部で、わずかに外反する口縁部の円筒形を呈し、胴部調整は縦ヘラナデを施す。SB 5 の 71 と類似した形態と調整手法がみられる。123 の須恵器環は、受部が直立する。蓋受けの口唇部が内傾してシャープに面取りされている。123 は 6 世紀初頭と推定される。

所見

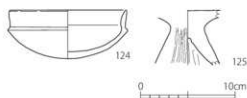
出土遺物から古墳時代後期の建物跡と考えられる。



第40図 SB7 遺構実測図



第41図 SB7 カマド実測図



第42図 SB7 遺物実測図

SB7

遺構（第33・40・41図 図版4）

位置：D 02・E 02 グリッド

重複関係：(古) SB 41→SB 7→SB 9→SB 6 (新)

主軸方位：N-20.5°-E

残存状況：住居跡北西部はSB 6、SB 9により、また南側は攪乱により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられる。検出範囲最大で東西5.12mを測る。

覆土：大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝：検出されない。

柱穴：検出されない。

その他の遺構：ピット1基を検出。

貼床：黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が厚さ

12cm程度、検出範囲全面に認められる。

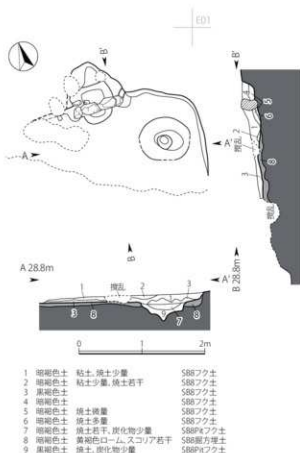
カマド：北壁に存在し、左側半分がSB 9により削平されている。右袖は残存し、カマドの全長122cmを測る。

出土遺物（第42図 図版17・18）

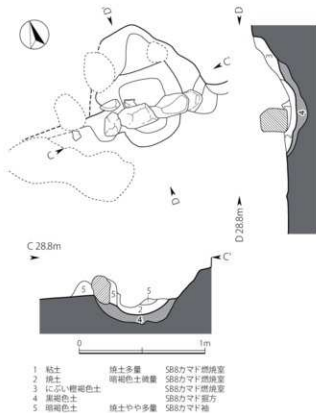
土師器の環（124）と高環（125）である。124は身受けを持つ須恵器杯の模倣形態であり、鐔は小さく表現されるが、全体が忠実に模倣されている。125は、外面が丁寧にヘラミガキされる。

所見

出土遺物や遺構の切り合いから古墳時代後期の建物跡と考えられる。



第43図 SB8 遺構実測図



第44図 SB8 カマド実測図

SB8

遺構 (第43・44図 図版5)

位置: D 01 グリッド

重複関係: なし

主軸方位: N-4.0°-E

残存状況: 攪乱による削平を受けており、建物跡北東部のみ検出される。平面形は長方形を呈するものと考えられる。

覆土: 大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: ピット1基を検出。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が厚さ12cm程度、検出範囲全面に認められる。

カマド: 北壁に存在する。両袖のそれぞれの端部に芯材として腰が配置され、その芯材を横渡するように2個の腰が検出された。全長102cm、中央内寸幅94cm、中央外寸幅53cmを測る。

出土遺物 (第44図 図版17)

カマド付近からは平安時代前半の土師器片が出土しているが図化できるものはなかった。

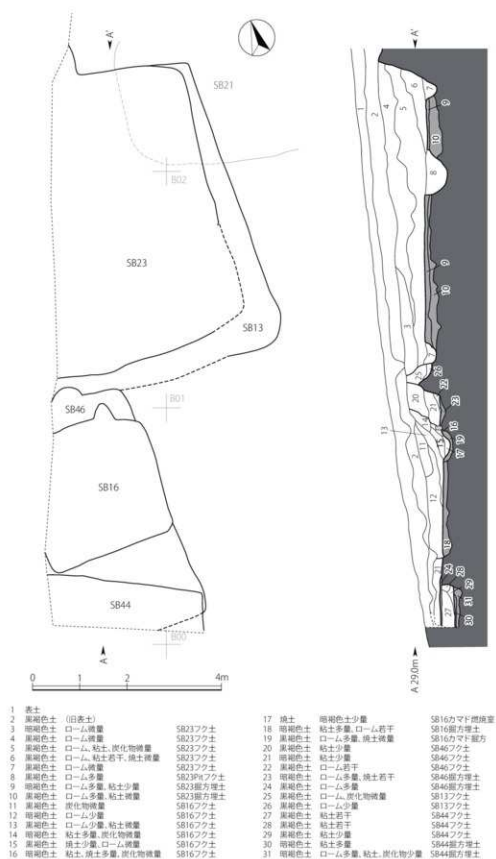


第45図 SB8 遺物実測図

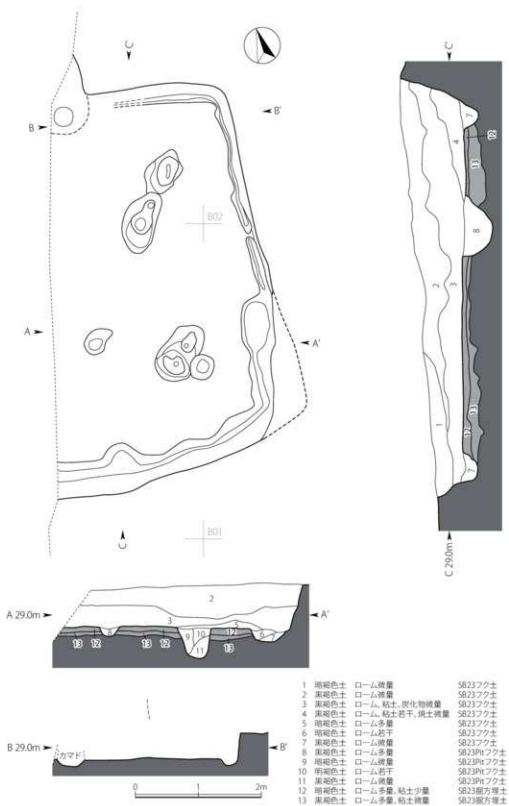
126の鉄製品を1点図示した。鉄釘と考えられる。

所見

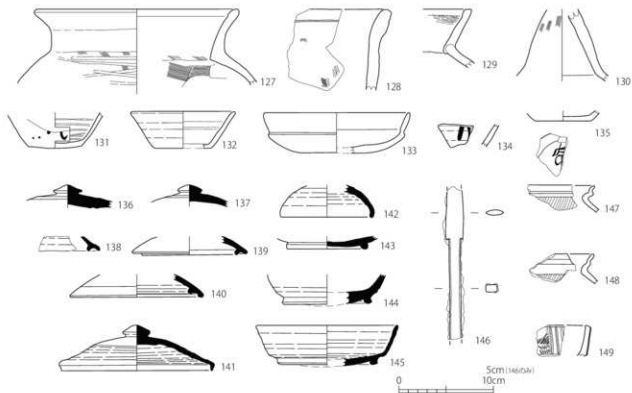
出土遺物から9世紀の建物跡と考えられる。



第46図 SB23・16・46・13・44 重複関係図



第47図 SB 23 遺構実測図



第48図 SB 23 遺物実測図

SB 23

遺構 (第46・47図 図版6)

位置: A 02・A 03 グリッド

重複関係: (古) SB 13→SB 23 (新)

主軸方位: N-3.0°-E

残存状況: 住居跡西側の調査区域外は削平されている。平面形は不整形な方形を呈するものと考えられる。

覆土: 大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝: 幅 32cm、深さ 11cmの溝が検出範囲全面に認められる。

柱穴: 東側の柱穴 2 基が検出。径 80～100cm、深さ 30～50cm を測る。

その他の遺構: ビット 3 基を検出。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土及び黒褐色土が厚さ 36cm 程度、検出範囲全面に認められる。

カマド: 北壁に存在するが削平が著しく、燃焼室の掘り込みを検出したのみである。

出土遺物 (第48図 図版18)

土器類 22 点、鉄鎌 1 点を図示した。内訳は次の内容である。土師器駿東型甕 2 点 (127・129)、銅 (128)、土師器高台 1 点 (130)、土師器環 5 点 (131～135)、須恵器環蓋 7 点 (136～142)、須恵器高台環 3 点 (143～145)、S 字状口縁甕 2 点 (147・148)、弥生時代壺口縁

1 点 (149)、鉄鎌 1 点 (146)。

駿東型甕の 2 点 (127・129) は、胴部から口縁部にかけて強く屈曲し、口唇部が肥厚する。127 では胴部を横へらミガキしている。これらはいずれも球胴甕の特徴をもっている。131・132・134・135 は駿東型環であり、131・134・135 の 3 点は文字の判読は不能であるが、墨書が認められる。132 は底径が縮小した段階で、内面にへらミガキを施し、全体に丁寧な調整をしている。

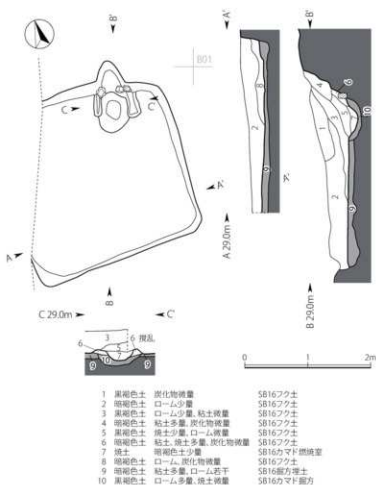
須恵器環蓋は形態差が大きく、覆宝珠のつくもの 3 点 (136・137・141) と、身受けをもつもの 3 点 (138・139・140) 身受けと摘みを持たないもの (142) に分けられる。

須恵器高台環の 3 点 (143～145) は、丸底部に高台をつけた形態で、144 と 145 が高台より底が突出する。

146 の鉄鎌は細長い形状で鎌身でやや巾広となる。断面は鎌身の両端が丸い扁平、頸部は方形を呈する。

所見

出土遺物は時期幅が大きいが、須恵器は 7 世紀中ごろから 8 世紀初頭のものが見られる。根拠に乏しいがそのころの建物跡と考えられる。



第49図 SB 16 遺構実測図

SB 16

遺構(第46・49図 図版6)

位置: A 01 グリッド

重複関係: (古) SB 44 → SB 46 → SB 16 (新)

主軸方位: N - 1.5° - W

残存状況: 住居跡西側は調査区域外となる。平面形は不整形な隅丸方形を呈するものと考えられる。

覆土: 大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が厚さ 10cm 程度、検出範囲全面に認められる。

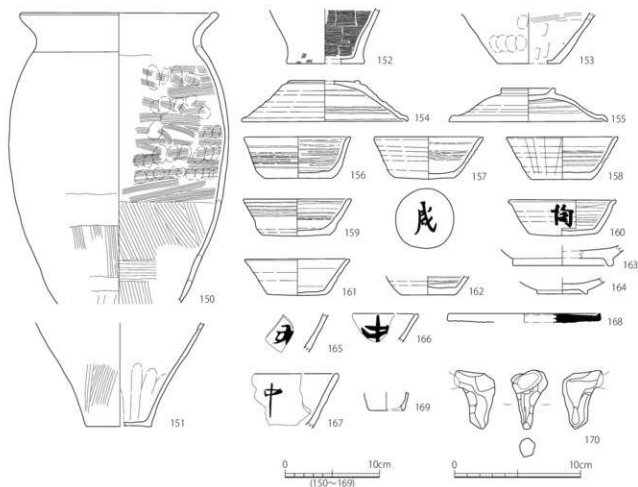
カマド: 北壁東寄りに存在する。燃焼室の掘り込みと袖部の一部が検出され全長約 115cm、中央内寸幅 48cm を測る。

出土遺物(第50図 図版19・20)

土器類 20 点(150 ~ 169) と土馬と思われる土製品(170) を図示した。

大型土師器甕のうち鞍車型長胴甕は 150 ~ 152 の 3 点である。153 については、底部からの立上る胴下半の形態からみて、鞍車型球胴甕の可能性が考えられる。150 は底部を欠損するが、ほぼ全体の形態を知り得る資料である。口縁部は丸く外反し、口唇部は肥厚、胴部は丸みをもった弧状を呈する。接合部下半の外面に刷毛目が一部残される。内面は横刷毛目と指頭押圧調整、下半は荒い刷毛目で調整する。接合部ごとに異なる調整を施す。

154 の土師器坏蓋は、藤枝市助宗家で生産された須恵器坏蓋削出し環状紐を模倣したものである。模倣は須恵器の手法を忠実に受け継ぎ、特に削出し高台に反映されている。高台の削りは三つの段階が認められ、両端、上面、外側の隅の順に削りだしている。全体に化粧土がかけられており、紐から肩部の一部が剥落している。端部に短い身受



第50図 SB16 遺物実測図

けが伴う。

155の環状紐蓋もまた須恵器の模倣であり、紐は貼付けられている。

土師器環は、墨書土器も含めてほとんどが駿東型環である。156・159は内面の放射状暗文を消失するが箱環の形態をとどめている。157・160はやや底径の縮小化がはじまった段階、158は底径の縮小が進行する形態を示している。これらの調整は丁率であり、内面は横へらミガキを施している。163・164は須恵器高台環を模倣した土師器である。

墨書土器は、157・160を含め5点出土する。ほとんどが駿東型環と思われ、墨痕が明瞭なものが多い。文字の判

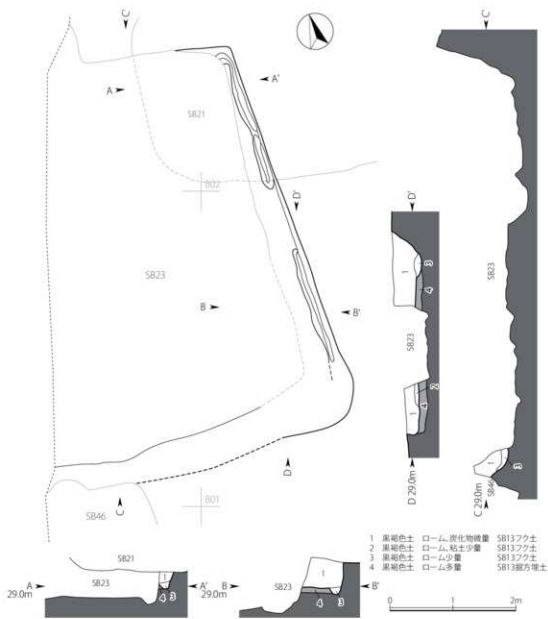
読される例は少ないが、166・167は「中」と判断される。

168の須恵器皿は静岡県東部では出土例の少ない例であり、藤枝市助宗窯の製品と思われる。

祭祀遺物と考えられるのが、169の手づくね土器と、170の土馬脚と思われる破片である。169は、円筒形を呈し内面は指頭押圧で成形し、全体はナデ調整される。

所見

出土遺物の年代は9世紀前半と比較的まとまっており、当該期の建物跡と考えられる。



第51図 SB 13 遺構実測図

SB 13

遺構（第46・51図 図版6）

位置：B 02 グリッド

主軸方位：N-1.5°-W

重複関係：(古) SB 13 → SB 23 (新)

残存状況：住居跡の大半がSB 23により削平されており、東壁周辺のみ残存する。平面形は不整形な方形を呈するものと考えられる。カマド等燃焼施設は不明。

覆土：大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝：幅21cm、深さ9cmの溝が検出されている。

柱穴：検出されない。

貼床：黄褐色ローム土が混入した黒褐色土が厚さ16cm程度、検出範囲全面に認められる。



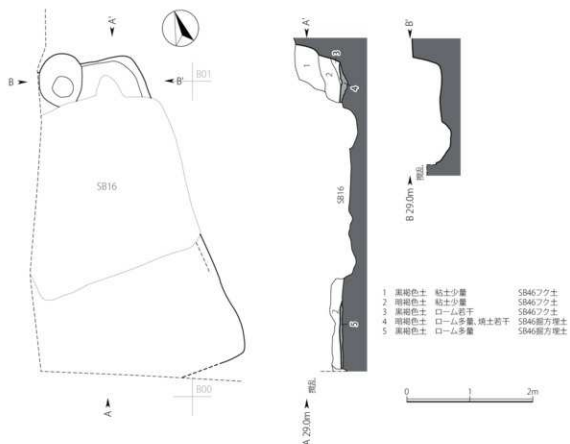
第52図 SB 13 遺物実測図

出土遺物（第52図 図版20）

土器が2点出土したのみで、171はS字状口縁張、172は器高が低く底部が厚い土師器小皿で、底部回転糸切り離し未調整である。

所見

重複するSB 23に殆ど削平されているため時期は不明である。



第53図 SB 46 遺構実測図



第54図 SB 46 遺物実測図

SB 46

遺構 (第46・53図)

位置: A 01・A 02 グリッド

重複関係: (古) SB 44 → SB 46 → SB 16 (新)

主軸方位: N - 2.0° - W

残存状況: 建物跡西側及び南側は調査区域外となり、遺構の覆土の大部分はSB 16により削平を受けている。平面形は不整形な長方形を呈するものと考えられる。

覆土: 大淵スコリアを含む自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が厚さ7cm程度、検出範囲全面に認められる。

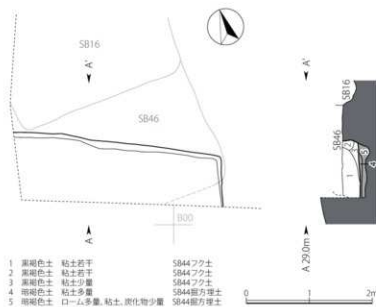
カマド: 北壁に存在する。燃焼室と考えられる掘り込みが検出されたのみである。

出土遺物 (第54図 図版20)

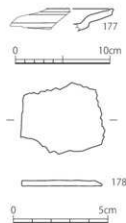
須恵器坏蓋 (173・174) と灰軸陶器瓶または長頸壺の口縁部 (175)、木葉痕を持つ土師器小型壺 (176) の底部の4点が出土した。

所見

切り合い関係から9世紀の建物跡と考えられる。



第55図 SB 44 遺構実測図



第56図 SB 44 遺物実測図

SB 44

遺構 (第46・55図)

位置: A 01・B 01 グリッド

重複関係: (古) SB 44→SB 46→SB 16 (新)

主軸方位: N-22.5°-E

残存状況: SB 46の掘方下層より検出。大部分は調査区外のため北東部の一部を検出したのみ。平面形は不整形な方形を呈するものと考えられる。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が混入した黒褐色土が厚さ12cm程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第56図 図版20)

出土遺物の多くは古墳時代前期の土師器片であったが図化できる資料はなかった。混入と思われる灰陶陶器の段皿を模倣した土師器 (177) が出土するが、小破片のため全体の形態等は不明である。

所見

図示できなかった土器片や遺構の平面形態から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

SB 14

遺構 (第57・58図)

位置: B 02・C 02 グリッド

重複関係: (古) SB 14→SB 20 (新)

主軸方位: N-11.5°-E

残存状況: 南西部がSB 20により削平されている。平面形は方形を呈し、東西3.58m、南北3.24mを測る。

覆土: 大淵スコリアを含む黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

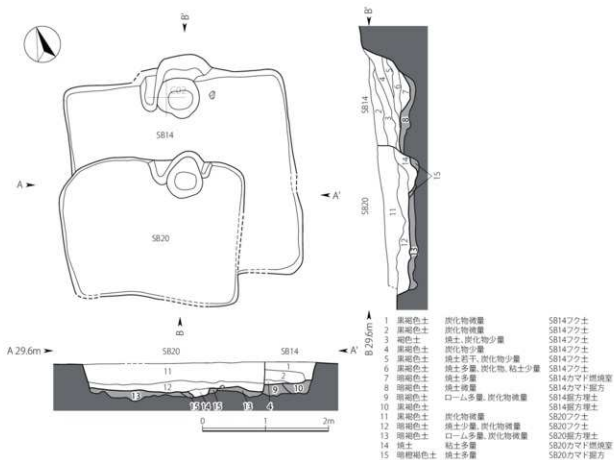
貼床: 黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が厚さ6cm程度、検出範囲全面に認められる。

カマド: 北壁中央に存在する。左袖及び燃焼室の掘り込みのみ残存する。全長100cm、中央内寸幅66cmを測る。

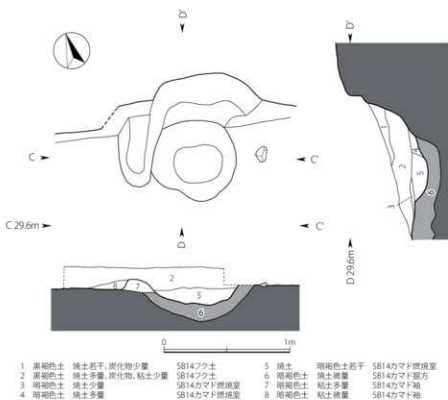
出土遺物 (第59図 図版20・21)

土師器大型甕4点 (179～182) 土師器鍋1点 (183) 土師器小型甕1点 (184) 土師器杯 (185～191) 土師器杯蓋1点 (192) が出土している。

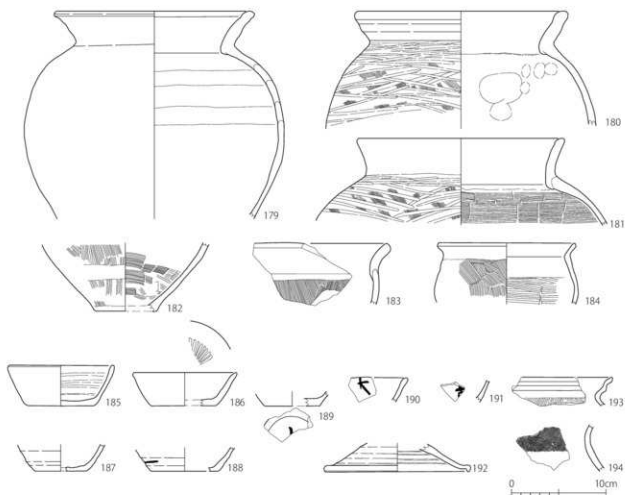
大型甕は4点すべてともに鞍東型球胴甕である。この甕は、内外刷毛調整で最も球胴化の進む8世紀前半では



第57図 SB 14・20 遺構実測図



第58図 SB 14 カマド実測図



第59図 SB 14 遺物実測図

外面全体にヘラミガキを施す。この手法が顕著に現れているのが、180と181である。しかし179においては刷毛目は一切見られず、内面はナデ調整を施す。口縁部は強く「く」字に屈曲し、口唇部を肥厚させる。刷毛目を残さない駿東型球胴甕はこれが初例である。

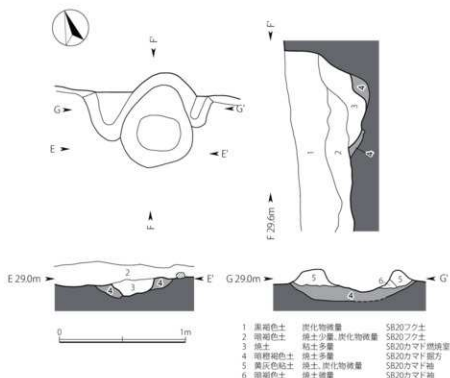
土師器小型甕184は、口縁部内側に稜をもつ「く」字状口縁で、やや胴が張り出す形態を呈する。刷毛目を多用することから、在地甕と考えられる。

土師器坏は188～191が黒書土器であり、形態・手法が観察できるのは185～188である。これら4点は駿東型坏で、形態は箱坏を呈する185、底径縮小開始段階が186・187・188の3点となっている。しかし、186の見込み部には放射状暗文が施され調整手法としては箱坏段階の痕跡を残している。

192の土師器坏蓋は、SB 16の環状紐蓋155に類似した形態を持っている。

所見

出土遺物から9世紀前半の建物跡と考えられる。



第60図 SB 20 カマド実測図



第61図 SB 20 遺物実測図

SB 20

遺構 (第57・60図)

位置: B 02・C 02 グリッド

重複関係: (古) SB 14 → SB 20 (新)

主軸方位: N - 180° - E

残存状況: 良好な状態で検出されている。平面形は隅丸方形を呈し、東西2.94 m、南北2.30 mを測る。

覆土: 大淵スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が厚さ16cm程度、全面に認められる。

カマド: 北壁やや東寄りに存在する。両袖及び燃焼室が残存する。全長75cm、中央内寸幅57cm、中央外寸幅93cmを測る。

出土遺物 (第61図 図版21)

裏の底部から胴下半の破片2点 (195・196)、土師器杯1点 (197)、灰釉陶器口縁部1点 (198)、土製模造品1点 (199) を図示した。

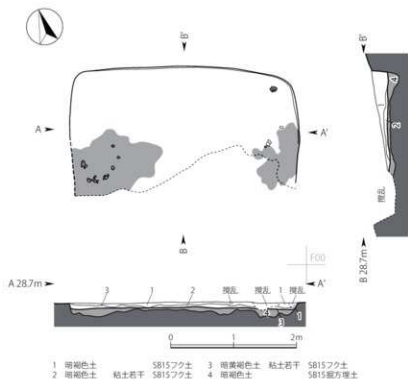
195の裏は比較的小型で、接合痕の上下で内外の調整の相違が顕著に見られる。196は外面指頭押痕が残り、内面は板ナデを施す。

197は駿東型環で、底部に木口痕を残し周囲をヘラ削りする。体部の立上りから底径縮小開始段階と思われる。

198は多口瓶または水瓶・浄瓶の口縁部である。口唇端部は水平に面取りされ、内面に軸を施す。胎土は乳灰色を呈し、黒笹14号式期の製品と類似している。

所見

出土遺物から9世紀前半の建物跡と考えられる。



第 62 図 SB 15 遺構実測図



第 63 図 SB 15 遺物実測図

SB 15

遺構 (第 62 図 図版 6)

位置: E 01 グリッド

重複関係: 重複する遺構は検出していない。

主軸方位: N - 18.0° - E

残存状況: 南側は削平されているため北側のみ残存する。平面形は隅丸方形を呈し、東西 3.66 m を測る。カマド等燃焼施設は不明。東壁中央付近及び西壁中央付近の床面に比較的広い範囲で焼土が検出された。

覆土: 大淵スコリアを少量含む暗褐色土による自然堆積層。壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

貼床: 暗褐色土が厚さ 12cm 程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第 63 図 図版 21)

土師器甕 2 点 (200・201) 土師器環 4 点 (203 ~ 205) が出土する。これらのうち 202 と 205 には墨書が

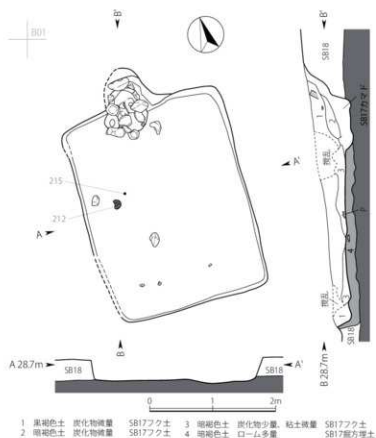
認められる。

200 は甕としたが、口縁部の緩やかな曲がりりと、刷毛目を高い位置から施すことから銅の可能性もある。201 は駿東型長胴甕の底部である。

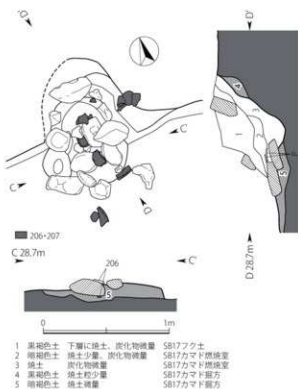
203 と 204 は駿東型環帯で、底径が縮小した段階の形態を呈する。内面は滑らかなヘラミガキを施す。

所見

出土遺物から 9 世紀後半から 10 世紀初頭の建物跡と推測される。



第64図 SB 17 遺構実測図



第65図 SB 17 カマド実測図

SB 17

遺構 (第64・65図 図版6)

位置: B 01 グリッド

重複関係: (古) SB 18 → SB 17 (新)

主軸方位: N - 1.0° - E

残存状況: 平面形は南北がやや長い長方形を呈し、東西 2.60 m、南北 3.34 m を測る。

覆土: 大溜スコリアを含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

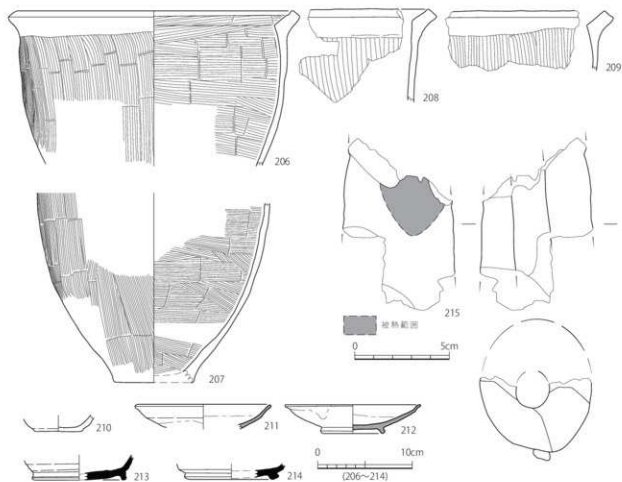
貼床: 黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が厚さ 16cm 程度、検出範囲全面に認められる。

カマド: 左袖と燃焼室の掘り込みが残存する。芯材として使用されていたと考えられる礎がカマド全体に点在している。全長 103cm、中央寸幅 51cm を測る。

出土遺物 (第66図 図版21・22)

土器類が9点 (206 ~ 214) と南東の床付近から幅羽口1点 (215) を図示した。

206 ~ 209 は、甲斐型甕で「く」字状に強く屈曲する厚い口縁部と胴部は全面ハケ目調整される。



第66図 SB17 遺物実測図

210は鞍車型環の底部である。木口痕が認められ、体部下端には斜めヘラ削りを施す。211・212の2点は灰軸陶器皿で、211が漬掛け施軸、212は刷毛塗りとと思われる、内面のみ施軸されている。212の高台は低い三日月高台で、本体は丸みを持ち、底部は回転ヘラ削りされている。

213・214の須恵器高台環は、いずれも丸底風の本体に高台をつけたものである。高台と底が同一面に接する形態と思われる。

215は鞆の羽口で破片ではあるが、径が5.9cm、送風孔の直径1.8cmを計測する。

土器類の年代観は大きく二つの時期に分けられる。8世紀前半と判断されるのが213・214の須恵器高台環である。ついで10世紀代と推定されるのが、灰軸陶器皿212、甲斐型甕の206・208・209である。

所見

覆土中より鞆の羽口が出土したことは特筆され、小鍛冶

(鍛錬鍛冶)が行われていた可能性が考えられる。ただし、10世紀の建物跡と考えられるSB17では鍛冶がや砥舟は検出されておらず、鞆の羽口が建物内で使用されていたかどうかは明らかでない。

(鈴木瑞穂 2008『はるか昔の鉄を追って』電気書院)

SB 18

遺構 (第 67・68 図 図版 6)

位置: B 02 グリッド

重複関係: (古) SB 18 → SB 17, SB 18 → SB 13, SB 18 → SB 16 (新)

主軸方位: N-16°-E

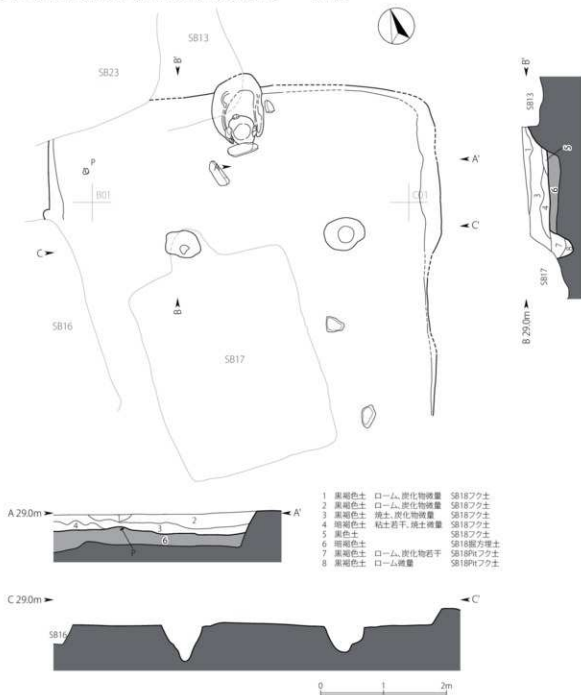
残存状況: 南側は削平され、また覆土も SB 13, SB 16, SB 17 により大きく削平を受けている。平面形は方形を呈するものと考えられ、東西 6.22 m、南北は検出範

囲最大値 5.3 m を測る。

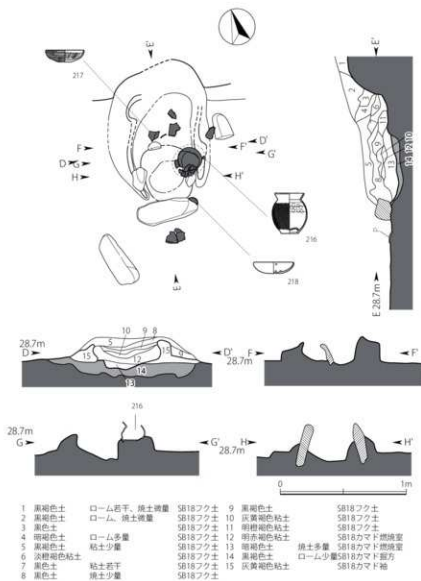
覆土: 柱穴覆土の 8 層やカマド覆土には、大淵スコリアの堆積が認められない。しかし、柱穴覆土上層 (7 層) や建物覆土最下層 (5 層) は大淵スコリアのみで構成されている。

壁溝: 検出されない。

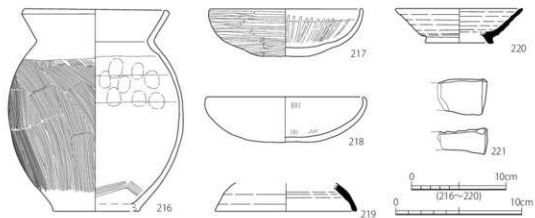
柱穴: 北側の柱穴 2 基が検出。径 60cm 深さ 40~50cm を測る。



第 67 図 SB 18 遺構実測図



第68図 SB 18 カマド実測図



第69図 SB 18 遺物実測図

その他の遺構：検出されない。

貼床：暗褐色土が厚さ 17cm 程度、検出範囲全面に認められる。

カマド：北壁ほぼ中央に存在。袖、燃焼室が良好に遺存する。両袖のそれぞれの端部に芯材として礎が配置されている。燃焼室中央からやや奥に支脚石が検出される、焚口前部には長さ 50cm、幅 30cm を測る扁平な石が確認できる。全長 116cm、中央内寸幅 49cm、中央外寸幅 78cm を測る。216 の裏がカマド右袖付近より出土している。

出土遺物（第 69 図 図版 22）

土器類が 5 点(216 ~ 220)、砥石 1 点(221)を図示した。216 は、鞍東型丸胴甕で、均一な丸みをもった胴部である。

外面が刷毛目調整、内面は指頭押圧調整がみられる。

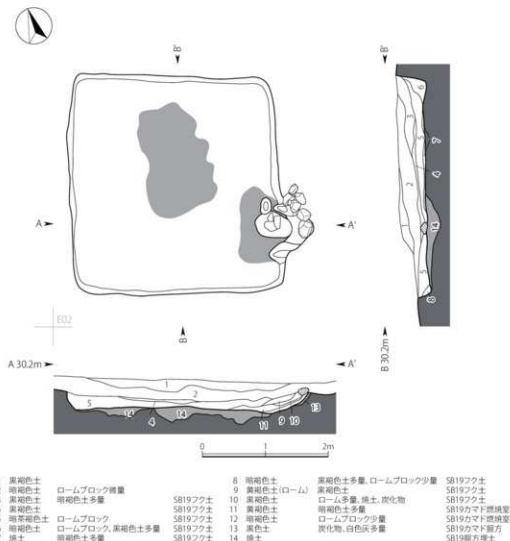
217・218 は土師器丸底坏であり、2 点ともに外面は横へらミガキ、内面は放射状のミガキを施す。218 は摩滅が激しいが、217 に類似した調整がみられる。

220 は、形態は灰軸陶器碗であるが、焼成・色調が須恵器に極めて類似する事例である。

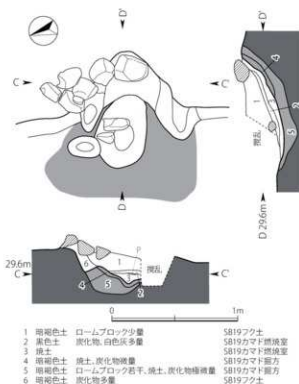
221 の砥石は、定型化した直方体の砥石で、端部以外、長方形の四面をすべて使用している。

所見

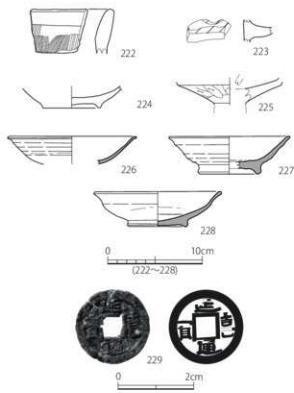
出土遺物や覆土下層の大淵スコリアの堆積状況から、古墳時代後期の建物跡と考えられる。



第 70 図 SB 19 遺構実測図



第71図 SB 19 カマダ実測図



第72図 SB 19 遺物実測図

SB 19

遺構(第70・71図 図版8)

位置: E 03 グリッド

重複関係:(古) SB 28→SB 3→SB 19(新)

残存状況:平面形は方形を呈するものと考えられ、東西3.50m、南北3.50mを測る。

主軸方位: N-108°-E

覆土:大淵スコリアを少量含む自然堆積層。カマダ周辺及び住居跡中央から北側にかけての東西100cm南北180cmの範囲で焼土が確認できる。また床面付近から鉄滓が出土している。

壁溝:検出されない。

柱穴:検出されない。

貼床:黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が厚さ26cm程度、南側においてのみ確認できる。

カマダ:東壁南寄りに存在。左袖周辺に20cm大の礫が点在し、芯材として配列されていたと考えられる。全長98cm、中央内寸幅40cm、中央外寸幅90cmを測る。

出土遺物(第72図 図版22・23)

土器類が7点(222~228)と229の銭貨「延喜通寶」1点を図示した。

222は土師器銅と思われる破片である。口縁部が直立

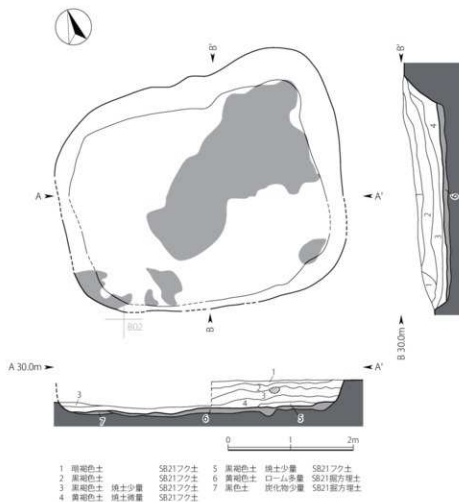
に近く、刷毛目の位置が口縁部直下という特徴から銅と判断した。223は羽釜の鈎の部分である。

224は土師器碗で、灰軸陶器の模倣形態である。225は高坏、226・227は灰軸陶器碗、228は灰軸陶器皿である。226は体部に丸みをもち、口縁部外反し、両面に淡緑色の釉が掛けられている。227は無軸、228は体部が口縁下で弱く屈曲する。折戸53号窯式期と考えられる。漬け掛け施軸され濃緑色に発色し、内面に重ね焼き痕がみられる。

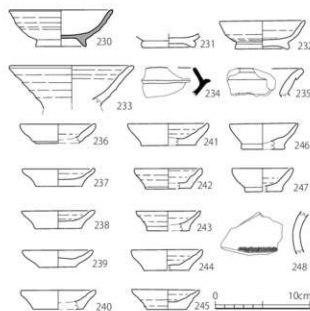
所見

907年が初鋳年の「延喜通寶」が出土したことは特筆される。また、同時期と考えられる灰軸陶器も共存して出土しており、鋳造から長期間流通せずに、建物内に埋まったものと考えられる。

(永井久美男 2002『中世出土銭の分類図版』高志出版社)



第73図 SB 21 遺構実測図



第74図 SB 21 遺物実測図

SB 21

遺構 (第73図)

位置: A 03・B 03 グリッド

重複関係: (古) SB 23 → SB 21, S X 2 → SB 21 (新)

主軸方位: N - 5.5° - E

残存状況: 平面形は不整形な隠丸形を呈する。東西4.60m、南北3.97mを測る。カマド等燃焼施設は検出されない。覆土: 大溜スコリアを含まない自然堆積層。建物跡床面の北東から南西にかけて広範囲に焼土が検出される。また北東の覆土から鉄滓が出土している。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒色土が厚さ10cm程度、全面に認められる。

出土遺物 (第74図 図版23・24)

19点の土器類を図示した。器種は230が灰軸陶器碗、231・232が山茶碗小皿、233が土師器小碗、234が須

恵器環、235は広口壺の口縁部である。236～247は形態が類似する土師器小皿、248は壺の頸部である。

230は灰軸陶器小碗で、体部がやや丸みをもち底部は回転系切りされる。232の山茶碗小皿は体部に丸みをもち、高台は半円状で低い。内面には濃緑色で斑点状に施釉が認められる。231もまた類似した事例である。233は体部が逆「ハ」字状に開く脚付碗である。

土師器小皿12点は、ロクロ調整で体部内面下半に強いナデが認められる。口径が6～8cm、底径4～5cm、器高1.8～2.7cmを示し、類似した形態と法量をもっている。ただし246と247の2点は、器高が2.5～2.7cmを測り、他の小皿より約0.5cm高くなる傾向がある。

SB 24

遺構(第75・76図 図版7)

位置: E 04・E 05・F 04・F 05 グリッド

重複関係: (古) S D 1・2→S B 36→S B 34→S B 1→S K 1 (新)

主軸方位: N-26°-E

残存状況: S B 1に北西部の覆土の一部を削平されているが、良好な状態で検出される。平面形は方形を呈し、東西5.40m、南北5.63mを測る。燃焼施設としてカマドと炉が検出された。

覆土: 覆土中位にある3層は大淵スコリアのみで構成される層でこれより下層には、ほとんど大淵スコリアは含まれない。建物跡中央付近の床面を中心に広範囲にわたって焼土や炭化材が検出され、上屋の構築材の可能性が考えられる。また、北西の柱穴からも炭化材が検出されており焼失家屋と考えられる。

壁溝: 土層断面では壁溝が認められるが平面プランでは検出できなかった。

柱穴: 4基検出。径30～60cm、深さ40～50cmを測る。その他の遺構: 南壁中央の床面に周壁を伴う土坑が検出され、東西172cm、南北140cm、深さ42cmを測る。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒色土が厚さ12cm程度、全面に認められる。

炉跡: 建物跡ほぼ中央に位置し、楕円形を呈する。東西52cm、南北54cm、深さ42cmを測る。

カマド: 北壁ほぼ中央に存在。煙道、袖、燃焼室が良好に

所見

230は灰軸陶器の最終段階「百代寺窯式期」の遺物と考えられる。また、236～247の土師器ロクロ調整皿は富士宮市元富士大宮司館跡の坑9出土の土師器に類例が求められる。界外では「プレ中世1段階」(1101～1150年)の基準とされる愛知県朝日西遺跡S K 271に同様の形態の土器が認められることから11世紀後半から12世紀前半の建物跡と考えられる。

(富士宮市教育委員会2000『富士大宮司館跡』)

鈴木正貴2005「東海における中世土器・陶磁器の編年」『中世産業の諸相～生産技術の展開と編年～』

遺存する。両袖のそれぞれの端部に芯材として礎が配置されている。燃焼室中央からやや奥に支脚石が検出される。焚口前面には長さ60cm、幅35cmを測る扁平な石が確認できる。全長199cm、中央内寸幅41cm、中央外寸幅82cmを測る。燃焼室及び焚口南東付近から土師器片がまとまって出土している。

出土遺物(第77図 図版24・25)

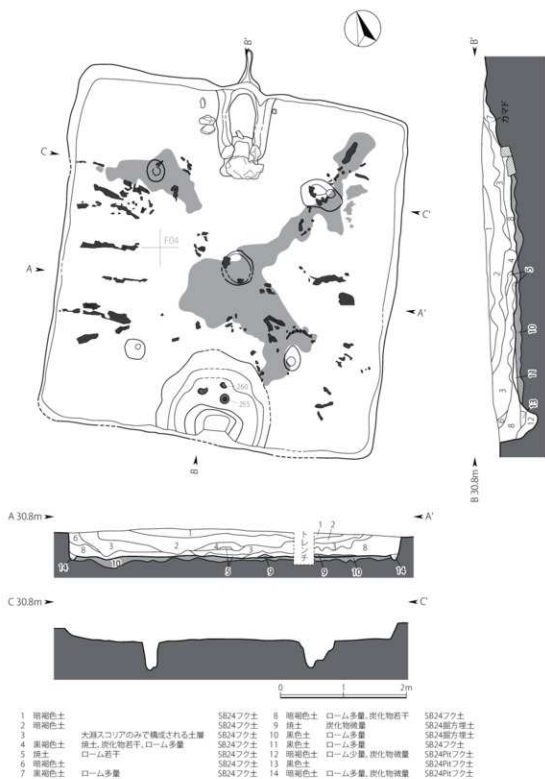
土器類14点(249～262)と磨石2点(263・264)を図示した。

裏は249・250・252・253の4点で、大型裏である。249と252が駿東型球胴裏で、249はナデ調整が多くをしめ、口唇部の先端を尖らせている。252は刷毛目が多く残るやや小型の裏である。254は高環であり、脚部が直線的に開き下半でさらに大きく開く形態、255は球胴をした丸底の直口壺である。

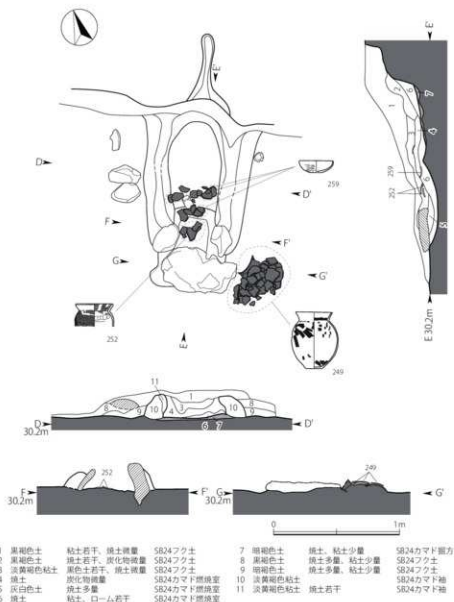
256～262の7点は丸底環で、全体にヘラミガキやヘラナデ調整されるが、体部下半をヘラ削りするもの258～261と256・257のような器高が低くヘラナデ又はミガキ調整をするもの、262のように口縁部が内湾する丸底環の三者が認められる。これらは類似した形態と調整手法をもつ一群の土器である。262は特に丁寧な仕上がりで、全体をミガキを施し沢がみられる。底部には「×」の記号らしき刻みが認められる。

所見

S B 24の調査では注目される点が2点ある。



第75図 SB 24 遺構実測図



第76図 S B 24 カマド実測図

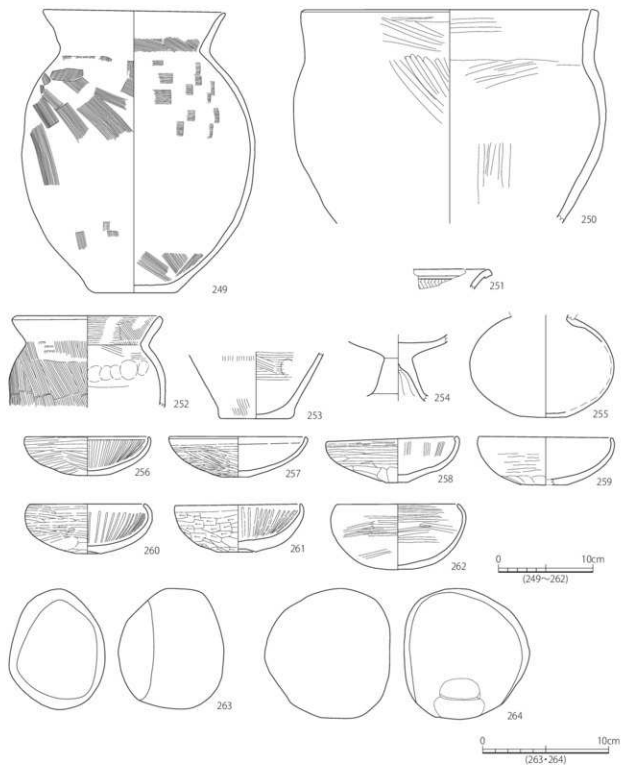
まず1点目は、覆土中への「大淵スコリア」の堆積である。建物廃絶（焼失）後の覆土は、大淵スコリアを含まずレンズ状に堆積しているが、その後、「大淵スコリア」のみで構成される層が認められる。スコリアは全体的に新鮮で、肉眼では円磨もないように観察されることから、火山噴火から直接地表に降下したものと推測され、下層のスコリアを含まない層から出土した土器（焼失家屋の可能性から一括性が高い）との関係からその噴火時期について迫れる可能性が高い。今後、当該期の土器編年を再検討する必要がある。

2点目は、竈跡とカマド・周堤が併存していることである。調査者の所見によると、当初、S B 24 は竈跡を持つ

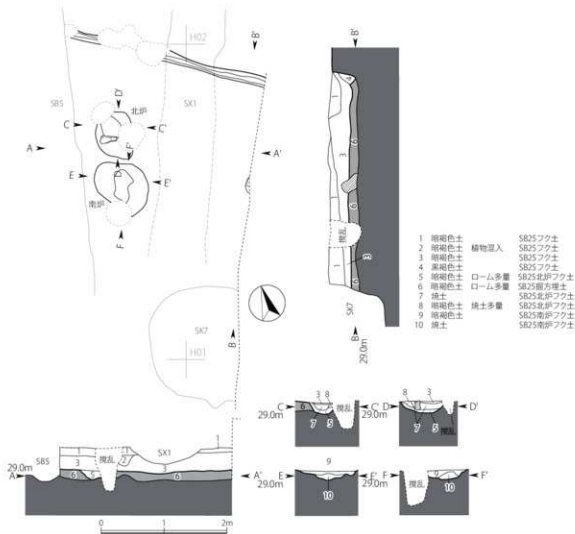
建物跡として存在したが、途中でカマドを有する建物跡に改修された可能性を指摘している。建物跡南側には、円形の掘り込みが確認され、周堤も確認される。周堤(11層)は、貼床の上面に作られ、掘り込みも貼床を切っている。調査者は富士市沢東A遺跡にも同様の掘り込みが見られ、そこから「貯蔵穴」と考えているが、「出入り口施設Dタイプ」(茨城県教育財団1990)の可能性も考えられる。もし、「出入り口施設」であったのなら、カマド敷設時に建物構造を含めた改修が行われたとも考えることもできる。

建物は古墳時代後期のものと考えられる。

財団法人茨城県教育財団1990「茨城C遺跡 森戸遺跡」(上)



第77图 S B 24 遺物実測図



第78図 SB 25 遺構実測図

SB 25

遺構 (第78図)

位置: G 02 グリッド

重複関係: (古) SB 25 → SB 5, SB 25 → SX 1 (新)

主軸方位: N - 31.5° - E

残存状況: 建物跡の東側は調査区域外、南側は地形的に削平され、西側はSB 5により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられる。検出範囲の最大値で東西3.30mを測る。

覆土: 上層に大溜スコリアを少量含む暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 幅20cm、深さ8cmの溝が検出範囲全面に認められる。

柱穴: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒色土が、厚



第79図 SB 25 遺物実測図

12cm程度、全面に認められる。

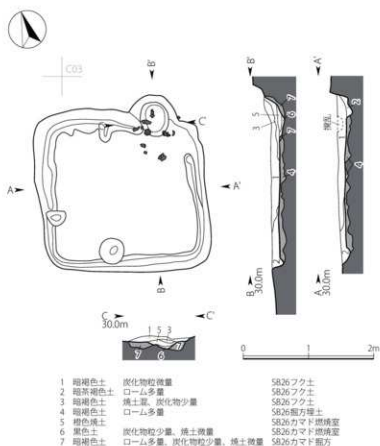
炉: 2基の炉を検出。北炉は中央に灰石が1個確認され、東西62cm、南北72cm、深さ18cmを測る。南炉は東西87cm、南北85cm、深さ16cmを測る。

出土遺物 (第79図 図版25)

265は清郷型鍋、266が古墳時代表の口縁部とおもわれる。2点のみ出土したもので、清郷型鍋は10～12世紀に使用されたものである。

所見

明確な時期は明らかでないが、覆土や直線的な遺構形態から古墳時代前期の建物跡と推定されるが根拠が薄い。



第80図 SB 26 遺構実測図



第81図 SB 26 遺物実測図

SB 26

遺構(第80図 図版8)

位置: C 03 グリッド

重複関係:(古)SD 2→SB 26→SH 1(新)

残存状況:平面形は限丸方形を呈し、東西2.65m、南北2.54mを測る。

主軸方位: N-16°-E

覆土:大淵スコリアを少量含む自然堆積層。

壁溝:幅25cm、深さ10cmの溝が北東のコーナーを除いて敷設されている。

柱穴:検出されない。

その他の遺構:検出されない。

貼床:黄褐色ローム土が混入した暗褐色土が、厚さ9cm程度、全面に認められる。

カマド:北壁東寄りに存在。掘方のみ検出。全長64cm、中央内寸幅38cm。

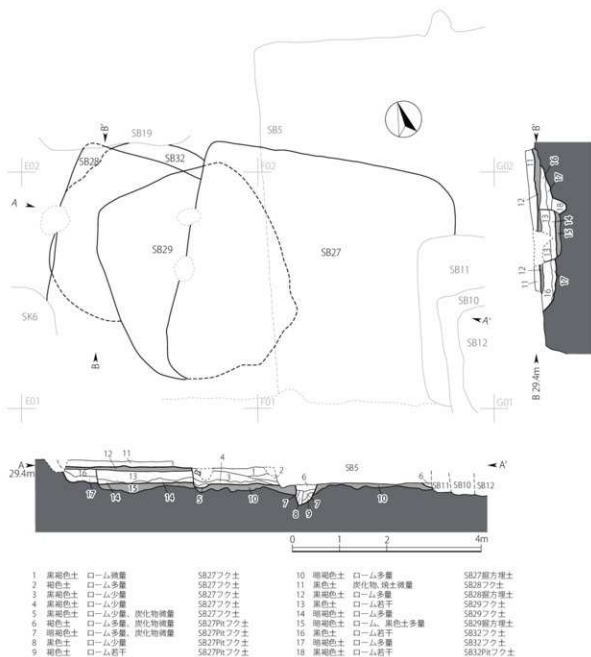
出土遺物(第81図 図版25)

駿東型環4点(267~270)と、折り返し口縁壺1点(271)が出土している。

駿東型環は、269が箱環の形態、267・268・270が底径縮小開始期の形態を示している。

所見

出土遺物から9世紀前半の建物跡と考えられる。



第82図 S B 27・28・29・32 重複関係図

S B 27

遺構 (第82・83図 図版8)

位置: E 02・F 02 グリッド

重複関係: (古) S B 28→S B 27→S B 5 (新)

主軸方位: N-28.5°-E

残存状況: 建物跡の東側は、S B 5により削平され掘方のみ検出できる。平面形は方形を呈するものと考えられ、東西5.50m、南北5.10mを測る。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 幅20cm、深さ7cmの溝が検出範囲全面に認めら

れる。

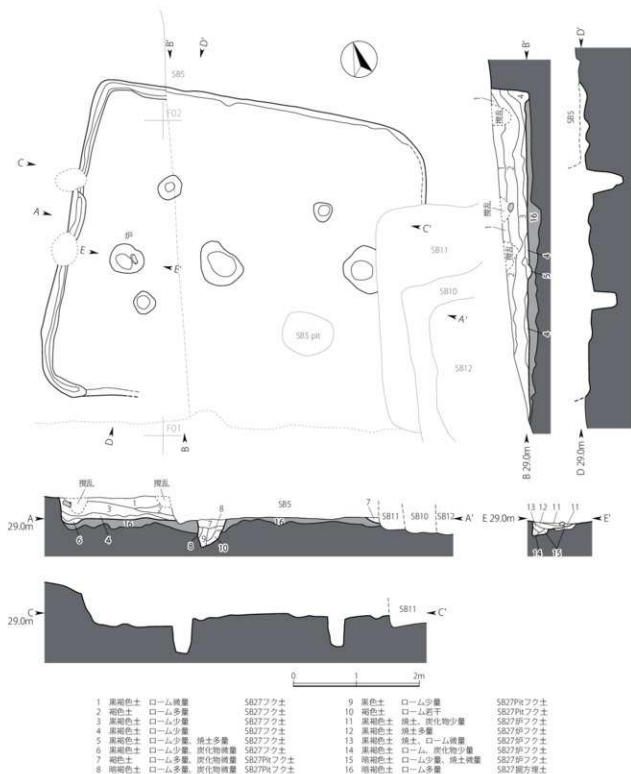
柱穴: 3基検出。径30~40cm、深さ40cmを測る。

その他の遺構: ビット2基検出。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ23cm程度、全面に認められる。

炉: 住居跡西側中央に位置し、炉中央からやや東側に炉石が1個確認される。東西54cm、南北48cm、深さ21cmを測る。

出土遺物 (第84図 図版25)

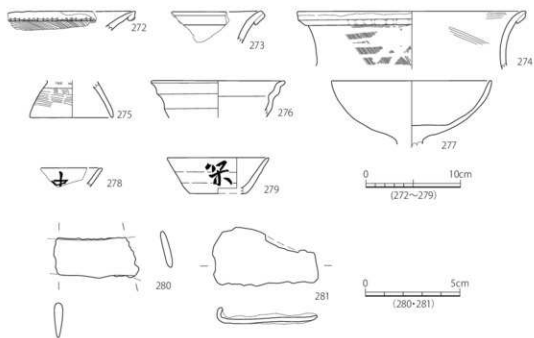


第83図 SB 27 遺構実測図

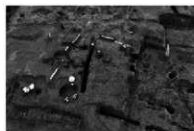
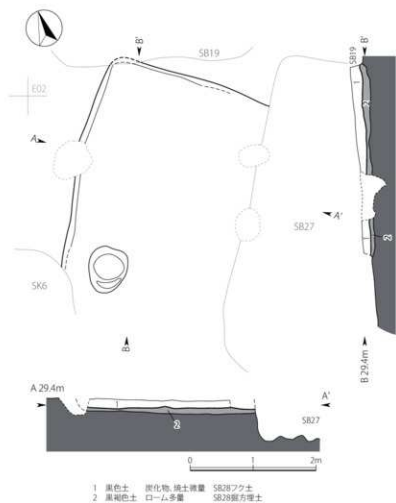
土器8点(272~279)、鉄製品2点(280~281)を図示した。272・273は壺の口縁部で両者とも折り返しが認められる。276は口縁部に段をもつ鉢、277は高環の環部である。

所見

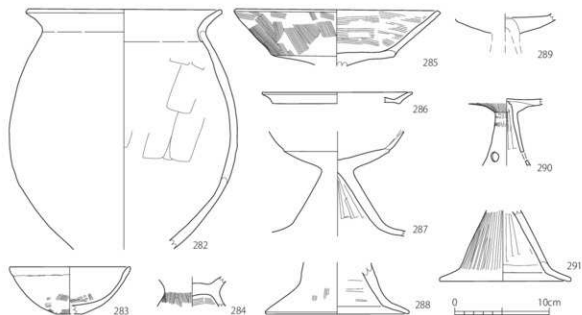
遺構の切り合いから、古墳時代中期から7世紀までのいずれかの時代の建物跡と考えられるが、詳細な時期決定はできない。ただし、覆土に大瀧スコリアを含まないことから古墳時代中期の可能性が高い。



第84図 SB 27 遺物実測図



第85図 SB 28 遺構実測図



第 86 図 SB 28 遺物実測図

SB 28

遺構 (第 82・85 図)

位置: E 02・E 03 グリッド

重複関係: (古) SB 32 → SB 29 → SB 28 → SB 27 (新)

主軸方位: N - 34° - E

残存状況: 建物跡の南側は地形的に削平されていて、東側は SB 27 により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北 4.10m を測る。炉等燃焼施設は検出されていない。

覆土: 大洲スコリアを微量に含む黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: ビット 1 基検出。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒褐色土が、厚さ 14cm 程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第 86 図 図版 26)

10 点を図示した。282 は甕、283 は鉢、284 は台付甕、285、287 ~ 291 は高坏である。286 は高坏の可能性もあるが、器種不明とした。高坏の坏部は下半部に明瞭な段を有し、脚部はラッパ状に開く形態を示す。調整は丁寧ではなくハケメやナデ調整で仕上げられる。283 は口縁部を肥厚させる意識が見受けられる。

所見

古墳時代前期に位置づけられる土器もあるが、多くは古墳時代中期の土器であり、その頃の建物跡と考えられる。

SB 29

遺構 (第 82・87 図 図版 8)

位置: E 02

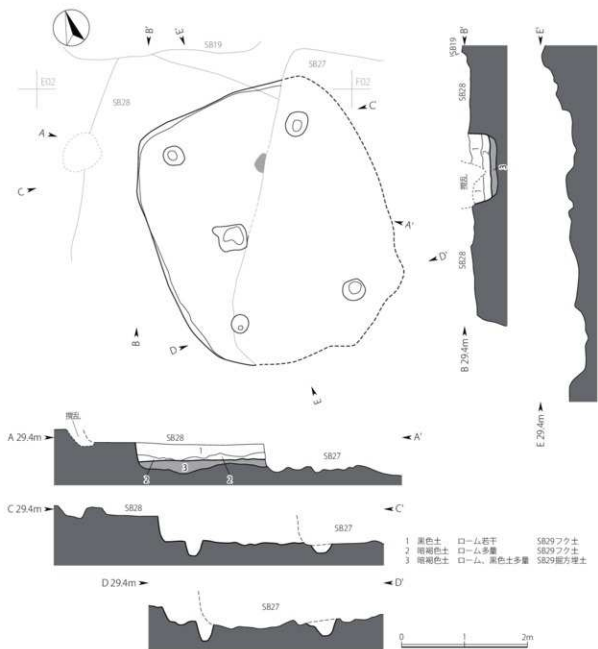
重複関係: (古) SB 32 → SB 29 → SB 28 → SB 27 (新)

主軸方位: N - 2.0° - W

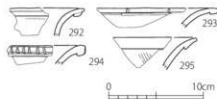
残存状況: SB 28 の掘方下層から検出された建物跡で、東側は SB 27 により削平されている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北 4.30cm を

測る。明確な炉は検出されていないが、中央よりやや北側に径約 30cm の範囲に焼土が認められることから、SB 27 の構築に伴い、炉跡が削平されたものと推測される。覆土: 大洲スコリアを含まない暗褐色土による自然堆積層。住居中央やや北側の床面に径約 30cm の円形状になると考えられる形状で焼土が検出されている。

壁溝: 検出されない。



第 87 図 S B 29 遺構実測図



第 88 図 S B 29 遺物実測図

柱穴：4 基検出。径 30～40cm、深さ 30～40cm。

その他の遺構：ピット 1 基検出。

貼床：黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ 14cm 程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物（第 88 図 図版 26）

壺口縁部 4 点（292～295）を図示した。いずれも口唇部外側を肥厚させ、294 は肥厚させた部位にキザミ目が施されている。

所見

出土遺物から弥生時代後期の建物跡と考えられる。

SB 32

遺構 (第 82・89 図)

位置: E 03

主軸方位: N - 34.0° - E

重複関係: (古) SB 32 → SB 29 → SB 28 → SB 27 (新)

残存状況: SB 28 の掘方下層から検出された建物跡で、東側は SB 29 により削平されている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北 3.93 m を測る。炉等燃焼施設は検出されていない。

覆土: 大淵スコリアを含まない暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

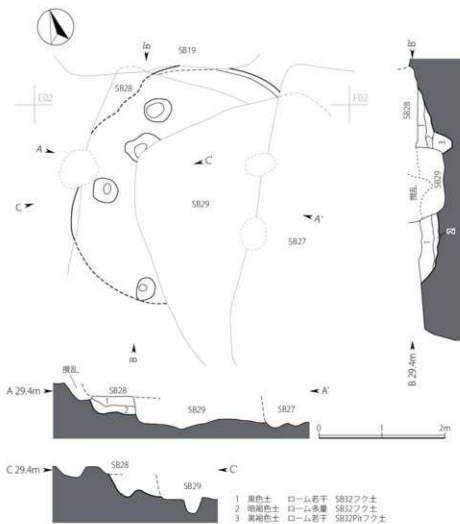
その他の遺構: ビット 4 基検出。

貼床: 検出されない。

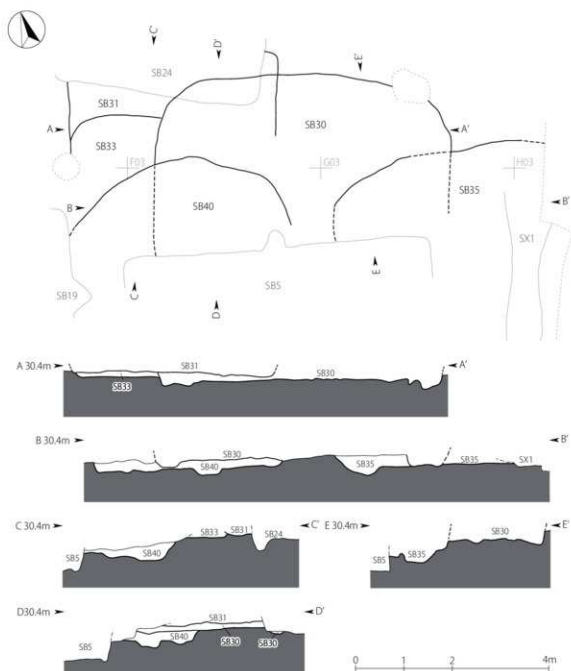
出土遺物: 図化出来た資料はない。

所見

建物の構造及び切り合い関係から、弥生時代後期の建物跡と考えられる。



第 89 図 SB 32 遺構実測図



第90図 SB 31・30・33・35・40 重複関係図

SB 31

遺構 (第90・91図)

位置: E 04

重複関係: (古) SB 40 → SB 33 → SB 30 → SB 31 → SB 24 (新)

主軸方位: N - 19.5° - E

残存状況: 南側は地形的に削平され、北側はSB 24により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、東西5.41mを測る。炉等燃焼施設は検出されていない。

覆土: 大濶スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

南側の削平された箇所には大濶スコリアが多量に混入した黒褐色土が堆積する。

壁溝: 検出されない。

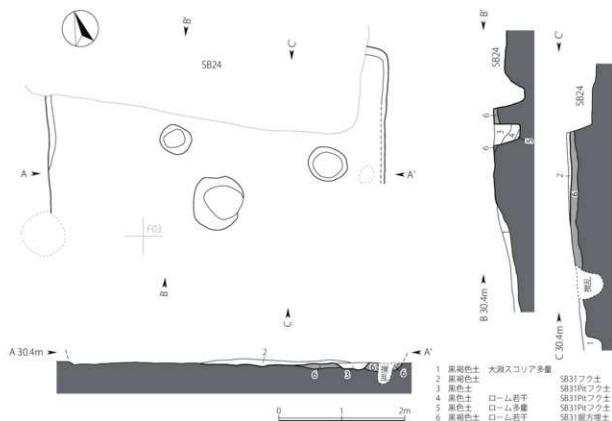
柱穴: 1基検出。径50cm、深さ11cm。

その他の遺構: ビット2基検出。

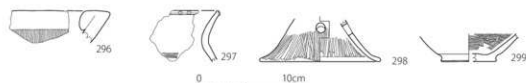
貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒褐色土が、厚さ12cm程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第92図 図版26・27)

4点を図示した。296・299は壺、297は甕、298は



第91図 SB 31 遺構実測図



第92図 SB 31 遺物実測図

高環の破片である。296は口唇部内面に粘土紐を肥厚させる大型の壺である。298の高環脚部には四方向の穿孔が確認され、内外面ともに丁寧なミガキが施されている。

SB 30

遺構(第90・93図 図版8)

位置:F04・G04

重複関係:(古)SB 40→SB 33→SB 30→SB 31→SB 24(新)

主軸方位:N-18.0°-E

残存状況:南側はSB 5に、西部の覆土上層はSB 31により削平されている。平面形は不整形な隅丸方形を呈するものと考えられ、東西7.64mを測る。

覆土:大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

所見

出土遺物より、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

南側の削平された箇所には大淵スコリアが多量に混入した黒褐色土が堆積する。

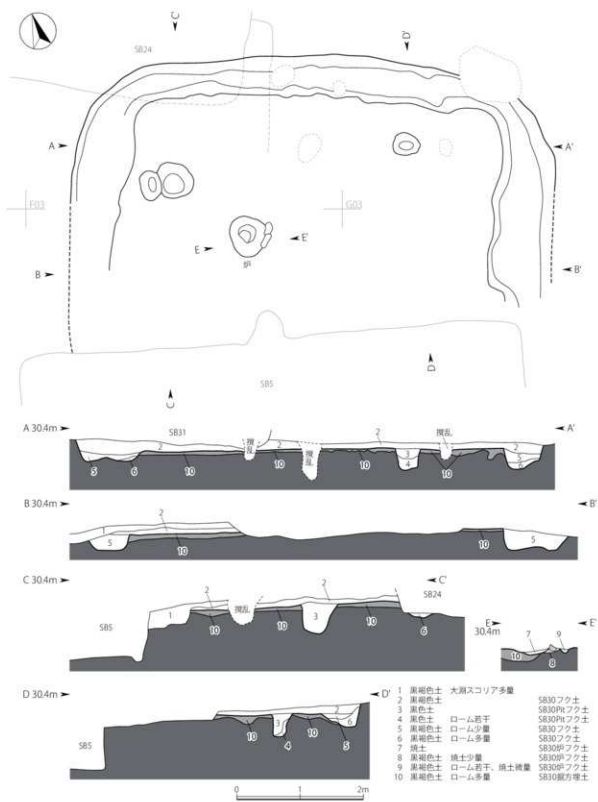
壁溝:幅70cm、深さ34cmの溝が、検出範囲全面に認められる。

柱穴:2基検出。径約50cm、深さ約40cm。

その他の遺構:ビット1基検出。

貼床:黄褐色ローム土が多量に混入した黒褐色土が、厚さ10cm程度、検出範囲全面に認められる。

如:建物跡中央やや西側に位置し西側に如石が2個確認さ

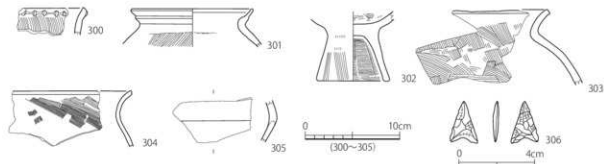


第93図 SB30 遺構実測図

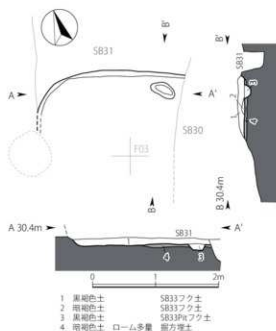
れる。東西57cm、南北65cm、深さ13cmを測る。

出土遺物（第94図 図版27）

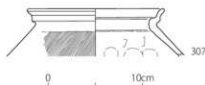
7点を図化した。300～304は甕、305は壺、306は石鐏である。301はS字甕の破片であるが口唇部の段差に明瞭さが無い。303・304は頸部の形状に違いがあるものの、両者とも外面の最終調整がハケメという点では一致



第94図 SB 30 遺物実測図



第95図 SB 33 遺構実測図



第96図 SB 33 遺物実測図

する。305は壺下半部の破片と考えられる。外面はミガキ調整が施されたと考えられるが器面が荒れているために明らかでない。

所見

出土遺物から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

SB 33

遺構（第90・95図）

位置：E04

重複関係：（古）SB 40 → SB 33 → SB 30 → SB 31 → SB 24（新）

主軸方向：N - 20.0° - E

残存状況：SB 31 掘方下層に検出される。南側は地形的に削平され、東側はSB 30により削平されている。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で東西2.36mを測る。炉等燃焼施設は検出されない。

覆土：大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝：検出されない。

柱穴：検出されない。

その他の遺構：ピット1基検出。

貼床：黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ7cm程度、東側のみ認められる。

出土遺物（第96図 図版27）

S字甕1点を図示した。口唇部内外面ともに明確な稜を有するが、全体的に厚みがあり精緻さにかける。外面は斜め方向のハケメで仕上げられ、横方向の調整はない。

所見

出土遺物から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

SB 35

遺構 (第90・97図)

位置: G03・G04

重複関係: (古) SB 35 → SB 30 → SB 5・SX 1 (新)

主軸方位: N-7.0°-E

残存状況: SB 5、SX 1等重複する遺構に大きく削平されており建物跡の北西部のみ検出された。平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で東西3.70mを測る。

覆土: 大淵スコリアを含まない暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 北西部コーナーに、径150cm、深さ45cmを測る土坑1基検出。その他ビット1基検出。

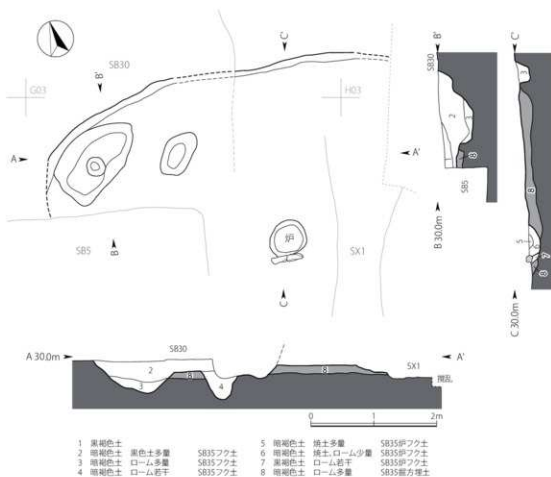
貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ12cm程度、検出範囲全面に認められる。

炉: 建物跡北側中央に位置し、炉南端に炉石が2個確認される。東西60cm南北58cm深さ18cmを測る。

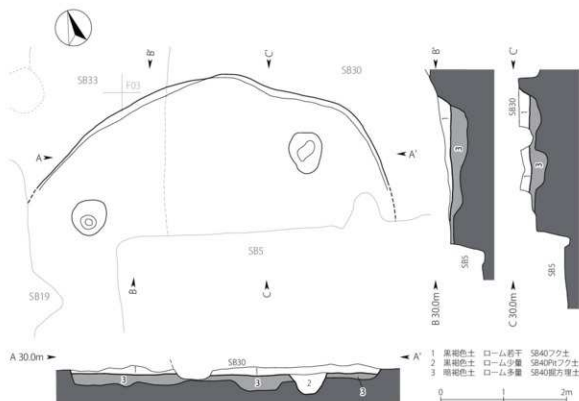
出土遺物: 図化出来た資料はない。

所見

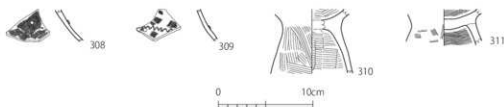
切り合いからは古墳時代前期以前の建物跡と考えられる。加えて、平面形態からは弥生時代後期の可能性も指摘できる。



第97図 SB 35 遺構実測図



第98図 SB 40 遺構実測図



第99図 SB 40 遺物実測図

SB 40

遺構 (第90・98図)

位置: E03・F03

重複関係: (古) SB 40 → SB 33 → SB 30 → SB 31 → SB 24 (新)

主軸方位: N - 1.0° - E

残存状況: 南側はSB 5により削られている。平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で東西5.34mを測る。炉等燃焼施設は検出されない。

覆土: 大潤スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 2基検出。径約60cm、深さ約35cm。

その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ

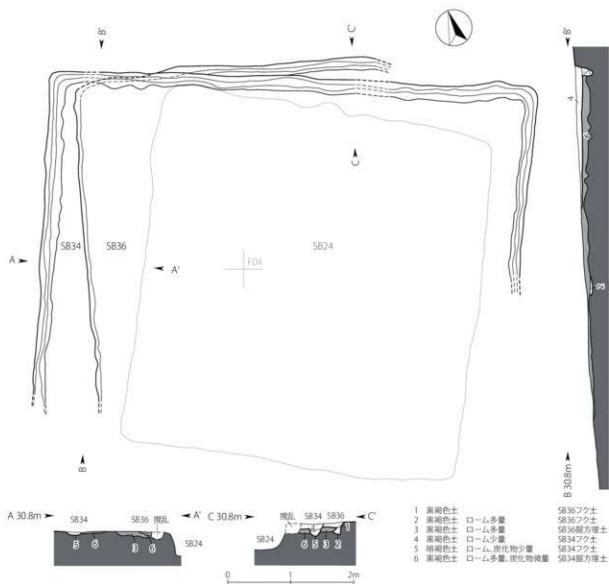
25cm程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第99図 図版27)

4点を図化した。308・309は壺、310、311は台付甕の底部の破片である。壺はいずれも頸部付近の破片で円形の貼り付け文が確認される。309には二対の貼り付け文の付近にS字状結節文が施される。

所見

出土遺物から、弥生時代後期に位置づけられる。



第100図 SB 34・36 遺構実測図

SB 34

遺構 (第100図)

位置: E05・F05

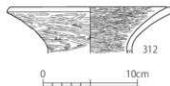
重複関係: (古) S D 1・2 → S B 36 → S B 34 → S B 24 → S B 1 → S K 1 (新)

主軸方位: N - 21.5° - E

残存状況: 遺構上面が全体的に削平されており、北・西側の壁溝が確認されるのみである。平面形は方形を呈するものと考えられ、東西7.80mを測る。炉等燃焼施設は検出されない。

覆土: 大瀝スコリアを含まない暗褐色土による自然堆積層。

壁溝: 幅28cm 深さ12cmの溝が、検出範囲全面に認められる。



第101図 SB 34 遺物実測図

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒褐色土が、厚さ8cm程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第101図 図版27)

壺の破片1点を図示した。頸部から口唇部に向かって器

壁の厚みを増しながら外反する。横方向の丁寧なミガキ調整により仕上げられる。

所見

切り合い関係から、古墳時代中期以前の建物跡と考えられるが建物跡の明確な時期決定はできない。

SB 36

遺構 (第100図)

位置: E05・F05

重複関係: (古) S D 1・2 → S B 36 → S B 34 → S B 24 → S B 1 → S K 1 (新)

主軸方位: N - 13.5° - E

残存状況: 遺構上面が全体的に削平されており、北・西側の壁溝・掘り方埋土が確認されるのみである。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北5.10mを測る。炉等燃焼施設は検出されない。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 幅22cm 深さ12cmの溝が、検出範囲全面に認められる。

柱穴: 検出されない。

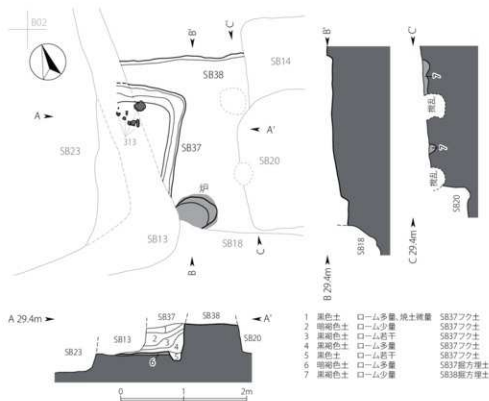
その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒褐色土が、厚さ8cm程度、検出範囲全面に認められる。

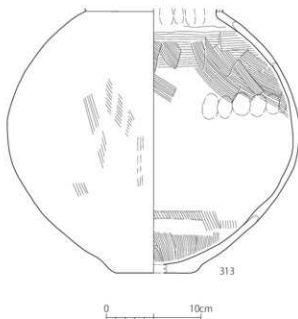
出土遺物: 図化出来た資料はない。

所見

切り合い関係から、古墳時代中期以前の建物跡と考えられるが建物跡の明確な時期決定はできない。



第102図 SB 37・38 遺構実測図



第103図 SB 37 遺物実測図

SB 38

遺構 (第102図)

位置: B02

重複関係: (古) SB 38 → SB 37 → SB 18, SB 38 → SB 14 (新)

主軸方位: N - 14.5° - E

残存状況: SB 37, SB 13, SB 14, SB 20, SB 18 と多くの遺構に削平されており北壁付近の掘方埋土のみ確認できる。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北 2.88 m を測る。

覆土: 掘方埋土のみ検出。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

貼床: 黄褐色ローム土が少量に混入した黒褐色土が、厚さ 12cm 程度、検出範囲全面に認められる。

炉: 建物跡中央付近に位置し、覆土は焼土で東西 68cm、南北 50cm、深さ 13cm を測る。

SB 37

遺構 (第102図)

位置: B02

重複関係: (古) SB 38 → SB 37 → SB 18 → SB 13 (新)

主軸方位: N - 27.5° - E

残存状況: 住居跡の殆どが SB 13 より大きく削平されていて、北東コーナー部分のみ残存する。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北 1.65 m を測る。炉等燃焼施設は検出されない。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。壁溝: 幅 24cm、深さ 15cm の溝が、検出範囲全面に認められる。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: 検出されない。

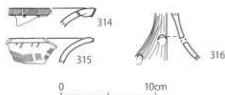
貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ 5cm 程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第103図 図版 27)

壺の胴部 1 点を図示した。底部は比較的広く、胴部は全体的に丸みをもち胴部最大径を中央付近に有する。内外ともにハケメ調整が認められる。

所見

出土遺物から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。



第104図 SB 38 遺物実測図

出土遺物 (第104図 図版 27)

3 点を図示した。314・315 は壺、316 は高環の破片である。314 は肥厚させた口唇部の下方に二対の穿孔が認められる。また、316 の高環脚部の穿孔は二段に認められ、全体的に細身を持った形態で脚端部にいたるものと考えられる。

所見

出土遺物から、古墳時代前期の建物跡と考えられる。

SB 41

遺構 (第105図)

位置: C02・D02

重複関係: (古) SB 41 → SB 7 → SB 9 → SB 6 (新)

主軸方位: N-11.0°-E

残存状況: 建物跡南側はSB 42、SB 9により削平されている。平面形は楕円形を呈するものと考えられ、東西4.62mを測る。炉等燃焼施設は検出されない。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 検出されない。

その他の遺構: ビット1基検出。

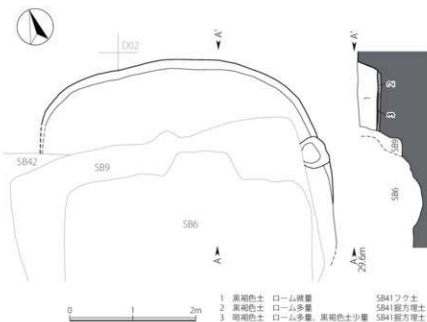
貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した黒褐色土が、厚さ7cm程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第106図 図版27・28)

壺の破片2点を図示した。317は口縁部の破片で口縁部内面に波状文(5本の線条)が施される。

所見

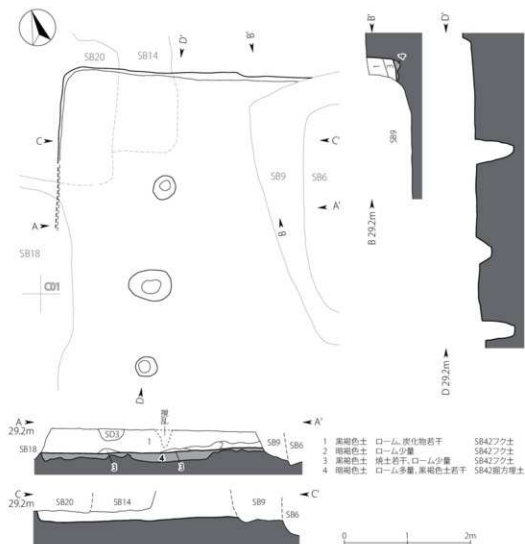
出土遺物から、弥生時代後期の建物跡と考えられる。



第105図 SB 41 遺構実測図



第106図 SB 41 遺物実測図



第107図 SB 42 遺構実測図

SB 42

遺構 (第107・108図 図版9)

位置: C02

重複関係: (古) SB 42→SB 9→SB 6, SB 42→SB 14→SB 20, SB 42→SB 18 (新)

主軸方位: N-20.0°-E

残存状況: 建物跡東側はSB 9により削平され、北西コーナーの覆土上層はSB 14・SB 20により削平されている。平面形は方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大値で南北5.12mを測る。炉等燃焼施設は検出されない。建物西側中央付近に土師器片がまとまって出土している。

覆土: 大淵スコリアを含まない黒褐色土による自然堆積層。

壁溝: 検出されない。

柱穴: 2基検出。径35cm、深さ35～65cmを測る。

その他の遺構: ピット1基検出。

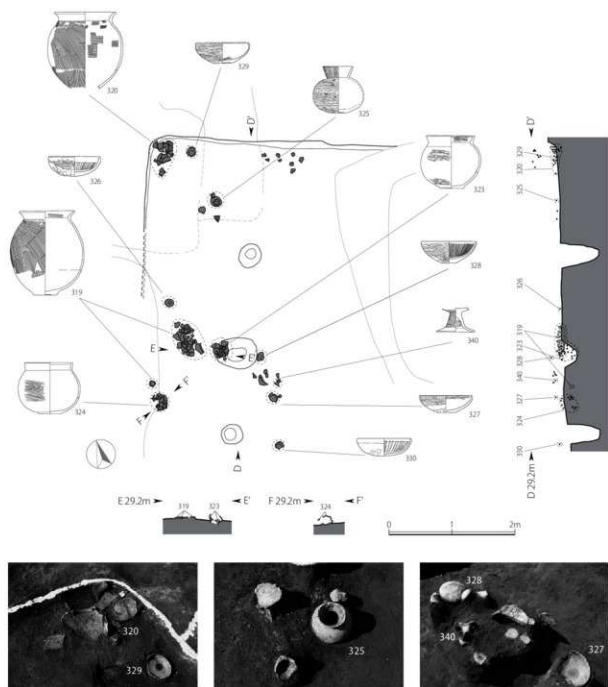
貼床: 黄褐色ローム土が多量に混入した暗褐色土が、厚さ10cm程度、検出範囲全面に認められる。

出土遺物 (第109・110図 図版28・29)

30点の土器を図示した。319～322は甕、323～325は壺、326～330は環、331は碗、332～342は高環、343～348は壺の破片である。

甕の胴部は長胴を呈し、斜め方向のハケム調整が施される。頸部は内面に明確な稜を有し、外反しながら広がる。323・324は甕とよぶか壺と呼ぶか意見の分かれるところだが、外面に比較的丁寧なミガキが施されていることから壺とした。2点とも広い底部を有し、あまり高さを持たない胴部と、口唇部内面を内側に尖らせる調整や胎土が共通している。

326～330の環は形態的に若干の差異は認められるも



第108図 S B 42 遺物出土状況図

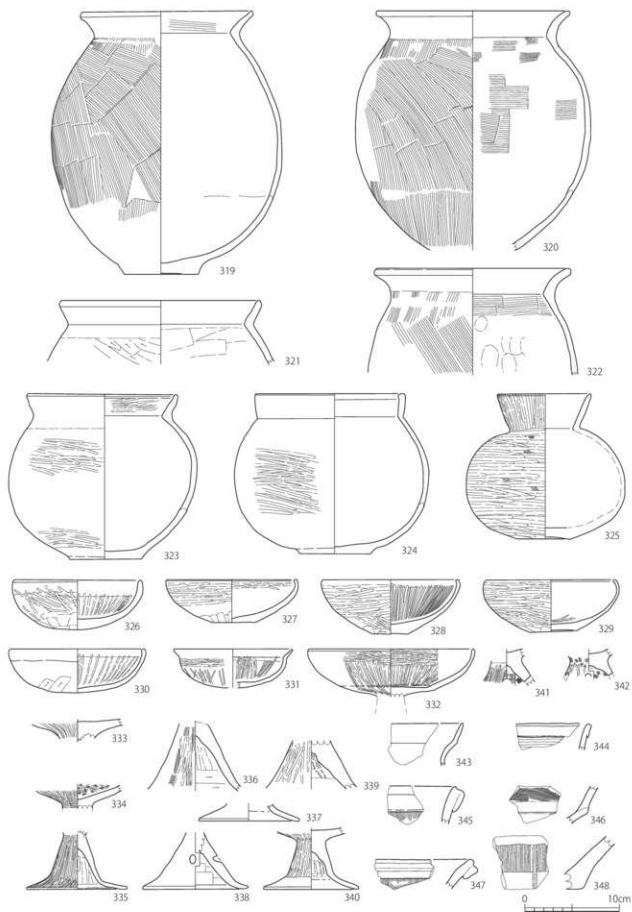
の、外面底部付近はケズリ、それ以外はココミガキ、内面も放射状のミガキ調整と共通性が認められる。また332の高環坏部も同様の形態を呈し、調整も共通する。331はI縁部が外反することから碗とした。内外面ともに丁寧なミガキ調整が施される。

333～342の高環脚部は多様な形態を示し、明確な脚端部を持たずラップ状に開く破片(336・338・339)や丁寧なミガキ調整が施され、全体的に細身を呈する破片

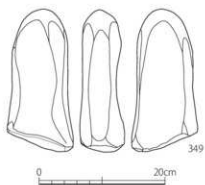
(335)もある。

所見

古墳時代中期と後期の境目の時期の土器群と考えられる多量の土器が一括して出土したことは注目される。古墳時代後期初頭と考えられるS B 24と異なり、覆土中に大溜スコリアを含まないことから、中期末の建物跡と推定される。



第109図 SB 42 遺物実測図(1)



第110圖 SB 42 遺物実測図(2)

第2節 掘立柱建物跡

SH1

遺構(第111図 図版9) 位置:B02・B03・C02・C03

重複関係:(古)SH1→SB14→SB20(新)

主軸方位:N-16.5°-E

残存状況:南西部は、SB14・SB20により削平されていて、西辺の1基及び南辺の2基の柱穴が検出されていない。

構造:桁行(南北)3間・梁行(東西)3間の側柱建物と考えられ、芯心で東西3.34m、南北4.40mを測る。東辺の柱穴間は1.05~1.10m、北辺の柱穴間は1.38~1.50

mであった。

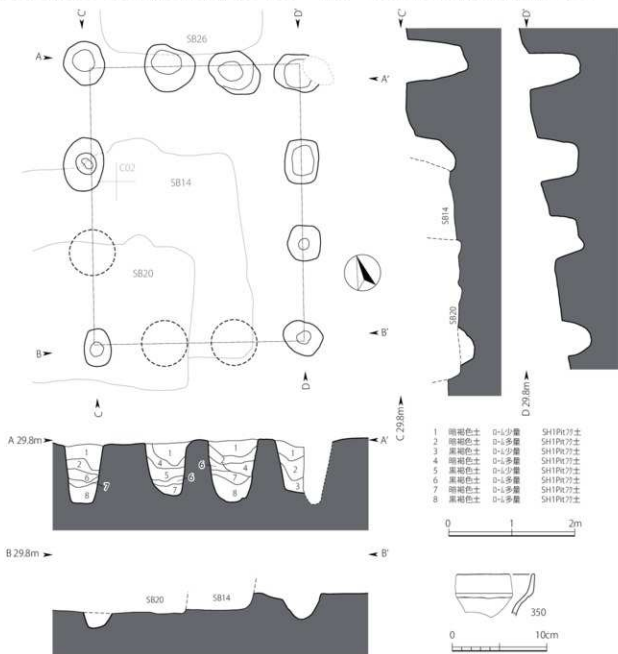
覆土:柱穴内の覆土は大洲スコリアをやや多量に含む暗褐色土。

柱穴:9基検出。径60~80cm、深さ90~120cmを測り楕円形を呈する。

出土遺物(第112図 図版29)

壺の破片1点を図示した。緩やかに広がる頸部から口縁部は直線的に立ち上がる。全体的に器面は薄い。

所見 切り合いから9世紀の建物跡と推定される。



第111図 SH1 遺構実測図

第112図 SH1 遺物実測図

SH2

遺構 (第113図 図版9)

位置: G04・G05・H04・H05

重複関係: (古)SD2→SH2→SK2 (新)

主軸方位: N-17.5°-E

残存状況: 遺構の上面は削平されていて、柱穴の底付近のみ残存する。東側は調査区域外となるため、未検出、北辺及び南辺は一部のみ検出となった。

構造: 完全な形状は不明。検出範囲内では、桁行(南北)2間・梁行(東西)2間の側柱建物である。南北規模は西辺において4.40m、東西は検出範囲最大で3.34mを測る。

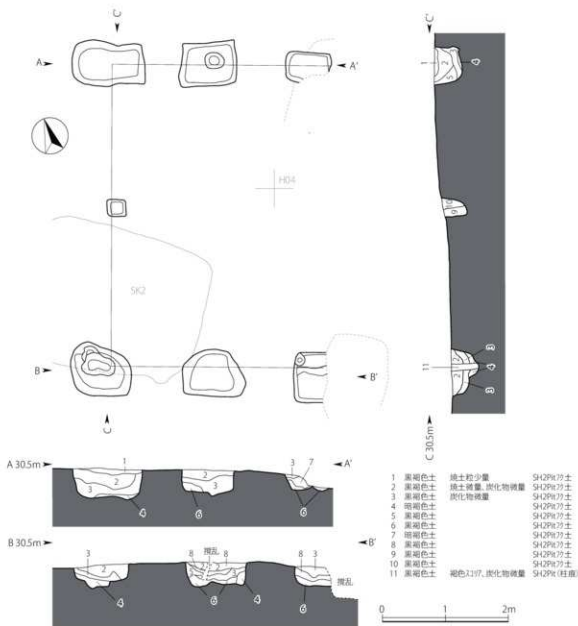
西辺の柱穴間は2.30~2.50m、北辺及び南辺の柱穴間は1.60mであった。

覆土: 柱穴内の覆土は大淵スコリアを微量に含む黒褐色土。
柱穴: 7基検出。西辺中央の柱穴のみが規模が小さく、縦24cm、横29cm、深さ50cmを測る長方形を呈する。その他の柱穴は、縦50~80cm、横75~115cm、深さ40~60cmを測り長方形または隅丸方形を呈する。

出土遺物: 図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。



第113図 SH2 遺構実測図

第3節 溝状遺構

SD1・2

遺構（第114・116図 図版10）

位置：B04・C04・D04・D05・E04・E05・G05・G06
重複関係：（古）SD1・2→SB36、SD1→SX2、
SD2→SB26、SD2→SH2（新）

残存状況：2条の溝状遺構が北東から南西方向に向かって平行に存在する。2条の溝の間隔は、1.5～2.6mを測り、南西方向に向かって緩やかに傾斜する。両端が調査区域外となるため未検出ではあるが、SD1は、西側の調査区（K地区）で検出されているSD1につながるものと考えられる（富士市教育委員会2008）。平面形態は環状となる可能性をもつ。

構造：SD1の幅は0.3～0.8m、深さ30～70cmを測り断面形は緩やかなV字状を呈する。ゲラッドC04付近で若干の傾斜変換により段がみられる。SD2は、幅0.3～0.6mを測りSD1同様緩やかなV字状を呈する。

覆土：大淵スコリアを含まない黒色土による自然堆積層。

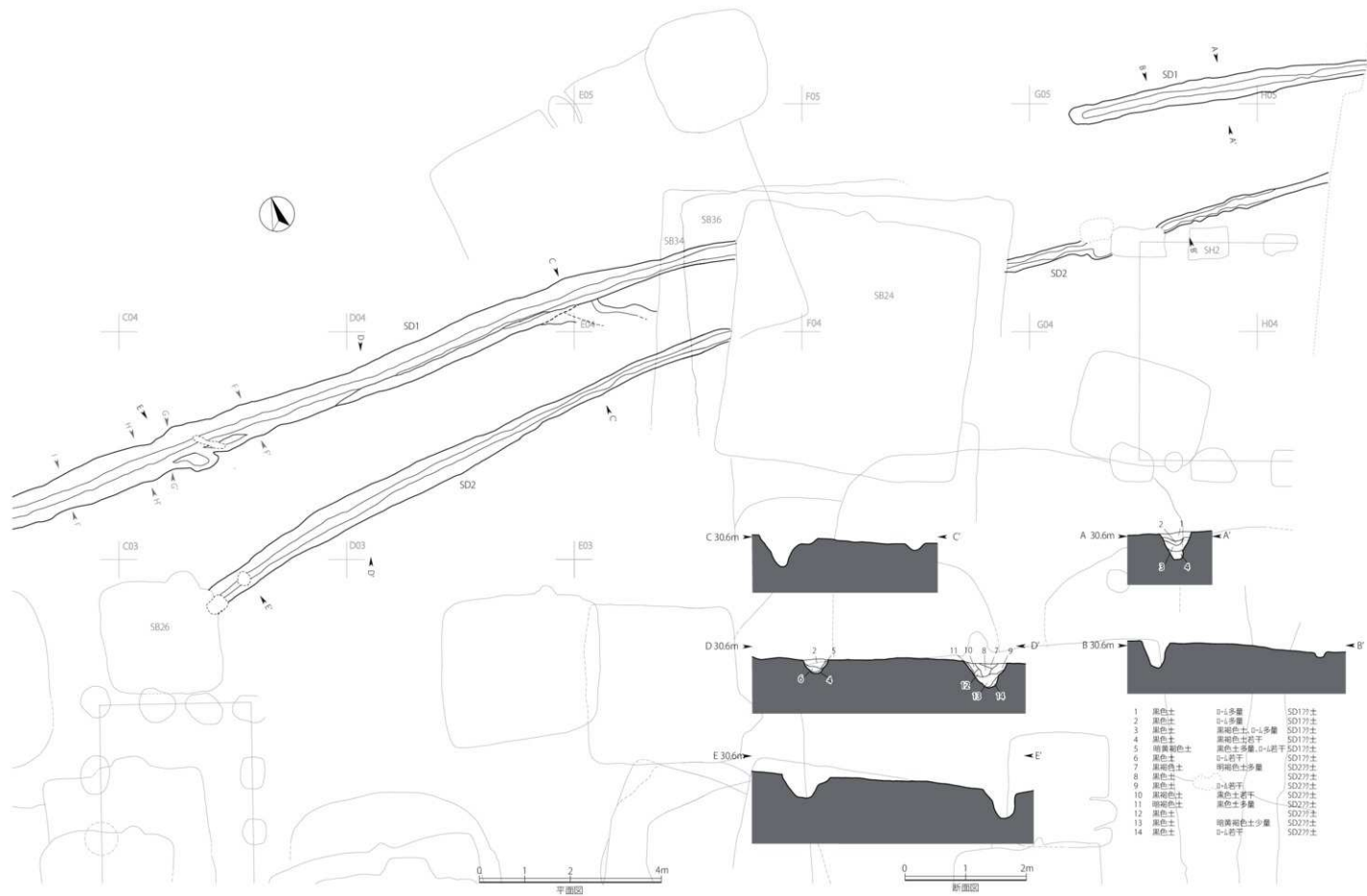
出土遺物（第115図 図版29・30）

SD1のゲラッドB04・C04付近の覆土中層から遺物がまわって出土している。

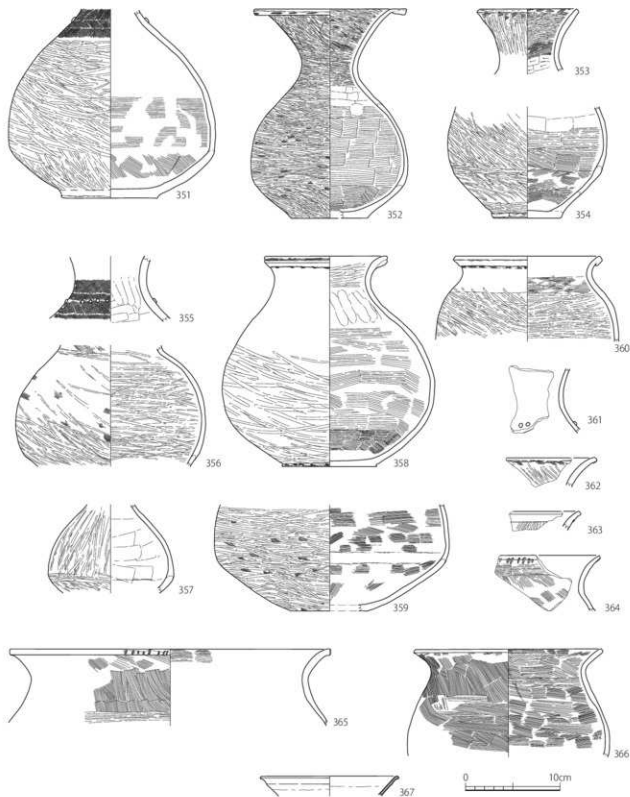
17点を図示した。351～357・359・361～363は壺、358・360は鉢、364～366は甕の破片である。351は広い底部から直線的に外方へ広がったのち、直立しながら頸部に至る形態を示す。頸部には最低3段の羽状縄文が施され、下方より二段目の上部に縦長の貼り付け文が施される。外面の調整はミガキが施されている。352は広口壺である。351同様、広い底部を有するものの、外方へあまり広がらず、丸みを持ったまま頸部に至る。口縁部は直線的に外方へ広がる。胴部内面のみハケメ調整で仕上げられるが他の部位は光沢を持つまで丁寧なミガキが施されている。358・360は頸部の形態や口唇部を肥厚させる形態などの類例から鉢とした。口唇部外面を肥厚させ、面を作り出している。内外面ともにミガキ調整で仕上げられている。364～366の甕はいずれも頸部が緩やかに外方に広がる形態や内外面ともにハケメ調整で仕上げられる点などが共通する。

所見

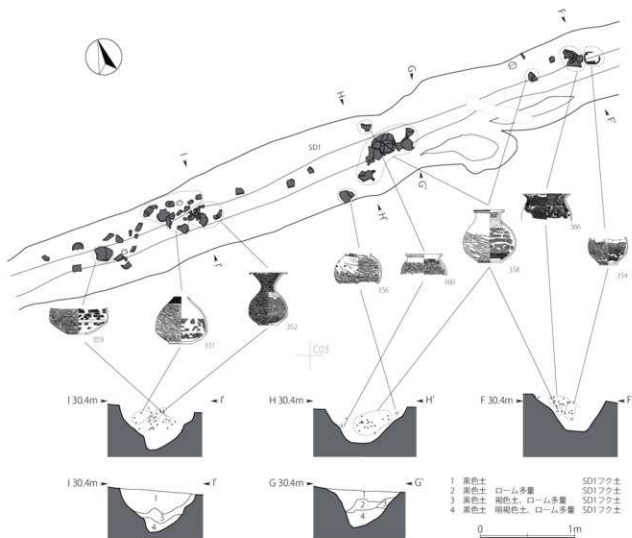
出土遺物から、SD1は弥生時代後期の「環濠」と考えられる。



第114圖 SD1・SD2 遺構測測圖



第115图 SD1 遺物実測図



第116図 S D 1 遺物出土状況図

S D 3・4

遺構 (第117図)

位置: C01・C02

重複関係: (古) S B 42 → S D 3・4 (新)

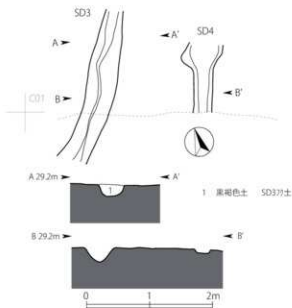
残存状況: 2条の溝状遺構が北から南方向に向かって平行に存在する。溝の間隔は、1.3 ~ 1.4 mを測り、底面は南に向かって約 11°の勾配で傾斜する。

構造: S D 3の幅は0.5 m、深さ36cmを測り、南側の断面形はV字状を呈するが北側の底面は広くなる。S D 4は幅0.3 m、深さ10cmを測り、台形状の断面を呈する。覆土: 大澗スコリアを多量に含む黒褐色土による自然堆積層。

出土遺物: 図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。



第117図 S D 3・4 遺構実測図

第4節 土坑・炉跡・性格不明遺構

土坑

SK 1

遺構(第118図)

位置:E06

重複関係:(古)SB1→SK1(新)

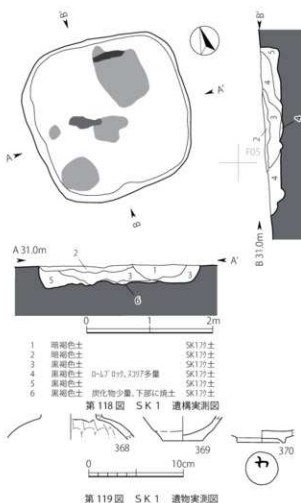
主軸方位:N-1.0°-E

残存状況:平面形は隅丸方形を呈し、東西2.55m、南北2.54mを測る。

覆土:大淵スコリアを多量に含む黒褐色土による自然堆積層。北東部に70×80cm、南西部60×50cmの範囲に焼土の広がり確認できる。

出土遺物(第119図 図版30)

3点を図示した。368は壺頸部付近の破片である。370の土師器碗は灰軸陶器の模倣形態であり、底部のみであるが外面に墨痕が認められる。筆使いからみて文字より記号「卍」のような印象をうける。



所見

切り合いから7世紀以降に属するものと考えられる。

SK 2

遺構(第120図)

位置:F04

重複関係:(古)SH2→SK2(新)

主軸方位:N-32.0°-E

残存状況:平面形は隅丸方形を呈し、東西2.87m、南北2.33mを測る。ピット4基検出。

覆土:大淵スコリアをやや多量に含む暗褐色土による自然堆積層。

出土遺物:図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。

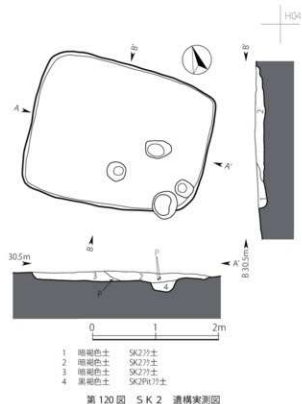
SK 3

遺構(第121図)

位置:C01

重複関係:(古)SK3→SB2(新)

主軸方位:N-21.5°-E



残存状況：南側はS B 2に東側は攪乱により削平されていて、平面形は不整形な楕円形を呈する。検出範囲最大で径0.80 mを測る。

覆土：大淵スコリアを微量に含む暗褐色土による自然堆積層。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

切り合い関係から、7世紀以前に位置づけられる。

SK 4

遺構 (第121図)

位置：C01

重複関係：(古)SK 4→SB 2(新)

主軸方位：N-7.0°-E

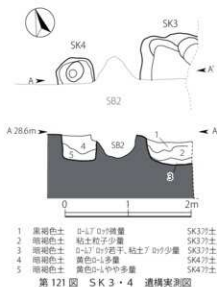
残存状況：南側はSB 2により削平されていて、平面形は不整形な隅丸方形を呈する。検出範囲最大で径0.60 mを測る。

覆土：大淵スコリアを含まない暗褐色土による自然堆積層。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

切り合い関係から、7世紀以前に位置づけられる。



第121図 SK 3・4 遺構実測図

SK 6

遺構 (第122図)

位置：D02・E02

重複関係：(古)SB 28→SK 6→SB 7(新)

主軸方位：N-14.5°-E

残存状況：南側はSB 7に削平されている。平面形は楕円形を呈し、検出範囲最大で東西1.96 mを測る。

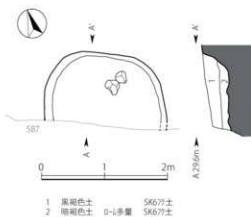
覆土：大淵スコリアを多量に含む黒褐色土による自然堆積

層。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

切り合い関係から、7世紀以前に位置づけられる。



第122図 SK 6 遺構実測図

SK 7

遺構 (第123図 図版9)

位置：G02・H02

重複関係：(古)SX 1→SK 7(新)

主軸方位：N-15.0°-E

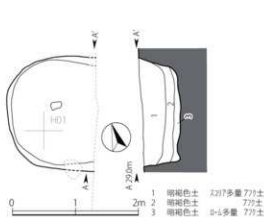
残存状況：東側は調査区域外となり未検出。平面形は楕円形を呈し、検出範囲最大で南北1.84 mを測る。

覆土：大淵スコリアを多量に含む暗褐色土による自然堆積層。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。



第123図 SK 7 遺構実測図

炉跡

FP1

遺構(第124図)

位置:G03

重複関係:(古)SB35→FP1→SB30(新)

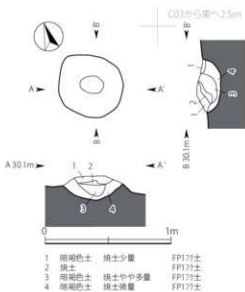
残存状況:SB30の掘方の下層に検出される。平面形は円形を呈し、径50cmを測る。

覆土:底面は丸底となり、焼土を多量に含む暗褐色土が堆積する。

出土遺物:図化出来た資料はない。

所見

切り合い関係から、古墳時代前期以前の建物に伴うか跡と考えられる。



第124図 FP1 遺構実測図

FP2

遺構(第125図)

位置:C03

重複関係:(古)FP2→SB26(新)

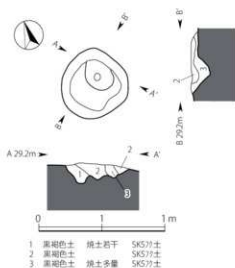
残存状況:SB26の掘方の下層に検出される。平面形は円形を呈し、径54cmを測る。

覆土:底面は凹凸をもち、焼土を多量に含む黒褐色土が堆積する。

出土遺物:図化出来た資料はない。

所見

根拠に乏しいが、古墳時代前期の建物に伴うか跡と考えられる。



第125図 FP2 遺構実測図

不明遺構

SX1

遺構(第126図 図版9)

位置:G02・G03・H02・H03

重複関係:(古)SB25→SX1→SK7(新)

主軸方位:N-21.5°-E

残存状況:北から南に向かって溝状に存在する。溝底は南に向かって4.5°傾斜し、幅0.7~1.1m、長さは検出範囲最大で南北20m、深さ25~30cmを測る。溝底には厚さ10cmの黄褐色ローム土が貼られている。

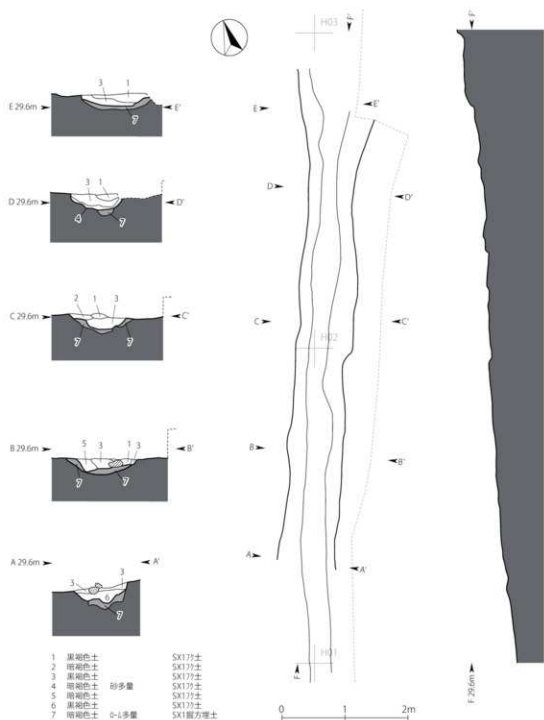
覆土:大淵スコリアを多量に含む暗褐色土の自然堆積層。

出土遺物(第127図 図版30)

371は台付臺の底部付近の破片で荒いハケメが施される。372は柱状脚高台の脚部の破片である。胎土が荒く、器面荒れも著しいことから調整は観察できない。比較的低い脚部形態を示す。373は須恵器高台環である。底部周辺のみであるが、低い方形高台、底部回転ヘラ切り、底部から体部に移行する明瞭な稜等から、藤枝市助宗窯で生産された箱形形態の環とおもわれる。

所見

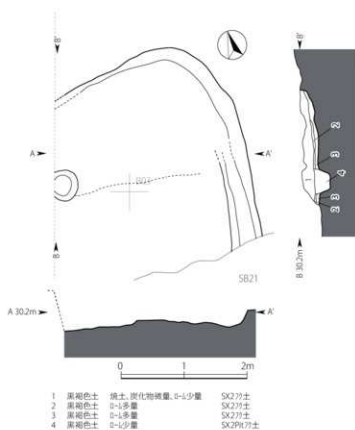
時期は不明である。



第126図 SX1 遺構実測図



第127図 SX1 遺物実測図



第128図 SX2 遺構実測図

SX2

遺構（第128図）

位置：A04・B04

重複関係：（古）SD1→SX2→SB21（新）

残存状況：西側は調査区域外となり、南側はSB21により削平されている。

構造：平面形は、不整形な方形を呈するものと考えられ、検出範囲最大で南北3.72mを測る。覆土は大淵スコリア

を少量含む暗褐色土による自然堆積層で、南東部に壁溝の一部及びピットが1基検出されたが、建物跡として認識するまでには至らず性格不明遺構とした。

出土遺物：図化出来た資料はない。

所見

時期は不明である。

第5節 遺構外出土遺物

宮添遺跡E地区の遺構外からは、縄文時代から古代末・中世初頭まで多様な遺物が出土する。大半は土器類であり、弥生土器・土師器・須恵器・灰輪陶器が出土している。その他石器・石製品、金属製品、玉類も出土している。以下、遺物の種類ごとに記述をすすめる。

弥生土器・土師器（古墳時代）（374～405・407～411）（第129図 図版31・32）

374～376は弥生時代後期の可能性のある広口壺の口縁部である。376は外面に縄文を施文後、棒状粘土が貼り付けられる。379・381は短頸壺と考えられる。いずれも径2mm程度の穿孔が三箇所に認められる。399は小型丸底壺の口縁部片であるが縦方向に極細いミガキ調整が施され丁寧仕上げられている。色調は赤みを有するものの赤彩されているかどうかは判断できなかった。410は環としたが、古墳時代前期の鉢として考えることもできる。

土師器（平安時代）（412～453）（第130図 図版32・33・34）

412～424の13点は駿東型環である。形態は①箱環の退化②底径縮小③底径縮小・器高低い、という三つの形態に分けられる。①は422、②は412・413・416・417・418、③は421・424にあたる。422は外面を丁寧にナデ、内面はミガキを施し見込み部の暗文はみられない。412・416・417には類似した調整で、内面にはヘラミガキを施している。底径縮小し器高が低い③の2点も、調整手法は類似している。これらの年代観は、①が9世紀初頭②が9世紀前半③10世紀と考えられる。

426は土師器碗で灰輪陶器を模倣している。428も同様な土師器大碗で、口径は20.6cmを測り、内外ともに丁寧なヘラミガキを施す。

墨書土器は9点図示した。416・417・418・420・423と小破片資料として431～435・437がある。文字の判読可能な例として「中」と判読される、416・420・431・434の4点がある。417は体部外面と見込み部に吉祥句「吉」であろうか。423の例も「吉」と類似した筆使いがみられるが、この2点とも明確な判断はできない。

刻書された例が436と438の2点みられた。これらは

焼成後に刻まれたもので、いずれも「中」と判読される。442～446は土師器碗で、須恵器や灰輪陶器の模倣形態である。これらのうち442・445は三角形の高台をもち、見込み部に放射状暗文を施す。土師器ではあるが、須恵器の环蓋を模倣する手法の土器は、藤枝市助宗宮の衰退期に並行して盛行する。442と445は9世紀前半においてもよいのではないかと。

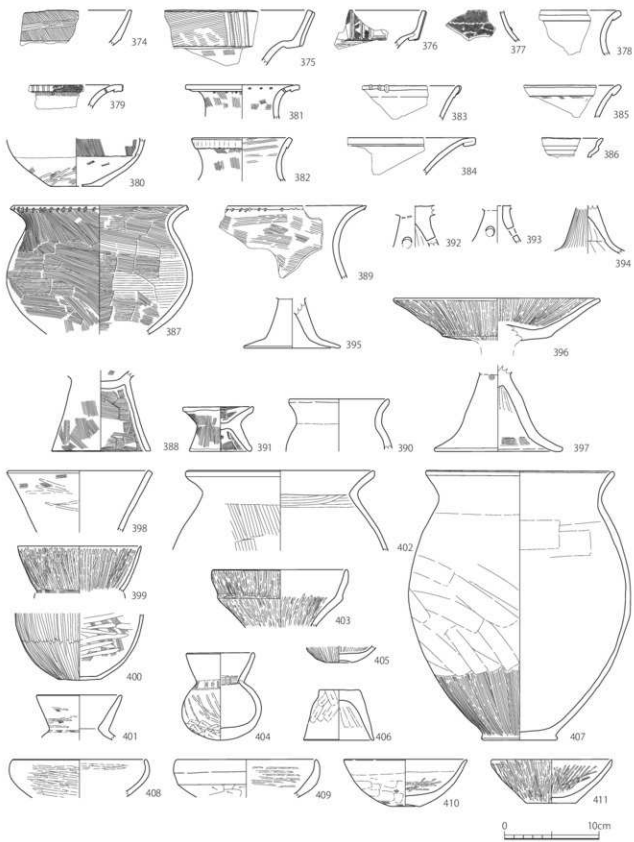
447は器台のような、円孔のある脚に平板状の本体を乗せた形態であり、端部を面取りし上面はミガキが施される。

448～451は土師器小皿である。いずれも小型の扁平な形態で、底部は回転糸切り未調整である。ロクロによる強いナデ押さえの痕跡が明瞭に残されている。口径は7.4～9cm、器高1.8～2.3cm、底径4.6～5cmを計測し、きわめて法量が近似している。これらと同じものが、SB21（236～245）からも出土している。これらの年代は11～12世紀のなかに位置づけられる。共存する土器も明確ではなく、今後の検討課題である。

その他の土師器として、452は下半を欠損しているが、口径18.2cmを計測する大碗状の形態と推定される。器壁は3mmと薄く、内面は黒色処理され、細かい単位のヘラナデがみられる。さらにヘラによる楕円風の暗文を施す。外面にはヘラミガキが認められる。胎土には雲母を多く含み、丁寧な調整をする。これは在地の土器の一群ではなく、明らかな搬入品と考えられる。453は柱状高台の皿で、12世紀に広範囲に分布する。底部は回転糸切り未調整である。

須恵器・灰輪陶器（454～476）（第130図 図版35）

454は須恵器蓋、455・456・458は蓋受けをもつ須恵器環である。環の蓋受けの立上り角度の差はあまりないが口径に差が認められ、458では7cmと小さく、455は



第129圖 遺構外出土遺物實測圖(1)

10cmを計測する。454の蓋は9.2cmである。これらの時期は7世紀と考えられる。457は須恵器高台脚上半から環の底部にかけての破片である。

459・460・467・469・474・475の6点は須恵器高台環である。459は須恵器の焼成を受けているが、本来は土師器皿の形態をしたものと考えられる。460は底部に木口痕が残る高台内側は「L」状工具によりシャープな仕上がりとなる。藤枝市助宗窯の製品である。467は底部を欠損するが、本来は高台環と思われる。

461は軟質須恵器であり、信濃国からの搬入で、無高台の底径が小さく体部が大きく開く。焼成は脆く軟質で脆弱な仕上がりとなる。10世紀に比定される。

462・463・464・466・470・472の6点は灰軸陶器碗である。462は小碗、463は灰軸陶器終末期の百代寺窯期で11世紀、470は高台が高く深碗形態となる東山72号窯期で、10世紀末～11初頭に比定される。464は三日月高台に類似し、包含層出土灰軸陶器のなかでは古い形態を呈している。472は底部が中央に向かって薄く、高台は三角形を呈し、内面には重ね焼き痕がみられる。色調は暗青色が強く、形態も他の灰軸陶器とは相違することから、静岡県の東遠江で生産されたものと推定される。

465・471・473・476の4点は灰軸陶器壺である。これらのうち、465・471は小型壺で465は無台、471は無台がつけられる。465は底部回転ヘラ切り、色調は乳灰色を呈し黒笹14号窯期の色調と類似している。471は丸みをもつ胴部に高台がつくもので、底部外面には焼成前の記号風のヘラ書きが認められる。大型の壺にも無台(473)と高台(476)のつくものが出土する。無台の473の底部にはモミカ繊維状の圧痕が認められる。

土製品 (406,477) (第129・130図 図版32・35)

406は「台盤状土製品」とした。頂部は平坦に作られ台付裏の台部と同じ形状を呈する。

477は9cm×6cmの長方形で先端が先細りする。側端の一方が面取りされ、下端は残されるが突出部は欠損する。調整は丁寧なナデ、内面には横ナデ痕が明瞭に残される。胎土色調は土師器に類似している。

石器・石製品 (478～489) (第130・131図 図版36)

石器・石製品は、多様な種類が出土するが、種類ごとの点数は少ない。12点の内訳は、細石刃(478)、石鎌(479・488)、スクレイパー(480)、石匙(481・482)、打製石

斧(483)、甲石(484)、砥石(485・486)、石錘(487)、小銅鐸舌(489)である。

478の黒曜石の細石刃は、薄く細長い剥片の先端を尖らせたもので、長辺縁部に二次剥離を施す。

479の石鎌は、無柄式で一部欠損する。比較的厚くつくられている。488は上下が欠損するため形状は不明である。表裏と側面が研磨されている。尖る先端部は穿孔され、垂飾として使用されたものとおもわれる。

480のスクレイパーは台形を呈し、斜の一辺に刃部がつくられている。刃部には二次剥離が認められる。

481・482は欠損しているが、横長の石匙である。482は握みを欠損する小型の石匙で、ホルンフェルスである。両者ともに形を整える一次剥離のみで、刃部への細部加工は施していない。

483の打製石斧は完形品である。短冊型で片面は自然面を残している。全体に荒い加工のみで、刃部への二次剥離はみられない。

484は細長く、楕円状の断面を呈する甲石である。表面は滑らかで、両端に叩き痕跡が認められる。485・486は、四面使用の定型化した長方形の砥石である。487は、片面のみ剥離を施す石錘で、自然面を多く残している。

489は小銅鐸舌の可能性のある例で、欠損のため巾と厚みは不明であるが、長さ6.6cmを計測する。現状では三面と両端が面取りされ丁寧な研磨を受け、上端付近に一方から4mmの穿孔が認められる。本来は八面の面取りがされていたと推定される。

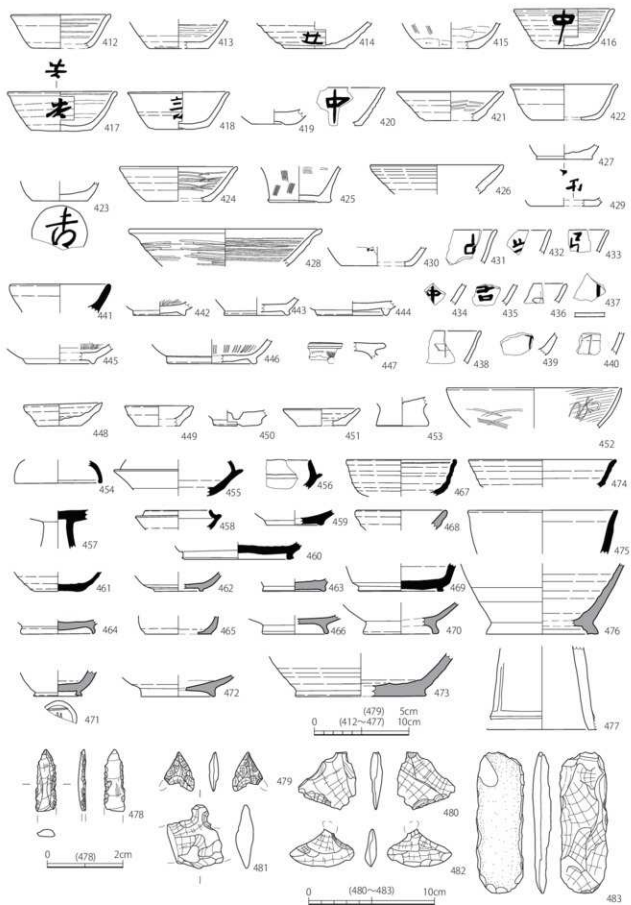
鉄製品 (490～501) (第131図 図版36・37)

491～493は鉄鎌と思われる。495は上端が曲がり鉄釘ではないかと思われる。

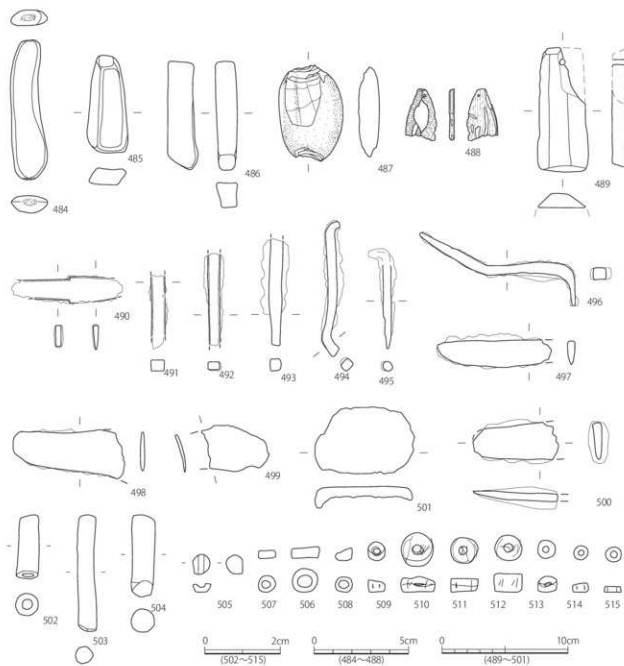
490・497は先端が一方に曲がることから刀子の可能性が、498は扁平な薄い板状で先細りする形状から鎌の可能性が、500は先細りしわずかに曲がる本体からヤリガンナの可能性がある。

玉類 (502～515) (第131図 図版37)

玉類は、碧玉3点(502～504)、白玉10点(506～515)、ガラス小玉1点(505)である。これらは住居跡出土例も多く、S B 01(504)、S B 16(505)、S B 17(510～515)、S B 21(502)、S B 33(506)と10点が出土している。これらのうち503と504は穿孔前の未製品である。



第130图 遺構外出土遺物実測图(2)



第131図 遺構外出土遺物実測図(3)

第4章 総括

前章までに宮添遺跡E地区における調査成果について述べてきた。本章では、以下の四つの視点から、それらの成果をまとめておくこととする。

第一に、竪穴建物跡からみる遺跡の消長についてまとめることとする。宮添遺跡では本調査に限っても、合計120軒以上の建物跡が報告されている。その数の多さから、調査当時より「大集落」として考えられてきたが、時期ごとの様相をみると決して規模が大きいとはいえない。しかし、弥生時代後期から古代末・中世初頭まで断絶を挟みながらも、継続して生活の痕跡が認められるということは、その土地自体に重要性があったからと考えられる。そこで、まずE地区を中心とした集落における活動を整理する。

第二に、今回の調査において特筆されるべき調査成果の整理を時代ごとに行う。前述の通り、宮添遺跡は長期間にわたり、集落として存在してきた。そのため、調査において特筆されることは多岐にわたり多少複雑にはなるが、「調査成果のまとめ」という意味から整理を試みる。

第三・第四に、宮添遺跡の歴史的位置づけを試みることとする。当然、時代ごとに地域内における役割・位置づけが異なっていたに違いない。それは、一つの集落が単独で存在していたのではないということにもつながっている。そのため、多少視点を広げ、第三では、弥生時代・古墳時代を中心に、第四では7世紀以降の地域社会の復興を通じて、宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化に迫っていきたい。

第1節 E地区における遺構の変遷

E地区における調査においては、42軒の竪穴建物跡、2棟の掘立柱建物跡、4条の溝状遺構を検出した。遺構は調査区南側においてのみ検出され、北側は切土による削平を大規模に受けているため残存していない。とくに調査区南東部には弥生時代後期から古墳時代後期の遺構が集中し激しく切り合っているのが確認された。

宮添遺跡では、既に報告されているK地区、G地区、D地区の検出内容を合わせると120軒以上の建物跡が確認されている。丘陵先端部に立地する宮添遺跡は、現況では平面確保のため切土・盛土が行われ大きく地形が改変されているが、集落が存在した当時は、E地区及びD地区の検出状況(図5)をみると、10%程度の勾配をもって南に下がる斜面であったことが認識される。またD地区中央付近に南北方向の浅い谷が確認されていることから、宮添遺跡に遺構が集中して検出されるということは、立地による残存状況の違いとも考えられる。

D地区よりおよそ4m高い標高30m付近に位置するE地区には、緩やかな高低差はあるものの谷地形は確認できない。また、D地区南端では古墳時代前期以降に傾斜が若干埋まったことが認識されるが、E地区、G地区ではこのような平坦部の存在は確認できない。(図5)

今回の調査では、こうした立地条件の中で、弥生時代後期から平安時代まで盛衰しながら集落を形成した様子を理解することができた。以下、段階ごとに遺構の変遷についてまとめることとする。

E地区1段階(弥生時代後期)

E地区において遺構が確認されるようになるのは、弥生

時代後期前半の遺物が出土するSD1である。SD1はSD2と平行に検出された溝状遺構である。SD1はK地区のSD1とつながる「環壕」として認識される。SB29・SB32・SB35・SB40・SB41は弥生時代後期の建物跡と考えられるが、SD1が溝として機能していた段階に同時存在していたかは明らかでない。当該期の遺構は多くは、古墳時代前期の遺構とともに調査区南東部において多くの切り合い関係を持って検出されており、度重なる建替えを想定させる。規模は5m前後で小判型もしくは丸みの強い隅丸方形を呈し、4基の主柱穴を持つものがみられる。主軸は北から北北東方向を向く。

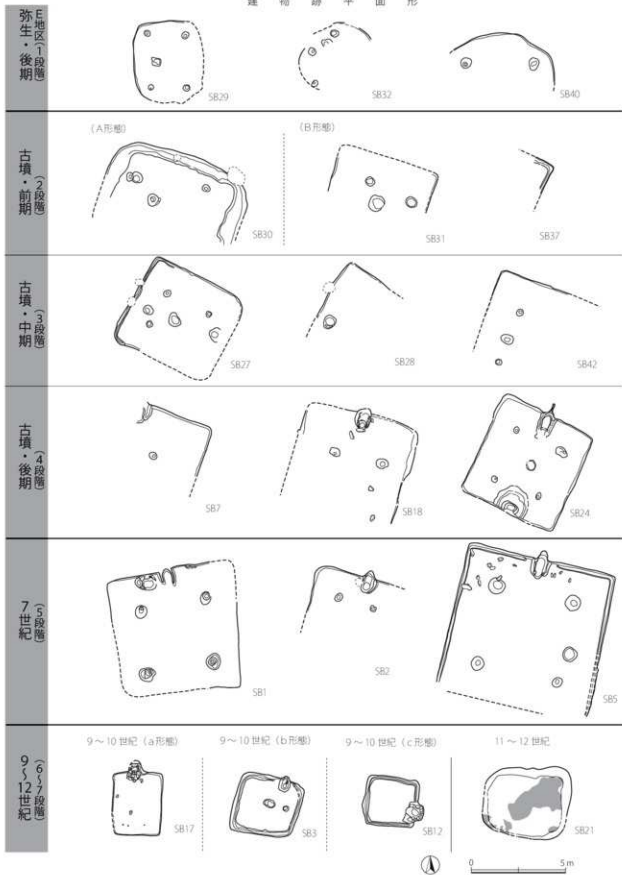
E地区2段階(古墳時代前期)

D地区同様、E地区においても古墳時代前期前半の遺構は明確ではない。これが古墳時代前期中葉以降になると再度集落として活動し始める。この段階の竪穴建物跡には、丸みの弱い隅丸方形を呈し幅広くやや不整形な壁溝をもつもの(A形態)と、角に丸みはなく方形となるがやや台形を呈するもの(B形態)が認められる。

A形態にはSB30・SB33が該当し、どちらからもS字状口縁裏が出土する。SB33は東西が8mを計りE地区において比較的規模の大きい建物跡である。東西9mを測るD地区SB23を始め、同様の構造をもつ建物跡の多くからS字状口縁裏の出土が確認されている。主軸は北北東方向を向く。

B形態には、SB25・SB31・SB37・SB38・SB44が該当し、5m前後の規模をもつものが多い。主軸は北北東方向を向く。

建 物 跡 平 面 形



第132図 宮添遺跡E地区における竪穴建物跡の平面形態の変化



第133図 宮添遺跡D地区・E地区の遺構変遷図

E地区3段階（古墳時代中期後半）

D地区同様、2段階の集落は、古墳時代中期に継続せず、空白期間を挟み、古墳時代中期後半段階に再度、認められるようになる。平面形は方形を呈し、4基の主柱穴や幅狭の壁溝を持つものが認められる。焼坑施設としては炉が使用されている。また、この段階まで遺構の覆土には、大淵スコリアが殆ど混入しない。

S B 27・S B 28・S B 34・S B 36・S B 42がこの段階の遺構と考えられ、規模5～7mとばらつきがある。主軸は北北東方向を向いているが、前段階よりやや東を向く傾向がある。

E地区4段階（古墳時代後期）

焼坑施設としてカマドが導入される段階で、住居の形状や壁溝等の構造は、前段階と類似しており、継続的に集落が存在していたものと認識される。カマドは北壁中央に位置し焚口両側に袖石が配置される。隣接して天井石として高架されていたと考えられる扁平な石材が発見される例がみられる。

掘方埋土及び床面付近の覆土には、大淵スコリアは殆ど混入せず、その上層に大淵スコリアのみで構成される土層または多量に混入した土層が堆積している。

S B 7・S B 9・S B 18・S B 24・S K 3・S K 4がこの段階の遺構と考えられ、規模は5～8mとばらつきがある。主軸は、前段階よりやや北を向き、北から北北東方向を向く。

S B 24は、宮添遺跡においてカマドを採用する段階の遺構であり、建物の南側には入口施設の可能性も指摘できる周堤を伴う土坑が検出されている。沢東A遺跡の調査においても、カマドの石材の使用法や入口施設の可能性がある土坑の存在など、S B 24と類似する建物跡が報告されている（富士市教委1995）。

E地区5段階（7世紀）

4段階から間を空けずに継続するのは明らかではないが、この段階と考えられる住居跡はS B 1・S B 2・S B 5・S B 13のみである。規模は6～8mとばらつきはあるが前段階と比べて大規模化する。主軸は、北から北北東方向を向く。この段階を境に、8世紀には遺構は継続しない。

E地区6段階（9～11世紀）

8世紀、奈良時代に入ると、E地区では遺構が認められ

なくなり、平安時代に入り再度、集落化する。

建物には、柱穴が検出できなくなる例が多く、前段階に比べてさらに小規模化する。その形状には、横長や縦長など、長方形を志向するもの（a形態）、形状が歪みをもつ隅丸方形のもの（b形態）、（b形態）の住居を東方向に90度回転させてカマドが東壁南側に位置する構造をもつもの（c形態）が認められる。また、掘立柱建物（SH1）もこの段階で認められるようになる。a形態、b形態の主軸は、前段階同様北から北北東方向を向く。

a形態には、S B 8・S B 11・S B 14・S B 17・S B 46が該当し、規模は短軸3m前後、長軸4～5mを測る。b形態には、S B 3・S B 6・S B 10・S B 16・S B 20・S B 26が該当し、規模は3m前後と小規模なものが多く見られる。c形態には、S B 4・S B 12・S B 15・S B 19が該当する。規模は、b形態同様、3m前後と小規模なものが多い。c形態の住居跡の多くは、b形態の住居跡を削平して構築される例がみられることから、c形態が初現する10世紀になって東カマドへの移行があったものと思われる。

この段階の住居跡には、カマド周辺から多数の石が検出されているものが多い。ただし、住居の廃棄に伴うのか後世の掘削によるものか不明であるが、使用当時の形状が理解できるような良好な状態で検出されたものは殆どなく、唯一S B 12において多数の石材が焼坑室を囲むように配置されているのが確認されている。

E地区7段階（11～12世紀）

E地区において、この段階の遺構として認められるのはS B 21のみである。S B 21は、カマドを有しない竪穴建物跡であり、その形状は不整形な楕円形で床面には広範囲の埴土が検出され、覆土から多数の鉄滓が出土していることから住居跡というよりは工房跡としての可能性をもつ可能性もある。

以上、宮添遺跡E地区の遺構の変遷について、各々の段階ごとの特徴を中心にまとめてみた。D地区同様、弥生時代から平安時代まで集落が断続的に存在したことが理解できる。とりわけ古墳時代中期前半及び奈良時代の遺構は殆ど検出されず、出土遺物も稀有である。

弥生時代後期（1段階）及び古墳時代前期（2段階）の集落は、出土遺物等からは継続しないものと考えられるものの、ほぼ同じ場所を中心に遺構が集中するという傾向を

示す。E地区では南東部に限られており、検出件数ではD地区の方が圧倒的に多い。特に弥生後期においては、E地区のSD1より北側からほとんど遺構は検出されていない。このSD1および平行するSD2を「環濠」と考えると、この段階の集落については、SD1を北限とするD地区を中心とした集落として捉えることができる。

竪穴建物跡は、弥生時代後期の楕円形から古墳時代に入り方形もしくは隅丸方形へ志向し、規模は2段階A形態にD地区SB23やE地区SB30のように8mを越える建物跡が特出する以外は5m前後と一定している。

古墳時代中期後半から7世紀（3～5段階）は、検出状況から継続的な集落活動がおこなわれていたものと推察される。この継続する集落は、カマドの導入や大濶スコリアの降下など社会的・自然的な両期を迎えている。前段階までと比べると遺構の検出件数はやや少なくなるが、5段階に向かって建物跡の規模は大きくなる傾向を示し、D地区、E地区を通して比較的広い間隔で構築されている。

宮浜遺跡に再度集落が形成される平安時代（6～7段階）になると、建物跡の規模は4m前後と縮小化する。D地区では前段階に比べると数も減少しているのに対し、E地区では特に10世紀以降の6段階b・c形態を中心に増加する傾向をもつ。従って平安時代においては、丘陵末端からやや小高い位置にあるE地区を中心に集落が形成されたものと想定される。

（小島利史）

参考文献

富士市教育委員会 1995『伊東A遺跡』

第2節 E地区における調査成果

「環濠」の存在

前述のとおり、宮添遺跡が集落化するのには弥生時代後期のことである。しかし、古墳時代以降における建物跡の構築や土地改変の影響もあって、その様相は断片的・限定的である。その中において、SD1・2の存在は、集落開始期の様相を示してくれる。SD1の覆土中層からは、雌鹿塚I～II式における土器が比較的まとまって出土している。二条の溝は、北東から南西方向にはほぼ平行して認められ、緩やかに弧を描きながら床面を西に傾斜している。SD1はE地区の西側、平成16年に調査したK地区におい

て検出されたSD1につながるものと考えられ、直線距離で約60mの溝が「集落の南北を区切る」ように存在する。遺構上面は削平を受けているが断面V字状であることが確認される。

この二条の溝は一体、どのような性格のものであったのか、どのように呼称すべきか。実は、愛鷹山麓ではこのような溝が集落の北側に東西方向に認められる例が多い。宮添遺跡から北東600mの同一丘陵上に存在する平権遺跡では、弥生時代後期前半の「条濠」とよばれる断面V字状の溝の一部が検出・調査されている。また、沼津市八兵衛



第134図 宮添遺跡における「環濠」と弥生時代後期の建物跡

洞遺跡では、東西220mにわたり土坑を伴う溝が検出され(高尾1999)、さらにこの溝は、清水柳北遺跡から愛鷹尾上遺跡群を貫くように存在する可能性が指摘されている(小泉2002)。自然地形と生活域の間に溝を掘削することにより雨水侵入を防ぐことやまた、加えて、土坑が伴うことからそれを落とし穴と考え、動物の捕獲目的などもあったのではないかとする見方もある(小泉2002)。また、篠原和氏は、環濠集落(「溝で囲まれる集落一般をさしたもので、自然地形などを利用したものを含む広義の意味)のあり方を3つの様相としてまとめ、そのうちの「様相A」のように、集落形成段階で掘削される溝は、「集落成員の結合を維持する」ために掘削された可能性を指摘している(篠原2002)。宮添遺跡における二条の溝も集落開始期に掘削されており、篠原氏の見方は参考になる。

近年、「環濠」の防御性の有無については議論がなされているところであるが、石川日出志氏はいくつもある弥生時代の環濠の機能・役割として①防御、②区画、③象徴、④結束の4点を重要な点として挙げている。そしてこれら「4つの機能・役割はそれぞれ独立したものというよりも相互に関連しあうもの」と考えている(石川2010)。平権遺跡で「条濠」と称されるものは②「区画」という概念の一部であると考えられ(田村2009・財)静理研2010)、前述の篠原氏の考えは④「結束」にクロウズアップした考えであるが、当然、象徴や区画など石川氏同様、総合的な役割を想定している。加えて、雨水や動物の侵入を防ぐなどの色々な役割があった可能性は否定しえない。

以上のような多目的な機能・役割を有していた可能性をふくめ、宮添遺跡に存在する溝を「環濠」と呼ぶことにするが、防御機能のみを意味する「環濠」と必ずしも同義ではない。

「環濠」の解消と集落の断絶

古墳時代に入り、前述の「環濠」は解消されている。正確にいうと、環濠は意識的か自然環境によるかは定かではないが、弥生時代後期には埋まり始めている。調査時の所見では、再度、掘削したような痕跡は認められず、古墳時代前期には溝の覆土を切るように竪穴建物が構築されているのが、K地区S B 16で確認されている。加えて、それまで「環濠」の南側を居住域としていたと考えられるが、この時代になってかつての「環濠」を挟んだ北側にも建物跡が認められるようになり、集落の平面構成にも変化が認められるようになる。しかし、前期後半、K地区S D 2で

確認される中身代1式期を境に集落が断絶する。

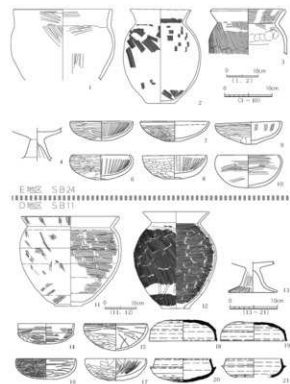
その後、100年近くが経ち、再度、集落として活動の痕跡が確認されるようになるのが古墳時代中期末のことと考えられる。

大型建物跡の存在

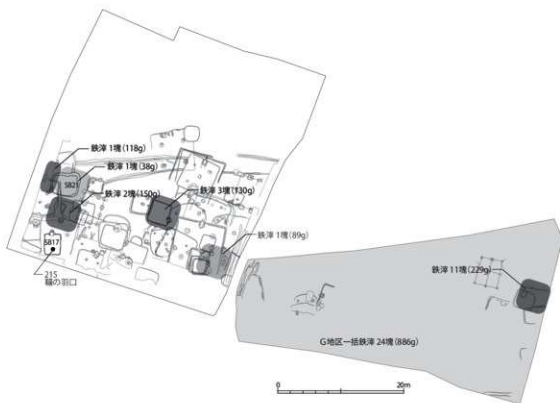
竪穴建物跡の時期別変遷については前節で触れたとおりであるが、古墳時代後期から7世紀の建物跡と考えられるS B 1 (6.7 × 6.8 m) やS B 5 (8.1 × 7.6 m) の規模は突出している。同時期の他の建物跡に比べ規模が突出する建物の存在はE地区に限ったことではなく、やはり古墳時代後期から7世紀の建物跡D地区S B 9 (7.5 × 7.2 m) にも見られる。ただし、他の建物跡との隔絶を示すような区画は認められず、規模の違いが居住者の階層差を示すものなのかは明らかではない。

火山噴火物(大淵スコリア)の降下時期

富士市内の遺跡を発掘調査すると「大淵スコリア」という火山噴火物の存在が認められる。「大淵スコリア」は、1,500年～2,000年前に富士山南麓の寄生火山である高鉢山から噴出したと考えられている(高地1988)。また、近年では、ハンドコアラーにより採取した炭化材などの放射性炭素年代測定法からその降下をAD400～440とする



第135図 大淵スコリア降下前後の土器群



第136図 宮添遺跡における鋳冶関連遺物の出土位置

意見（小松原・穴倉・岡村 2007）もあるが、小松原らの調査の測線5で確認されたスコリアの上部では、AD420-550という年代が示されており（コア番号5-1）、年代的幅を持たせて解釈をせざるを得ない状況であった。

考古学的な立場からは「概ね5世紀末から6世紀前半頃」に降下したのではないかというのが経験的な意見であった（志村 2001）。その中において、E地区S B 24の調査は、その降下年代を知る上で貴重な資料となる。S B 24は焼失家屋と考えられ床面やカマド燃焼室から土師器が比較的まとまって出土している。土層観察から、自然堆積により竈穴が窪地になった段階で大淵スコリアの堆積により窪地が埋まっていることが確認されている。S B 24の遺物は、須恵器模倣の土師器環が認められず、MT 15型式併行期の須恵器がまとまって出土しているD地区S B 11出土よりも若干古い様相が認められる。そのことから、大淵スコリアの噴出はT K 23・T K 47型式併行期頃と推測される。この時期の土師器編年は再考すべき点が多いことから、今後さらなる検討の必要もあるが現段階では、古墳時代後期前半に噴出したものと考えられる。

カマドの導入

カマド導入時期の形態的特徴については前節でふれてあるとおりである。E地区S B 24にはカマドとカマドの両者が存在する。しかし、調査者の所見によると、カマドのみが存在していた建物を改修し、カマドや入り口部の周堤・掘り込みを設置した可能性が指摘されている。当時、存在した建物すべてが同時にカマドを採用したわけではないと考えられるが、古墳時代後期には宮添遺跡においてカマドが認められるようになり、形態的にも類似していることは特筆される。また、感覚的な意見であるが、導入時のカマドは残存状態がよく、意識的に破壊された痕跡があまり見られないことから、その段階には、住居廃絶時におけるカマドを破壊する行為は一般的ではなかったという見方でもできる。

皇朝十二銭の出土

D地区S B 10からは日本で最初の流通貨幣と言われる、皇朝十二銭の一番目「和同開珎」が出土している。また、E地区S B 19からは、10世紀前半と考えられる土師器に伴って、皇朝十二銭の第11番目「延喜通宝」が出土し

たことは特筆される。質の低下が著しいことから、銭文も完全に判読できるわけではないが、残存部の状況から延喜通宝と考えられる。県内での出土も珍しく、鳥田市居倉遺跡で3例が知られる。(鳥田市教委 1984)

鍛冶生産

10世紀の建物跡であるS B 17からは、鞆の羽口の破片が出土している。この建物内で小鍛冶が行われていたかどうかは、慎重に検討しなければならないが、平安時代の宮添遺跡における鍛冶生産の存在が明らかとなったことは特筆される。また、S B 21の床面からは夥しい量の焼土や鉄滓が検出され、G地区からも少量ながら鉄滓が出土していることから、小鍛冶に限定されない鉄生産の存在を想定させる。また、S B 21からは、11世紀後半から12世紀前半の土師器小皿が大量に出土しており、通常の住居跡とするには偏った遺物の出土を示す。整形炉跡とするには論が飛躍しすぎかもしれないが、「住居」以外の建物であったことは十分に想定される。

(佐藤祐樹)

参考文献

- 石川日出志 2010『農耕社会の成立』(シリーズ日本古代史①) 岩波書店
 小泉祐紀 2002『愛鷹山南麓周辺における弥生集落の動態』『中部弥生時代研究会誌』3号
 小松原純子・穴倉正展・岡村行信 2007『静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動』『活断層・古地震研究報告』7
 鎌原和大 2002『環濠』『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会
 高尾好之 1999『大塚塚土坑群を伴う環濠—八兵衛洞遺跡群—』『平成11年度静岡の原像をさぐる 発掘調査報告会』
 田村隆太郎 2009『まとめ』『綱掛山古墳群・片瀬遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

報告書

- 鳥田市教育委員会 1984『居倉遺跡発掘調査報告書』

第3節 弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化

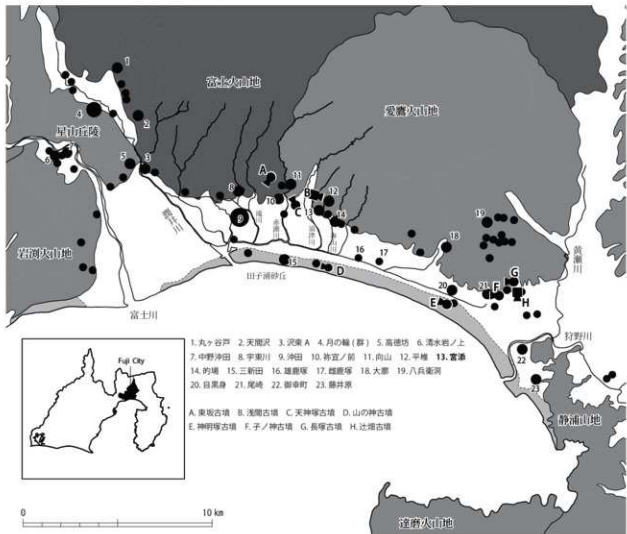
はじめに

本節では、宮添遺跡の歴史的な位置づけを行うために、周辺の遺跡などの状況を踏まえ、多少大雑把ではあるが、社会構造の変化を捉え総括としたい。

弥生時代の周辺遺跡

再三、述べてきたように宮添遺跡が集落として形成されるのは、弥生時代後期前半のことである。これは宮添遺跡に限ったことではなく、同一丘陵上の平権遺跡や、同じく浮島ヶ原低地を望む丘陵先端に立地する、コーカン畑遺跡、的場遺跡なども同様の時期に一斉に集落が営まれるようになる。これは愛鷹山南麓に立地する富士市域の遺跡に限ったことではなく、東駿河全体で認められる傾向であり（小泉 2009）、さらに後期前半の集落は低位置に立地するという傾向を示す（小泉 2009・2010）。平権遺跡では、西

遠江や東遠江、南関東に系譜が考えられる弥生時代後期初期の土器が認められる（静埋研 2010）。神田遺跡や柏原遺跡、沼津市離島塚遺跡など、浮島ヶ原低地周辺に立地するいくつかの遺跡に弥生時代中期に遡る遺構や遺物の存在は認められるものの、面的に認められるようになるのは後期のことであり、弥生時代後期の開始はこの地域における大きな画期であったと考えられる。こういった、面的な人々の広がりがいかなる事情に起因するものなのか、はっきりとはしないが、東日本全体での人・モノの活発な動きの中で理解しなければならない。おそらくは、次の古墳時代の開始という大変革に向けて、集落、土器、墓制、生産、流通などさまざまな側面が大きく変わり始める、そんな時期であったのだろう。

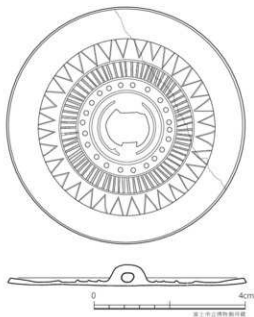


第137図 宮添遺跡を取り巻く遺跡・古墳の分布 (S=1/20,000)

古墳時代の周辺遺跡

古墳時代に入ると浮島ヶ原低地周辺ではさらに集落が増加する。浮島ヶ原低地とそれを望む丘陵先端との間には、旧鎌倉往還として知られる「根方街道」が存在するが、古墳時代より「路」が存在したかのように、西から宇東川遺跡、弥宜ノ前遺跡、宮添遺跡が約2キロ間隔に立地する。また、浮島ヶ原低地の微高地上には、弥生時代から継続すると考えられる沖田遺跡、さらに海側の田子浦砂丘上には三新田遺跡が立地する。これらの遺跡は有機的に結びつくことにより地域社会を形成していたものと考えられ（佐藤 2009・2010）、宮添遺跡D地区で確認される銅鏃や銅剣の存在や他地域との交流を示す土器の存在など地域間交流の存在を想定させる。沖田遺跡第133次調査地点では、古墳時代前期後半に木棺に転用されたと考えられる準構造船が発見されている（富士市教委 2008）ことから海上ルートでの交流の存在を裏付けることができる。

その後、順調に発展するかと考えられたが、前期後半から各遺跡とも集落規模を縮小し、中期直前には、丘陵上での生活の痕跡はほとんど確認されなくなる。宮添遺跡でもK地区S D O 2の痕跡を最後に、断絶ともとれる現象がみられる。これは、東駿河に限定した現象ではなく、かつて、集落の消長を検討した千葉県君津地方でも認められ（佐藤 2008）、全国的な現象として捉える事ができる。その原因を人の移動と捉えることもできるが、ここでは、低地部開発に向けた積極的な移動の可能性を指摘しておきたい。前述のとおり、浮島ヶ原低地に立地する沖田遺跡では、地表



第138図 沖田遺跡第133次調査地点出土 珠紋鏡（原寸）

下4mの砂層中より前期後半～末と考えられる木棺（準構造船を転用）・珠紋鏡・勾玉と一緒に出土しており、地下深くに集落や墓域が展開していたことを伺わせる。周辺の集落からすべての人がこの低地部の開発に向かったかどうかは推論を重ねるだけになってしまうが、宮添遺跡における集落の断絶は、周辺と協調した動きとして捉える事ができ、地域社会の大きな変化であつたに違いない。

古墳の築造と集落の動態

宮添遺跡の北西400mには、国指定史跡の浅間古墳〔前方後方墳・残存部90m〕（静岡大学 1998）が立地し、また、弥宜ノ前遺跡の北西800mには、東坂古墳〔前方後方墳・約60m〕（吉原市教委 1958）が立地する。東坂古墳はその副葬品から古墳時代前期後半から末の築造が想定され、立地や規模から、浅間古墳より一代後の首長墓として考えられている。浮島ヶ原低地を挟んで東側では、古墳時代開始期における古墳としては東日本最大規模を誇る辻畑古墳〔前方後方墳・59.5m〕（高尾・山本・渡井 2010）や、神明塚古墳〔前方後方墳・約53m〕（沼津市教委 2005）が存在する。

これまで、筆者自身も宮添遺跡と浅間古墳の立地的関係から両者を無意識のうちに直接的・単独的に結びつけていたように思う。しかし、これまでの宮添遺跡の報告でも明らかのように、墳丘100mクラスの前方後方墳に埋葬さ



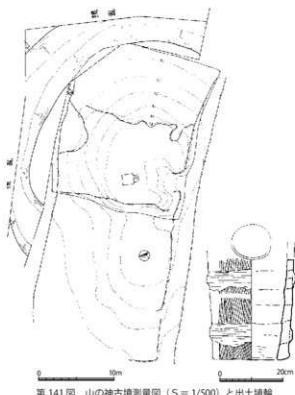
第139図 浅間古墳測量図（S=1/1,000）



れるだけの首長層居館は見つかっていない。今後、見つかる可能性は否定しないが、一つの集落だけを単独的に理解しては、必ずしも大古墳を取り巻く社会背景の理解へは繋がってこないように思われる。宮添遺跡周辺の集落の一つ一つは、さほど大規模とは言えないまでも、それらが有機的に結びつくことによって地域社会を構成していたのであれば、政治的モニュメントとしての側面をもつ古墳造営は、この地域社会の繋がりの具現化として理解することも出来る。浅間古墳や東坂古墳築造の背景には、中央勢力との関係だけでなく、そういった地域社会の成熟の延長からも理解すべき側面がある。

さて、愛鷹山麓の丘陵末端（標高20m付近）、浅間古墳と東坂古墳のほぼ中間には天神塚古墳が立地している。平成12年に行われた範囲確認調査では、墳丘盛土上面や周溝覆土最下層から、大淵スコリアのみで構成される層が確認されていることからその築造はTK47からMT15型式併行期と想定され（志村2001）、宮添遺跡でも再度集落が安定的に認められる時期に相当する。天神塚古墳の造営は、前述の低地部開発の一応の達成と無関係ではないと考えているが、現段階ではその根拠に乏しい。

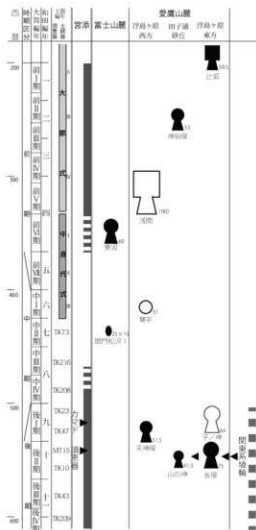
また、田子浦砂丘上に立地する山の神古墳〔前方後円墳41.5m〕（富士市教委1988）には、関東系埴輪が樹立さ



れ（鈴木2002）、また、MT15型式併行期の沼津市長塚古墳〔前方後円墳 約75m〕（沼津市教委1999）では、「木芯中空成形」技法を採用した埴輪が出土していることから埴玉「生出塚」系工人集団の関与も指摘されている（船村2003）。

古墳時代後期前半において、前方後円墳が競うように築造されるという現象は、この地域においては大きな変化であった（滝沢2005）。その背景には、列島全体におけるヤマト王権の対外的関係を含めた影響を考えなければならず、政治的影響を見ずにはいられない。しかし、逆に在地側の視点、言い換えれば、影響を受ける側の視点でみた前方後円墳築造の背景を考えてみたい。

古墳時代後期初頭、富士山南麓の寄生火山である高鉢山から噴火があったことが「大淵スコリア」という火山噴出物から推察され（高地1988）、その時期については、前節でTK23・TK47型式併行期と捉えた。この噴火が生活環境にどれほどの影響を与えたのかは明らかでないが、その噴火と浮島ヶ原周辺において前方後円墳が築造されることを関連付けて考えてみるという視点を提示してみたい。この噴火の前後に築造されたと考えられる天神塚古墳築造の意義を「地域社会の繋がりの具現化」と理解したが、火山の噴火はそれを打ち砕く自然災害であった可能性



第142図 富士山麓・愛鷹山麓における主要古墳の変遷

もある。加えて、「大淵スコリア」の降下後、富士山河口断層帯の活動により浮島ヶ原低地の水位が上昇したという意見もある(下川・山崎・田中1999)。

ここで、参考になる事例は、静岡県天竜川西岸に位置する恒式遺跡群形成の背景のひとつを、「自然災害の克服」と捉え、問題克服の主体に新興勢力の存在を想定した鈴木一有氏の分析である(鈴木2011)。対象とする時期や地域は異なるが、東駿河、浮島ヶ原低地周辺における古墳造営の背景にも、火山噴火という自然災害や浮島ヶ原低地の水位上昇など、その解決のためにあらたな力・知識を柔軟に受け入れざるをえなかったと考えることもできる。そこそがヤマト王権の介入であり、結果として田子浦砂丘上における前方後円墳の築造につながるのではないかと。そして、宮添遺跡におけるカマドの導入や須恵器の流入などの生活スタイルの変化という流通的側面もその一端として説明できるのであろう。

ただ、注意しなければならないのは、山の神古墳や長塚古墳にみる関東系埴輪の樹立である。そこにこそ在地社会の選択性が働いていたのか、北武蔵に出現した新興勢力の力が働いていたのか、広域の視点も必要になってくるが、现阶段でそれについて述べることは筆者の力量を超えており今後の課題としたい。

おわりに

以上、雑駁ではあるが、弥生時代・古墳時代を中心に宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化について述べてきた。一つの時代においても変化の理由や方向は一様ではなく、複数の要因が重なり合っており、今回の述べたことはその可能性の一つでしかない。大切なことは、時代の先進地での理解やモデルをそのまま、自らの地方に当てはめるのではなく、『在地社会の自律性』(佐々木2007)を前提に他地域の動きを見据える、そのうえで受動的な歴史叙述に偏りすぎないことであると思う。今後、さらなる検討を重ね、重層的な地域社会の構造を紐解く必要がある。

(佐藤祐樹)

参考文献

- 稲村繁 2003『沼津長塚古墳探集の人物埴輪』『埴輪研究会誌』第7号
 小泉祐紀 2009『静岡県における弥生時代後期の社会変化』『弥生時代後期の社会変化』
 小泉祐紀 2010『静岡県における弥生時代後期社会の成立』『静岡県考古学研究会』41・42
 佐々木謙一 2007『国家形成期における関東一まとめにかえて』『関東の後期古墳群』六一書房
 佐藤祐樹 2008『集落の消長から見た磐田地方』『地域と文化の考古学』II
 佐藤祐樹 2009『古墳時代について』『弥生・前遺跡』
 佐藤祐樹 2010『集落の動態からみた古墳出現前後の富士山麓』『静岡県考古学研究会』41・42
 志村博 2001『富士市天神塚古墳確認調査報告』『静岡県の前方後円墳』—個別報告編— 静岡県教育委員会
 鈴木一有 2011『天竜川右岸域における古墳時代集落の動態』『古墳時代集落研究の再検討』(第16回考古学研究会 東海例会資料)
 鈴木敏樹 2002『埴輪』『静岡県の前方後円墳』—総括編— 静岡県教育委員会
 高尾好之・山本恵一・渡井英吾 2010『静岡県沼津市見尾の辻古墳』『邪馬台国時代の東海と近畿』(ふたかみ邪馬台国シンポジウム10資料集)
 高地直道 1988『新富士大山の活動史』『地質学雑誌』94
 滝沢誠 2005『神明塚古墳と周辺の大型古墳』『神明塚古墳(第2次)発掘調査報告書』
 報告書
 財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『富士山・愛鷹山麓の遺跡』
 静岡県大学文学部考古学研究室 1998『静岡県富士市 国指定史跡・浅間古墳調査報告』『静岡県の重要遺跡』
 沼津市教育委員会 1999『長塚古墳・清水遺跡発掘調査報告書』
 沼津市教育委員会 2005『神明塚古墳(第2次)発掘調査報告書』
 富士市教育委員会 1988『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』
 富士市教育委員会 2008『平成17・18年度 富士市内埋蔵文化財調査報告書』
 吉原市教育委員会 1958『吉原市の古墳』

第4節 古代富士郡域における宮添遺跡の役割

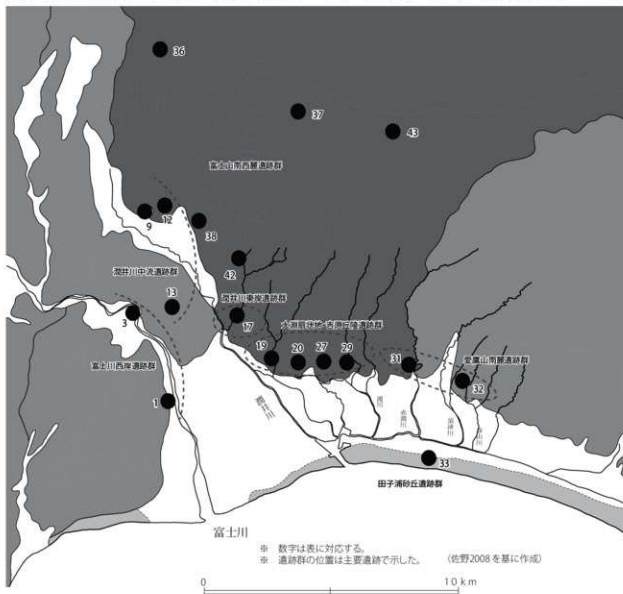
古代富士郡の二つの面期

第143図は古代富士郡の遺跡について、立地環境と分布から遺跡群として抽出したものである。第4表は各遺跡の時期的変遷を表にあらわしたもので、富士市と富士宮市内に43箇所の遺跡が確認されている。(佐野2008)。

今回報告する宮添遺跡は、弥生ノ前遺跡とともに愛鷹山南麓遺跡群に属している。ここは古代富士郡のなかで最も東寄りの、駿河郡に接した地域である。

古代富士郡は大淵扇状地・吉原丘陵遺跡群に主要施設が置かれていた。明確な富士郡衙の遺構は未発見であるが、郡名「布白」墨書土器や、8世紀初頭～前葉と推定される

軒丸瓦を出土する三日月廃寺(富士市教委2001)もこの遺跡群に所在している。この遺跡群の繁栄する時期が7～9世紀代である。その後、10～11世紀には富士川西岸、愛鷹山南麓に遺跡が分散する。この地域は、古代富士郡域の東端と西端の交通の要衝に位置している。後者は古来より「根方街道」と呼ばれ、前者は富士川に面した河岸段丘上に位置する。この遺跡分布からも、律令制度による地域支配体制が崩壊し、地域の状況に応じた遺跡の成立と発展がみてとれる。前代に栄えた大淵扇状地・吉原丘陵遺跡群においては、西端に中桁・中ノ坪遺跡が営まれるのみである。



第143図 古代富士郡と周辺遺跡分布

古代史上、10世紀は大きな画期といわれている。律令国家による国郡単位での地域支配が求心力をもって機能した時期が8～9世紀であり、後半の10～11世紀は、律令支配を脱して各地域で広域交易圏が成立し展開してゆく。この第4表からも大きな画期が読み取れる。

宮添遺跡の位置づけ

①宮添遺跡の年代

宮添遺跡は、弥生時代末から古代の集落遺跡である。遺跡の変遷には大きな三つのピークがある。弥生時代末から古墳時代前期（4～5世紀）、古墳時代後期（6世紀）、奈良時代後半～平安時代（8世紀後半～11世紀）である。

今回報告した宮添遺跡E地区においては、7世紀から8世紀前半期に該当する土器類はごくわずかの出土である。

8世紀前半の土器群は、東平遺跡に集中して認められ、他遺跡からの出土は、ごく少ない傾向が指摘されている。これは駿河国の政策として、東平遺跡集落への地域住民の集住が貫徹された結果という見解を過去に示したことがある（佐野2008）。8世紀後半期から在来系譜の駿東型土器が多く認められ、灰釉陶器や清輝銅、甲斐・信濃系譜の土器が流通し、宮添遺跡の集落が再び復活したと考えられる。

②外来系譜土器の意義

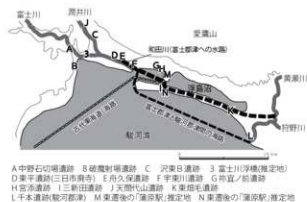
10～11世紀の古代後半期の最大の特徴は、外来系譜の土器群である（佐野2010）。外来系譜土器の分布の意義は、中央集権国家による地域支配の破綻と、郡衙機能停止後の、地域の政治・文化・物流交易の再編の実態を反映するものと理解されることである。

本遺跡出土の外来系譜の土器は以下のように整理される。

図	遺跡名	古墳前期	古墳中期	古墳後期	7C	8C	9C	10C	11C	12C	
富士川西岸	1 破魔射場					****					
	2 破魔射場					****					
	3 浅間林					****					
	4 浅間林					****					
	5 中野					****					
	6 中野沖田					****					
	7 中野石切場					****					
	8 (馬込地区)					****					
湖井川中流	9 泉										
	10 浅間大社										
	11 浅間大社II								*****		
	12 元富士大宮司								*****		
	13 初田								*****		
湖井川東岸	14 沢東A地区2次					***	**				
	15 沢東A地区3次					***	**				
	16 沢東A地区4次					***	**				
	17 沢東B					***	**				
	18 中折					***	**				
大湖扇状地・吉原丘陵	19 中折・中ノ坪					***	**				
	20 東平第2・3地区					***	**				
	21 東平第9地区					***	**				
	22 東平第28地区					***	**				
	23 西平1号墳					***	**				
	24 東平第16・27地区					***	**				
	25 東平第37地区					***	**				
	26 滝下					***	**				
	27 舟久保6丁目					***	**				
	28 舟久保第33地区地					***	**				
愛鷹山南麓	29 宇栗川A B C区					***	**				
	30 宇栗川L区					***	**				
	31 神宮ノ前					***	**				
	32 宮添					***	**				
	33 三新田					***	**				
	田子浦砂丘	34 (大野新田)					***	**			
		35 三新田D区					***	**			
		36 辻					***	**			
	富士山南西麓	37 村山浅間					***	**			
		38 木ノ行寺					***	**			
39 石倉						***	**				
40 上石敷						***	**				
41 梅垣						***	**				
42 天間代山						***	**				
43 若倉B						***	**				

佐野2008改定

第4表 古代富士郡と周辺遺跡の消長



第144図 古代後半(8～9世紀)の遺跡と交通路



第145図 古代後半(10～12世紀)の遺跡と交通路

信濃産——軟質須恵器 20・21 (SB3)、461 (包含層)

ロクロ成形小型甕 98 (SB6)

甲斐産——坏 46 (SB10)、甕 206～209 (SB7)、鉢、
65 (SB11)、羽釜 223 (SB19)

三河産——清郷銅 265 (SB25)

これらの土器類のうち、甲斐・信濃系諸譜と在来系諸土器のセット関係がもっとも良好に把握されるのが、富士市北松野(旧富士川町)浅間林遺跡である。

これらの分布範囲は、信濃系諸譜が主として東山道に、甲斐系諸譜の土器は、甲斐・信濃及び駿河国以東の東国に、清郷銅は尾張～関東に至る東海道諸国に分布している(村上2003)。静岡県東部の駿河と伊豆国には、富士川と東海道の枝道である甲斐路を媒介として交易物流のルートが確立されていたと考えられる。古代富士郡は勿論、駿河郡や伊豆国での在来系諸譜及び外来系諸譜土器の検討から、古代後半期の交易物流の実態への追及が必要とされる。

453の柱状高台は、東海から関東地域に普遍的に分布し、その中心地域は判然としな。

③古代交通路との関連(延喜通宝の意義)

古代富士郡の交通路に関しては、蒲原駅東遷(貞観6年・864)や、富士川浮橋設置(醍醐三代格・承和2年(835)6

月29日条)の検討課題として、様々な研究が行なわれてきた(佐野2004)。宮添遺跡の役割について、古代交通路のあり方から検討を加えてみたい。

古代東海道のルートについては、当初の蒲原駅と、864年(三代実録、貞観6年12月10日条)の柏原駅廃止に伴う蒲原駅東遷後の比定地をめぐり様々な検討がされている。

筆者は、富士川下流域から沼津市西部に至る古代東海道ルートについて、835年富士川浮橋設置(醍醐三代格・承和2年6月29日条)が海路から陸路への転換期であると考えた。それは律令国家による大きな交通路再編政策であり、その29年後に柏原駅廃止・蒲原駅東遷が実施されている。筆者は、当初の蒲原駅を駿河国富士郡の東平遺跡に、東遷後は二つの候補を示した。一つは、三新田遺跡周辺と考えた。これは水駅の柏原駅を陸路対応の駅に変更し蒲原駅としたもの。一方で、愛鷹山南麓のルートとして根方街道に位置する須津地区を考えた。富士市史において、中野國男は船津に比定している(中野1969)。

第4表と第143図からみて、古代富士郡と駿河郡西部における古代後半期10～12世紀の交通路は陸路優位と考えたい。具体的には、田子浦砂丘から沼津市千本海岸に至る海沿いのルートは古代前半期(第144図)に機能し、後半期には愛鷹山南麓ルートの通称根方街道が主要ルート(第145図)に転換したということである。このことは、古代前半期で終息する沼津市東畑毛遺跡の消長をみても明らかである。この遺跡は、黒世14号窯式期の灰桶陶器を多量出土し、古代交通路に接した主要遺跡として注目されていた。

「延喜通宝」の出土する静岡県内の遺跡は、島田市居倉遺跡3点と、本道跡1点で二遺跡4例目となる。これは延喜7年(907)に鑄造されたもので、本稿において検討対象とするⅢ期の古代後半期に該当している。

古代銭貨の出土は地域の主要遺跡とか官衙関連施設といわれてきた。古代後半期においては、むしろ交通路沿いの遺跡からの出土が目ざされている。岩名健太郎氏によると、古代銭貨が官衙関連遺跡で集中して出土する傾向はみられないという。これらの背景としては「蓄銭叙位令」による銭貨の回収が行なわれた結果とこの見方もあるという。しかし、東日本においてはこの限りではない。

宮添遺跡は、古代後半期の10～12世紀、富士川地区の破魔射場遺跡、大淵・吉原丘陵遺跡群の中折・中ノ坪遺跡とともに地域の物流交易を担った拠点であった。古代道

の海路から陸路への再編により、これらの三つの遺跡が交易物流を担う拠点として成立したと思われる。

破魔射場・浅間林遺跡は、東海地域及び富士川をルートとする信濃・甲斐との物流・交易拠点として、中桁遺跡は富士郡の中核に位置し、現在の富士宮市も含む富士郡域の物流を担う拠点として、さらに宮添遺跡は、広大な浮島沼を挟み柏原・元吉原地区を含む富士郡東部と駿河郡西部を対象とする物流の拠点として機能していた集落と推定される。これらは、王朝国家期にあって政治的な背景から成立したのではなく、地域の交通体系及び立地条件から選択された結果成立した集落であろう。しかし、遺構は竪穴住居が主体であり、物品管理等を司る倉庫群等と推定されるものは皆無である。今後の調査に期待するとともに、発見されている遺構の再評価にも取り組む必要がある。

(佐野五十三)

参考文献

- 佐野五十三 2004 「富士川下流域における古代交通路の素描」『設立20周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
 佐野五十三 2008 「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』40 静岡県考古学会
 佐野五十三 2010 「富士川下流域から出土する古代土器系譜について」『静岡県考古学研究』41・42 合併号 静岡県考古学会
 中野国男 1969 「第二章 三節 駅制と交通路」『富士市史・上巻』富士市
 村上吉正 2003 「豊からみた遠隔地間交流—古代東国における外来系土器器種の検討」『神奈川考古』第39号神奈川考古同人会

報告書

- 富士市教育委員会 1983 「三新田遺跡発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 1996 「舟久保遺跡—第20・21・33・34地区発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 2001 「東平遺跡—第28地区発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 2003 「東平遺跡発掘調査報告書—第4・23・24・30・31・32地区」
 富士市教育委員会 2004 「中桁遺跡—王子板紙株式会社富士工場製品倉庫新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 2008 「弥立ノ前遺跡—市立吉原商業高等学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 2008 「宮添遺跡—個人農地改良工事に伴う宮添遺跡K地区埋蔵文化財発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 2009 「東平遺跡—舞祭場建設工事に伴う東平遺跡第37地区4次調査埋蔵文化財発掘調査報告書」
 富士市教育委員会 2009 「宮添遺跡—個人農地改良工事に伴う宮添遺跡D地区埋蔵文化財発掘調査報告書」

出土遺物観察表

- ・残存率のうち () をつけたものは、全体の形が不明なため、図示した範囲における残存の割合を示したことを表している。
 - ・数値のうち () を付けたものはその部位が完存せず欠損していることを表し、—は計測不能であることを表している。
 - ・土器を除く観察表の計測箇所は、個々に示した方式に拠っている。
-
-

遺物 番号	神宮 図版	遺構 番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
1	9	11	SB01	土師器	甕 (15%)	19.0	(14.0)	-	にぶい橙	明赤褐	駿東甕
2	9	11	SB01	土師器	甕 (75%)	-	(8.0)	9.5	橙	明赤褐	駿東甕
3	9	11	SB01	土師器	甕 (30%)	17.8	(5.4)	-	橙	褐	駿東甕
4	9	11	SB01	土師器	甕 (15%)	18.6	(4.7)	-	にぶい褐	にぶい褐	駿東甕
5	9	11	SB01	土師器	甕 (50%)	-	(14.0)	8.6	赤褐	赤褐	底部に木葉痕
6	9	11	SB01	土師器	坏	-	-	-	赤	赤	
7	12	11	SB02	土師器	甕 (70%)	23.5	(17.0)	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	駿東甕
8	12	11	SB02	土師器	甕 (50%)	9.1	(21.4)	-	赤褐	にぶい赤褐	駿東甕
9	12	11	SB02	土師器	甕 (30%)	16.0	(12.2)	-	明赤褐	赤褐	
10	12	11	SB02	須恵器	坏蓋	-	-	-	黄灰	黄灰	
11	12	11	SB02	須恵器	坏蓋 (10%)	13.8	(2.5)	-	灰白	灰白	
12	15	11	SB03	土師器	甕 (50%)	22.4	(26.0)	-	明赤褐	明赤褐	
13	15	11	SB03	土師器	甕 (25%)	26.4	(10.0)	-	赤褐	赤褐	
14	15	11	SB03	土師器	甕 (80%)	-	(25.5)	-	赤褐	赤褐	
15	15	12	SB03	土師器	甕 (30%)	-	(31.0)	7.4	明赤褐	赤褐	
16	15	11	SB03	土師器	甕 (15%)	-	(4.0)	6.4	明赤褐	にぶい赤褐	
17	15	11	SB03	土師器	甕 (50%)	-	(9.2)	6.6	にぶい赤褐	黒褐	
18	15	11	SB03	土師器	甕 (80%)	-	(8.8)	6.7	褐	にぶい褐	
19	15	12	SB03	土師器	甕 75%	15.4	11.4	7.2	にぶい赤褐	にぶい赤褐	底部に木葉痕
20	15	11	SB03	須恵器	坏 20%	11.4	3.5	4.8	灰白	軟質須恵器	
21	15	11	SB03	須恵器	坏 25%	12.0	3.5	6.0	灰白	灰白	軟質須恵器
22	15	12	SB03	須恵器	坏 (25%)	15.4	(4.5)	-	灰	灰	
23	15	12	SB03	灰釉陶器	碗 (30%)	-	(1.7)	7.6	灰白	灰白	
24	15	12	SB03	土師器	碗 (40%)	-	(3.8)	7.8	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
25	15	12	SB03	土師器	坏 (15%)	-	(4.5)	-	赤褐	赤褐	駿東坏
26	15	12	SB03	土師器	坏 (25%)	12.0	(3.5)	-	赤	赤	駿東坏
27	15	12	SB03	土師器	坏 (15%)	11.8	(3.0)	-	赤褐	赤褐	駿東坏
28	15	12	SB03	土師器	坏蓋 (10%)	15.4	(1.2)	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
29	15	12	SB03	土師器	坏	-	-	-	赤	赤	底面に墨書あり
30	15	12	SB03	土師器	坏 (20%)	-	(0.8)	-	赤褐	赤褐	駿東坏
31	15	12	SB03	土師器	高台坏	-	-	-	暗赤褐	暗赤褐	
32	15	12	SB03	土師器	坏 (50%)	-	(1.8)	6.0	赤褐	赤褐	駿東坏
33	19	12	SB12	土師器	甕 (10%)	22.2	(10.0)	-	赤褐	明赤褐	
34	19	12	SB12	土師器	甕 (25%)	-	(10.8)	7.5	赤褐	赤褐	
35	19	12	SB12	土師器	甕 (50%)	12.6	(5.0)	-	赤褐	にぶい赤褐	
36	19	12	SB12	土師器	鉢 (30%)	14.2	(5.0)	-	赤褐	赤褐	
37	19	12	SB12	土師器	坏 50%	12.2	4.7	6.5	暗赤褐	赤	駿東坏、見込みに放射状暗文
38	19	12	SB12	土師器	盤 (15%)	-	(1.8)	10.0	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
39	22	13	SB10	土師器	甕 (30%)	22.0	(8.9)	-	明赤褐	明赤褐	
40	22	13	SB10	土師器	甕 (30%)	-	(4.4)	8.2	赤褐	赤褐	駿東甕、底部に木葉痕
41	22	12	SB10	土師器	甕 (50%)	-	(6.3)	6.4	赤褐	赤褐	木葉痕
42	22	13	SB10	土師器	高坏 (95%)	-	(6.5)	-	明赤褐	明赤褐	
43	22	13	SB10	土師器	坏 15%	11.6	3.7	6.4	赤褐	暗褐	駿東坏
44	22	13	SB10	土師器	坏 25%	12.0	4.2	6.4	赤褐	赤褐	駿東坏
45	22	13	SB10	土師器	碗 (15%)	-	(3.1)	7.2	暗赤褐	暗赤褐	体部に刻書「中」
46	22	13	SB10	土師器	坏 (15%)	-	(1.5)	4.2	にぶい褐	にぶい褐	甲斐型
47	22	13	SB10	土師器	坏	-	-	-	暗赤褐	赤褐	駿東坏、体部に墨書あり
48	22	13	SB10	土師器	坏	-	-	-	明赤褐	赤褐	駿東坏、体部に墨書あり
49	22	13	SB10	土師器	坏	-	-	-	赤褐	赤褐	体部に墨書あり
50	22	13	SB10	土師器	坏	-	-	-	赤褐	赤褐	駿東坏、体部に墨書あり
51	22	13	SB10	土師器	坏	-	-	-	赤褐	赤褐	駿東坏、体部に墨書あり
52	22	13	SB10	須恵器	坏 (15%)	11.0	(3.3)	-	青灰	青灰	
53	22	13	SB10	須恵器	坏 15%	13.4	5.2	6.0	灰	灰	
54	22	13	SB10	須恵器	坏 (15%)	12.4	(3.0)	-	灰	灰	
55	22	13	SB10	灰釉陶器	碗 30%	13.6	4.6	7.0	灰白	灰白	無釉
56	22	13	SB10	須恵器	長頸甕 (25%)	-	(8.2)	-	灰白	灰白	オリブ
58	25	14	SB04	土師器	坏 25%	12.6	4.5	-	にぶい褐	褐	
59	25	14	SB04	土師器	坏 (30%)	13.0	(4.1)	-	にぶい褐	にぶい橙	
60	25	14	SB04	須恵器	高台坏 35%	13.8	4.1	8.6	黄灰	黄灰	
61	25	14	SB04	土師器	小型甕	-	-	-	赤褐	赤褐	
63	28	14	SB11	土師器	甕 15%	28.0	(13.4)	-	赤褐	にぶい赤褐	
64	28	14	SB11	土師器	鍋	-	-	-	明赤褐	赤褐	駿東型鍋
65	28	14	SB11	土師器	鉢 15%	20.2	8.0	7.8	にぶい赤褐	にぶい赤褐	甲斐型
66	28	14	SB11	土師器	坏 (15%)	11.6	(3.4)	-	赤褐	暗赤褐	
67	28	14	SB11	灰釉陶器	碗 (25%)	-	(1.4)	5.6	灰黄	灰黄	
69	32	14	SB05	土師器	甕 100%	19.2	31.4	9.5	明赤褐	赤褐	木葉痕
70	32	14	SB05	土師器	甕 100%	19.4	31.6	9.6	赤褐	橙	駿東甕、木葉痕

遺物 番号	神田 図版	遺構 番号	種別	相別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考	
71	32	15	S805	土師器	甔	75%	25.8	26.0	8.0	橙	橙	
72	32	14	S805	土師器	小型甔	70%	13.8	15.7	6.2	明赤褐	明赤褐	
73	32	14	S805	土師器	甔	100	10.8	11.9	6.0	橙	橙	底部に線刻「×」
74	32	15	S805	土師器	小型甔	(15%)	11.8	(5.1)	-	暗赤	暗赤	
75	32	15	S805	土師器	坏	(95%)	-	(1.6)	-	にぶい赤褐	赤褐	駿東環、墨書「マ」か
76	32	15	S805	土師器	坏	15%	11.0	4.1	5.6	橙	橙	駿東環
77	32	15	S805	土師器	皿	25%	12.4	2.4	6.4	にぶい赤褐	明赤褐	
78	32	15	S805	土師器	高台杯	35%	17.6	5.6	9.4	明赤褐	明赤褐	削出高台
79	32	15	S805	土師器	坏	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	墨書あり
80	32	15	S805	須恵器	坏	-	-	-	-	青灰	青灰	
81	32	15	S805	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	
82	32	15	S805	須恵器	坏	(15%)	11.8	(3.7)	-	灰白	灰白	
83	32	15	S805	須恵器	IV9	-	-	-	-	灰	暗灰	底部に波状文
85	32	15	S805	土師器	S字甔	-	-	-	-	橙	橙	
86	36	15	S806	土師器	甔	(20%)	24.0	(7.0)	-	橙	橙	
87	36	16	S806	土師器	甔	(15%)	25.4	(7.0)	-	橙	明赤褐	
88	36	15	S806	土師器	甔	(35%)	31.3	(22.0)	-	橙	橙	
89	36	15	S806	土師器	甔	(40%)	27.9	(22.3)	-	明赤褐	明赤褐	
90	36	15	S806	土師器	甔	(35%)	24.4	(24.0)	-	明赤褐	赤褐	
91	36	16	S806	土師器	甔	(15%)	27.6	(10.2)	-	橙	橙	
92	36	16	S806	土師器	甔	-	-	-	-	赤褐	明赤褐	
93	36	16	S806	土師器	小型甔	-	-	-	-	明褐	にぶい橙	
94	36	16	S806	土師器	甔	(95%)	-	(4.3)	7.0	明赤褐	明赤褐	
95	36	16	S806	土師器	甔	(40%)	-	(8.0)	6.0	にぶい橙	赤褐	木葉痕
96	36	16	S806	土師器	甔	(30%)	-	(13.3)	7.4	にぶい黄橙	橙	
97	36	16	S806	土師器	小型甔	(15%)	11.2	(3.5)	-	明赤褐	橙	
98	36	16	S806	土師器	小型甔	(15%)	11.8	(4.2)	-	赤褐	赤褐	
99	36	16	S806	土師器	小型甔	(20%)	15.0	(4.9)	-	にぶい褐	灰褐	
100	36	16	S806	土師器	小型甔	(25%)	15.0	(4.5)	-	明赤褐	にぶい赤褐	
101	36	16	S806	土師器	小型甔	(35%)	14.2	(4.9)	-	にぶい褐	にぶい褐	
102	36	16	S806	土師器	坏	(35%)	-	(2.4)	6.2	明赤褐	にぶい橙	駿東環
103	36	16	S806	土師器	坏	20%	10.6	4.0	6.4	明赤褐	橙	駿東環
104	36	16	S806	土師器	坏	35%	11.0	4.1	5.0	灰褐	灰褐	駿東環
105	36	16	S806	土師器	坏	95%	12.4	4.0	6.4	褐	褐	駿東環
106	36	16	S806	土師器	坏	25%	11.6	3.8	8.0	暗赤褐	暗赤褐	駿東環
107	36	16	S806	土師器	坏	20%	11.8	3.7	5.6	赤褐	明赤褐	駿東環、体部に刻書「中」
108	36	17	S806	土師器	坏	15%	12.1	3.6	7.0	明赤褐	橙	駿東環
109	36	17	S806	土師器	坏	15%	12.0	3.4	7.0	赤褐	明赤褐	駿東環
110	36	17	S806	土師器	坏	15%	13.0	3.0	6.8	赤褐	明赤褐	駿東環
111	36	17	S806	土師器	坏	-	-	-	-	にぶい赤褐	赤褐	駿東環、体部に墨書あり
112	37	17	S806	土師器	坏	(20%)	11.2	(4.1)	-	黒褐	にぶい褐	内裏
113	37	17	S806	土師器	坏	(35%)	11.2	(3.2)	-	明赤褐	赤褐	駿東環
114	37	17	S806	土師器	皿	35%	12.4	2.8	5.8	にぶい褐	にぶい褐	
115	37	17	S806	土師器	皿	(35%)	12.4	2.6	6.0	橙	にぶい赤褐	
116	37	17	S806	土師器	坏蓋	(25%)	17.0	(2.8)	-	赤褐	赤褐	
117	37	17	S806	土師器	坏	(15%)	-	(2.3)	7.0	赤褐	明赤褐	手持ち削出高台
118	37	17	S806	須恵器	坏	(35%)	-	(1.9)	5.8	灰白	灰白	
119	37	17	S806	土師器	碗	(50%)	-	(1.2)	5.9	にぶい褐	褐	
120	37	17	S806	灰胎陶器	甔	(15%)	12.0	(1.2)	-	灰オリーブ	暗褐	
122	39	17	S809	土師器	甔	(80%)	20.8	(17.4)	-	橙	橙	
123	39	17	S809	須恵器	坏	(20%)	11.8	(3.7)	-	灰	灰	
124	42	17	S807	土師器	坏	35%	12.4	5.1	-	橙	にぶい橙	
125	42	18	S807	土師器	高坏	(30%)	-	(5.8)	-	にぶい橙	にぶい橙	
127	48	18	S823	土師器	甔	(25%)	21.6	(8.0)	-	赤褐	赤褐	駿東環
128	48	18	S823	土師器	鍋	-	-	-	-	橙	橙	
129	48	18	S823	土師器	甔	-	-	-	-	赤褐	赤褐	駿東環
130	48	18	S823	土師器	高坏	(40%)	-	(7.7)	-	明赤褐	明赤褐	
131	48	18	S823	土師器	坏	(35%)	-	(3.9)	5.6	暗赤褐	赤褐	駿東環、体部に墨書あり
132	48	18	S823	土師器	坏	20%	11.0	3.9	6.0	赤褐	赤褐	駿東環
133	48	18	S823	土師器	坏	25%	15.6	4.3	7.8	橙	明赤褐	
134	48	18	S823	土師器	坏	-	-	-	-	赤	赤褐	駿東環、体部に墨書あり
135	48	18	S823	土師器	坏	(15%)	-	(1.1)	5.8	赤褐	赤褐	駿東環、底面に墨書あり
136	48	18	S823	須恵器	坏蓋	(35%)	-	(2.4)	灰白	褐灰		
137	48	18	S823	須恵器	坏蓋	(60%)	-	(2.4)	黄灰	黄灰		
138	48	18	S823	須恵器	坏蓋	-	-	-	-	灰白	灰白	
139	48	18	S823	須恵器	坏蓋	(15%)	-	(2.0)	12.2	灰白	灰白	
140	48	18	S823	須恵器	坏蓋	(15%)	14.0	(2.4)	-	黄灰	黄灰	

遺物番号	神図	図版	遺物番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
141	48	18	SB23	須恵器	坏蓋	80	16.0	4.8	-	灰	灰	
142	48	18	SB23	須恵器	坏蓋 (25%)	9.6	(3.4)	-	-	褐灰	褐灰	
143	48	18	SB23	須恵器	坏	(15%)	-	(1.9)	-	黄灰	黄灰	
144	48	18	SB23	須恵器	坏 (20%)	-	(3.2)	8.8	-	灰白	灰白	
145	48	18	SB23	須恵器	坏	35%	15.0	4.4	10.6	明け-7 灰	明け-7 灰	
147	48	18	SB23	土師器	S字襷	-	-	-	-	橙	橙	
148	48	18	SB23	土師器	S字襷	-	-	-	-	橙	明赤褐	
149	48	18	SB23	土師器	蓋	-	-	-	-	橙	橙	
150	50	19	SB16	土師器	甕 (30%)	21.0	(31.0)	-	-	明赤褐	橙	口縁部に棒状浮文・羽状縄文
151	50	19	SB16	土師器	甕 (30%)	-	(10.9)	6.8	-	明赤褐	褐	
152	50	19	SB16	土師器	甕 (30%)	-	(5.8)	8.4	-	明赤褐	にぶい赤褐	
153	50	19	SB16	土師器	甕 (30%)	-	(5.3)	6.6	-	赤褐	赤褐	
154	50	19	SB16	土師器	坏蓋	60%	17.6	4.3	4.7	橙	橙	
155	50	19	SB16	土師器	坏蓋	15%	16.8	3.5	5.6	赤褐	暗赤褐	轆車坏
156	50	19	SB16	土師器	坏	75%	11.0	4.4	7.2	にぶい橙	にぶい橙	轆車坏
157	50	19	SB16	土師器	坏	75%	11.6	4.4	5.4	明赤褐	明赤褐	轆車坏
158	50	19	SB16	土師器	坏	35%	11.8	4.5	6.2	赤褐	赤褐	轆車坏
159	50	19	SB16	土師器	坏	40%	11.4	3.9	7.1	赤褐	黒褐	轆車坏
160	50	19	SB16	土師器	坏	60%	11.6	3.8	7.6	赤褐	赤褐	轆車坏、体部に墨書あり
161	50	19	SB16	土師器	坏	40%	11.0	3.9	6.0	にぶい赤褐	にぶい赤褐	轆車坏
162	50	19	SB16	土師器	坏 (60%)	-	(2.1)	6.2	-	明赤褐	明赤褐	轆車坏、見込みに墨書「戌」か
163	50	19	SB16	土師器	高台坏 (25%)	10.4	(2.1)	-	-	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
164	50	19	SB16	土師器	高台坏 (25%)	-	(1.7)	5.4	-	赤褐	明赤褐	
165	50	19	SB16	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	体部に墨書あり
166	50	19	SB16	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	体部に墨書「中」
167	50	20	SB16	土師器	碗	-	-	-	-	赤褐	赤褐	体部に墨書「中」
168	50	20	SB16	須恵器	皿 (15%)	16.0	(1.0)	-	-	灰	灰	
171	52	20	SB13	土師器	S字襷	-	-	-	-	黒褐	黒褐	
172	52	20	SB13	土師器	小皿	20%	7.6	2.0	5.4	暗灰黄	暗灰黄	
173	54	20	SB46	須恵器	坏蓋	25%	16.0	3.3	-	灰	灰白	
174	54	20	SB46	須恵器	坏蓋 (25%)	14.8	(2.0)	-	-	黄灰	黄灰	
175	54	20	SB46	灰釉陶器	蓋 (25%)	11.0	(2.9)	-	-	灰	褐	
176	54	20	SB46	土師器	小型甕 (50%)	-	(1.8)	6.0	-	橙	橙	
177	56	20	SB44	土師器	皿?	-	-	-	-	橙	橙	
179	59	20	SB14	土師器	甕 (80%)	21.2	(22.0)	-	-	にぶい赤褐	褐	轆車甕
180	59	20	SB14	土師器	甕 (30%)	22.6	(11.9)	-	-	暗赤褐	暗赤褐	轆車甕
181	59	20	SB14	土師器	甕 (30%)	22.0	(9.2)	-	-	赤	暗赤	轆車甕
182	59	20	SB14	土師器	甕 (30%)	-	(7.3)	6.8	-	赤褐	にぶい赤褐	轆車甕
183	59	20	SB14	土師器	甕	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	
184	59	20	SB14	土師器	小型甕 (25%)	14.8	(6.6)	7.0	-	にぶい褐	赤褐	
185	59	20	SB14	土師器	坏	25%	11.4	4.3	7.0	暗赤褐	赤褐	轆車坏
186	59	20	SB14	土師器	坏	20%	11.0	3.5	6.6	明赤褐	明赤褐	轆車坏
187	59	21	SB14	土師器	坏 (25%)	-	(2.8)	5.6	-	明赤褐	明赤褐	轆車坏
188	59	21	SB14	土師器	坏 (15%)	-	(2.4)	7.2	-	明赤褐	明赤褐	轆車坏
189	59	21	SB14	土師器	坏 (25%)	-	(2.7)	5.8	-	明赤褐	明赤褐	轆車坏、底面に墨書あり
190	59	21	SB14	土師器	坏	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	轆車坏、体部に墨書あり
191	59	21	SB14	土師器	坏	-	-	-	-	赤	赤	轆車坏、体部に墨書あり
192	59	21	SB14	土師器	坏蓋 (15%)	15.6	(2.9)	-	-	明赤褐	明赤褐	
193	59	21	SB14	土師器	S字襷	-	-	-	-	橙	橙	
194	59	21	SB14	土師器	蓋	-	-	-	-	にぶい黄橙	橙	頸部上位に縄文
195	61	21	SB20	土師器	甕 (50%)	-	(10.1)	6.8	-	赤褐	赤褐	
196	61	21	SB20	土師器	甕 (60%)	-	(7.3)	6.4	-	赤褐	赤褐	
197	61	21	SB20	土師器	坏 (85%)	-	(1.9)	77.0	-	にぶい黄褐	にぶい黄褐	轆車坏
198	61	21	SB20	灰釉陶器	瓶 (35%)	4.2	(1.5)	-	-	灰白	灰	
200	63	21	SB15	土師器	小型甕	-	-	-	-	暗褐	暗褐	
201	63	21	SB15	土師器	甕 (50%)	-	(6.0)	6.6	-	赤褐	赤褐	木葺痕
202	63	21	SB15	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	轆車坏、体部に墨書あり
203	63	21	SB15	土師器	坏	20%	12.0	3.7	6.8	明赤褐	にぶい赤褐	轆車坏
204	63	21	SB15	土師器	坏	40%	11.8	4.2	6.4	明赤褐	にぶい赤褐	轆車坏
205	63	21	SB15	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	轆車坏、体部に墨書あり
206	66	22	SB17	土師器	甕 (35%)	30.9	(16.5)	-	-	褐	赤褐	甲斐型甕
207	66	22	SB17	土師器	甕 (30%)	-	(19.1)	10.4	-	にぶい黄橙	褐	甲斐型甕
208	66	22	SB17	土師器	甕	-	-	-	-	赤褐	赤褐	甲斐型甕
209	66	21	SB17	土師器	甕	-	-	-	-	赤褐	赤褐	甲斐型甕
210	66	22	SB17	土師器	坏 (25%)	-	(1.6)	5.0	-	にぶい褐	にぶい赤褐	轆車坏
211	66	22	SB17	灰釉陶器	皿 (35%)	14.4	(2.6)	-	-	灰白	灰白	
212	66	22	SB17	灰釉陶器	皿	50%	14.3	3.0	6.8	灰白	灰白	

遺物 番号	神田 図版	遺構 番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
213	66	22	S817	須恵器 高台杯	(45%)	-	(2.6)	10.0	灰白	灰白	
214	66	22	S817	須恵器 高台杯	(15%)	-	(1.5)	8.7	灰	灰	
216	69	22	S818	土師器 甕	90%	15.5	21.3	9.0	明赤褐	明赤褐	駿東遺
217	69	22	S818	土師器 杯	15%	16.4	5.0	5.0	橙	橙	木葉痕
218	69	22	S818	土師器 杯	35	16.8	4.6	-	橙	橙	
219	69	22	S818	須恵器 杯蓋	(10%)	15.0	(2.9)	-	灰	灰	
220	69	22	S818	須恵器 碗	(15%)	13.4	(3.6)	7.2	灰白	灰白	
222	72	22	S819	土師器 甕	-	-	-	-	橙	にぶい橙	
223	72	23	S819	土師器 羽釜	-	-	-	-	灰褐	にぶい赤褐	
224	72	23	S819	土師器 碗	(20%)	-	(2.2)	6.2	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
225	72	23	S819	土師器 高坯	(35%)	-	(2.5)	-	にぶい橙	明赤褐	
226	72	23	S819	灰釉陶器 碗	(15%)	13.7	(2.9)	-	橙	にぶい橙	
227	72	23	S819	灰釉陶器 碗	15%	12.8	4.0	6.7	灰白	灰白	
228	72	23	S819	灰釉陶器 皿	15%	13.6	3.7	6.4	灰行-ア	灰行-ア	
230	74	23	S821	灰釉陶器 小碗	15%	11.0	3.9	5.2	灰	灰	
231	74	23	S821	山茶碗 小皿	(50%)	-	(1.5)	5.8	灰白	灰白	
232	74	23	S821	山茶碗 小皿	50%	9.0	3.0	5.8	灰白	灰白	
233	74	23	S821	土師器 脚杯碗	(50%)	10.1	(4.1)	-	橙	にぶい橙	
234	74	23	S821	須恵器 杯	-	-	-	-	灰	灰	
235	74	23	S821	土師器 甕	-	-	-	-	明赤褐	暗褐	
236	74	23	S821	土師器 小皿	25%	8.0	2.0	4.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
237	74	23	S821	土師器 小皿	50%	7.8	1.8	5.2	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
238	74	23	S821	土師器 小皿	60%	7.8	1.9	7.0	黄灰	にぶい黄橙	
239	74	23	S821	土師器 小皿	35%	7.4	1.8	4.0	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
240	74	23	S821	土師器 小皿	35%	8.0	2.0	5.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
241	74	23	S821	土師器 小皿	50%	8.6	2.3	5.8	灰黄褐	にぶい黄橙	
242	74	23	S821	土師器 小皿	35%	7.2	2.1	4.8	暗灰黄	にぶい黄橙	
243	74	24	S821	土師器 小皿	20%	7.0	2.1	4.6	にぶい橙	橙	
244	74	24	S821	土師器 小皿	40%	7.6	2.2	4.4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
245	74	24	S821	土師器 小皿	35%	6.6	2.0	4.0	灰黄褐	灰黄褐	
246	74	24	S821	土師器 小皿	35%	7.6	2.7	4.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
247	74	24	S821	土師器 小皿	35%	6.6	2.5	4.2	灰黄褐	にぶい黄橙	
248	74	24	S821	弥生土器 甕	-	-	-	-	灰黄褐	橙	
249	77	24	S824	土師器 甕	100%	19.3	29.7	8.4	橙	橙	
250	77	24	S824	土師器 大型甕	(25%)	31.6	(22.6)	-	橙	橙	駿東遺
251	77	24	S824	土師器 甕	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	
252	77	24	S824	土師器 甕	(35%)	15.9	(9.7)	-	橙	橙	
253	77	24	S824	土師器 甕	(30%)	-	(6.9)	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
254	77	24	S824	土師器 高坯	(20%)	-	(7.0)	-	橙	橙	
255	77	24	S824	土師器 甕	(95%)	-	(10.8)	5.0	にぶい黄橙	浅黄橙	
256	77	24	S824	土師器 杯	35%	13.0	4.1	-	橙	橙	
257	77	24	S824	土師器 杯	35%	14.4	4.3	2.7	にぶい橙	橙	木葉痕
258	77	24	S824	土師器 杯	50%	13.8	3.7	2.3	橙	橙	
259	77	24	S824	土師器 杯	65%	14.0	5.0	4.8	橙	橙	木葉痕
260	77	25	S824	土師器 杯	25%	12.4	5.2	2.8	橙	灰黄褐	木葉痕
261	77	25	S824	土師器 杯	50%	13.4	5.0	4.0	明赤褐	橙	
262	77	25	S824	土師器 杯	15%	13.0	6.9	-	橙	橙	底面に線刻「X」
265	79	25	S825	土師器 鍋	-	-	-	-	褐	にぶい赤褐	清淨鍋
266	79	25	S825	土師器 甕	-	-	-	-	橙	にぶい橙	
267	81	25	S826	土師器 杯	30%	11.9	3.5	7.0	赤褐	赤褐	駿東杯
268	81	25	S826	土師器 杯	75%	11.4	4.1	6.6	赤褐	赤褐	駿東杯
269	81	25	S826	土師器 杯	25%	11.0	3.4	7.0	にぶい赤褐	にぶい赤褐	駿東杯
270	81	25	S826	土師器 杯	(25%)	11.6	(3.7)	-	赤褐	赤褐	駿東杯
271	81	25	S826	土師器 甕	-	-	-	-	橙	橙	
272	84	25	S827	土師器 甕	-	-	-	-	にぶい黄橙	橙	
273	84	25	S827	土師器 甕	-	-	-	-	橙	橙	
274	84	25	S827	土師器 甕	(25%)	24.2	(6.1)	-	橙	橙	
275	84	25	S827	土師器 甕	(50%)	8.6	(3.8)	-	橙	橙	
276	84	25	S827	土師器 鉢	(15%)	14.0	(4.1)	-	橙	にぶい橙	
277	84	25	S827	土師器 高坯	(60%)	17.0	(7.1)	-	橙	橙	
278	84	25	S827	土師器 杯	-	-	-	-	赤	赤褐	体部に墨書「中」
279	84	25	S827	土師器 杯	15%	10.8	3.8	6.0	赤褐	赤褐	駿東杯、体部に墨書あり
282	86	26	S828	土師器 甕	(65%)	20.8	(25.4)	-	にぶい黄橙	明褐	
283	86	26	S828	土師器 鉢	35%	12.8	5.0	2.6	にぶい赤褐	にぶい赤褐	
284	86	26	S828	土師器 台付甕	(95%)	-	(3.1)	-	橙	にぶい橙	
285	86	26	S828	土師器 高坯	(80%)	22.8	(6.1)	-	橙	橙	
286	86	26	S828	土師器 不明	(15%)	16.0	(1.2)	-	明赤褐	赤褐	

遺物 番号	博図 番号	図版 番号	遺構 番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
287	86	26	S828	土師器	高坏	(50%)	-	(11.1)	-	橙	明赤褐	
288	86	26	S828	土師器	高坏	(35%)	-	(5.4)	15.2	橙	橙	
289	86	26	S828	土師器	高坏	(30%)	-	(2.1)	-	明赤褐	橙	
290	86	26	S828	土師器	高坏	(95%)	-	(7.1)	-	橙	橙	頸部に穿孔3箇所
291	86	26	S828	土師器	高坏	(25%)	-	(7.4)	-	橙	橙	
292	88	26	S829	弥生土器	壺	-	-	-	-	明赤褐	橙	
293	88	26	S829	弥生土器	壺	-	-	-	-	黄橙	橙	口唇部に浮文
294	88	26	S829	弥生土器	壺	-	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	口唇部に刻み目文
295	88	26	S829	弥生土器	壺	-	-	-	-	にぶい橙	にぶい橙	
296	92	26	S831	土師器	壺	-	-	-	-	浅黄橙	黄橙	大冢遺
297	92	26	S831	土師器	壺	-	-	-	-	赤褐	赤褐	口唇部に刻み目文
298	92	27	S831	土師器	高坏	(20%)	-	(4.4)	12.8	明赤褐	明赤褐	
299	92	27	S831	土師器	壺	(20%)	-	(2.9)	4.9	にぶい黄橙	橙	
300	94	27	S830	土師器	壺	-	-	-	-	にぶい黄橙	明赤褐	口唇部に刻み目文
301	94	27	S830	土師器	S字窠	(15%)	13.0	(4.0)	-	橙	橙	
302	94	27	S830	土師器	台付甕	(95%)	-	(7.4)	7.6	にぶい橙	にぶい橙	
303	94	27	S830	土師器	甕	-	-	-	-	橙	にぶい橙	
304	94	27	S830	土師器	甕	-	-	-	-	橙	にぶい橙	
305	94	27	S830	土師器	壺	-	-	-	-	褐灰	橙	
307	96	27	S833	土師器	S字窠	(15%)	14.6	(5.1)	-	にぶい赤褐	橙	
308	99	27	S840	弥生土器	壺	-	-	-	-	黄灰	橙	縄文、円形浮文
309	99	27	S840	弥生土器	壺	-	-	-	-	にぶい黄橙	黄橙	縄文、円形浮文
310	99	27	S840	弥生土器	台付甕	(30%)	-	(7.0)	-	赤褐	橙	
311	99	27	S840	弥生土器	台付甕	(15%)	-	(3.9)	-	橙	橙	
312	101	27	S834	土師器	壺	(25%)	17.6	(4.9)	-	明赤褐	橙	
313	103	27	S837	土師器	壺	(50%)	-	(28.0)	9.0	明赤褐	浅黄橙	
314	104	27	S838	土師器	壺	-	-	-	-	橙	にぶい橙	
315	104	27	S838	土師器	壺	-	-	-	-	橙	橙	口唇部に棒状浮文
316	104	27	S838	土師器	高坏	(30%)	-	(5.1)	-	橙	明赤褐	頸部に穿孔4箇所
317	106	27	S841	土師器	壺	(30%)	15.0	(3.1)	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	口縁部に波状文
318	106	28	S841	土師器	壺	(15%)	-	(2.5)	10.4	黄灰	黒	
319	109	28	S842	土師器	甕	95%	18.3	27.8	8.0	浅黄橙	浅黄橙	
320	109	28	S842	土師器	甕	(50%)	20.4	(25.2)	-	にぶい黄橙	灰黄褐	
321	109	28	S842	土師器	甕	(30%)	21.0	(6.8)	-	にぶい赤褐	明赤褐	
322	109	28	S842	土師器	甕	(40%)	20.0	(11.4)	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
323	109	28	S842	土師器	壺	95%	16.0	17.4	7.6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	木冢遺
324	109	28	S842	土師器	壺	95%	15.8	16.8	7.6	にぶい橙	にぶい橙	
325	109	28	S842	土師器	壺	100%	9.0	15.3	5.2	にぶい橙	にぶい橙	木冢遺
326	109	28	S842	土師器	坏	95%	13.4	5.3	-	にぶい橙	にぶい橙	
327	109	28	S842	土師器	坏	85%	14.0	4.5	5.0	橙	橙	
328	109	28	S842	土師器	坏	50%	14.4	5.7	3.6	橙	にぶい黄橙	
329	109	28	S842	土師器	坏	65%	13.6	5.4	5.9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
330	109	28	S842	土師器	坏	50%	14.4	4.6	-	にぶい橙	にぶい橙	
331	109	28	S842	土師器	罎	(25%)	12.4	(4.1)	-	赤	橙	
332	109	28	S842	土師器	高坏	(45%)	17.6	(5.1)	-	にぶい橙	にぶい橙	
333	109	28	S842	土師器	高坏	(30%)	-	(2.4)	-	橙	橙	
334	109	28	S842	土師器	高坏	(25%)	-	(2.4)	-	橙	明赤褐	
335	109	28	S842	土師器	高坏	(65%)	-	(6.2)	-	にぶい橙	橙	
336	109	28	S842	土師器	高坏	(60%)	-	(7.4)	-	黄橙	橙	
337	109	28	S842	土師器	高坏	(15%)	-	(1.7)	10.6	にぶい橙	橙	
338	109	28	S842	土師器	高坏	(35%)	-	(6.0)	11.2	赤褐	赤褐	頸部に貫通しない穴推定4箇所
339	109	28	S842	土師器	高坏	(95%)	-	(7.1)	-	橙	橙	
340	109	29	S842	土師器	高坏	(25%)	-	(6.5)	10.0	橙	橙	
341	109	29	S842	土師器	高坏	(95%)	-	(3.9)	-	にぶい橙	褐	頸部に穿孔4箇所
342	109	29	S842	土師器	高坏	(90%)	-	(3.5)	-	にぶい黄橙	明赤褐	頸部に穿孔4箇所
343	109	29	S842	土師器	壺	-	-	-	-	褐灰	橙	
344	109	29	S842	土師器	壺	-	-	-	-	橙	橙	
345	109	29	S842	土師器	壺	-	-	-	-	浅黄橙	にぶい黄橙	
346	109	29	S842	土師器	壺	-	-	-	-	明赤褐	明赤褐	二重口縁葺
347	109	29	S842	土師器	壺	-	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
348	109	29	S842	土師器	壺	-	-	-	-	にぶい黄橙	にぶい黄橙	大冢遺
350	112	29	S81	土師器	壺	-	-	-	-	橙	橙	
351	115	29	S01	弥生土器	壺	(60%)	-	(20.0)	10.2	灰	橙	頸部に羽状縄文、円形浮文
352	115	29	S01	弥生土器	壺	30%	16.2	22.0	8.0	にぶい黄橙	明黄褐	
353	115	29	S01	弥生土器	壺	(65%)	10.4	(6.5)	-	橙	明褐	
354	115	29	S01	弥生土器	壺	(50%)	-	(11.8)	7.0	橙	明赤褐	
355	115	29	S01	弥生土器	壺	(35%)	-	(7.0)	-	にぶい橙	にぶい黄橙	頸部に羽状縄文、円形浮文

遺物 番号	神田 図版	遺構 番号	種別	相別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考	
356	115	30	SD1	弥生土器	壺	(30%)	-	(12.7)	-	黒褐色	明赤褐色	
357	115	30	SD1	弥生土器	壺	(30%)	-	(9.3)	-	灰黄褐色	にぶい黄褐色	
358	115	30	SD1	弥生土器	鉢	80%	13.0	22.2	10.0	褐色	褐色	
359	115	30	SD1	弥生土器	壺	(40%)	-	(11.1)	8.0	褐色	明赤褐色	
360	115	30	SD1	弥生土器	鉢	(20%)	15.8	(9.1)	-	褐色	にぶい黄褐色	
361	115	30	SD1	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	頸部に円形浮文	
362	115	30	SD1	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい黄褐色	明赤褐色		
363	115	30	SD1	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい褐色	赤褐色		
364	115	30	SD1	弥生土器	甕	-	-	-	にぶい褐色	にぶい黄褐色	口唇部に刻み目文	
365	115	30	SD1	弥生土器	甕	(15%)	34.0	(8.1)	-	黄褐色	褐色	口唇部に刻み目文
366	115	30	SD1	弥生土器	甕	(30%)	20.0	(11.6)	-	黄褐色	にぶい黄褐色	
367	115	30	SD1	灰釉陶器	碗	(15%)	14.6	(2.1)	-	灰白	灰白	
368	119	30	SK1	土師器	壺	(25%)	-	(2.7)	4.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
369	119	30	SK1	土師器	壺	(35%)	-	(2.7)	4.2	明赤褐色	褐色	
370	119	30	SK1	土師器	碗	(95%)	-	(1.3)	4.8	明赤褐色	明赤褐色	底面に墨書あり
371	127	30	SK1	土師器	台付甕	(75%)	-	(2.4)	-	褐色	褐色	
372	127	30	SK1	土師器	高坏	(20%)	-	(6.0)	-	にぶい褐色	褐色	
373	127	30	SK1	須恵器	高台坏	(40%)	-	(1.9)	8.6	褐色	灰	
374	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい褐色	浅黄褐色	内面に縄文及び結節縄文	
375	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい黄褐色	褐色	口縁部に棒状浮文	
376	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	褐色	褐色	二重口縁蓋	
377	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	褐色	にぶい褐色		
378	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	にぶい黄褐色	褐色		
379	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	褐色	にぶい黄褐色	羽状縄文	
380	129	31	包含層	弥生土器	壺	(25%)	-	(5.1)	5.4	褐色	にぶい褐色	
381	129	31	包含層	弥生土器	壺	(20%)	12.0	(3.4)	-	にぶい黄褐色	褐色	
382	129	31	包含層	弥生土器	壺	10%	15.0	(4.6)	-	褐色	明赤褐色	
383	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	褐色	褐色	口唇部に棒状浮文	
384	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	褐色	褐色		
385	129	31	包含層	弥生土器	壺	-	-	-	明黄褐色	褐色		
386	129	31	包含層	土師器	S字甕	-	-	-	にぶい褐色	にぶい褐色		
387	129	31	包含層	弥生土器	甕	(30%)	19.0	13.5	-	明赤褐色	明赤褐色	口縁部に刻み目文
388	129	31	包含層	弥生土器	甕	-	-	-	褐色	明赤褐色	口縁部に刻み目文	
389	129	31	包含層	弥生土器	甕	-	-	-	褐色	褐色		
390	129	31	包含層	土師器	小型甕	(30%)	10.6	5.3	-	赤褐色	褐色	
391	129	31	包含層	土師器	器台	100%	7.0	4.7	1.5	褐色	褐色	
392	129	31	包含層	土師器	高坏	(90%)	-	(4.3)	-	褐色	明赤褐色	
393	129	31	包含層	土師器	器台	(50%)	-	(3.8)	-	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
394	129	31	包含層	土師器	高坏	(85%)	-	(5.0)	-	にぶい黄褐色	にぶい褐色	
395	129	31	包含層	土師器	高坏	(30%)	-	(5.1)	10.2	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	
396	129	32	包含層	土師器	高坏	(50%)	21.8	(4.5)	-	褐色	褐色	
397	129	32	包含層	土師器	高坏	(30%)	-	(9.1)	13.8	にぶい褐色	にぶい褐色	
398	129	32	包含層	土師器	壺	(70%)	15.4	(6.3)	-	褐色	褐色	
399	129	32	包含層	土師器	鉢	20%	14.8	(4.9)	-	明赤褐色	明赤褐色	
400	129	32	包含層	土師器	壺	(70%)	-	(7.0)	4.4	明赤褐色	褐色	
401	129	32	包含層	土師器	壺	(50%)	9.0	(4.8)	-	褐色	褐色	
402	129	32	包含層	土師器	甕	(20%)	20.0	8.4	-	褐色	にぶい褐色	
403	129	32	包含層	土師器	壺	(15%)	14.2	6.0	-	赤褐色	明赤褐色	
404	129	32	包含層	土師器	壺	90%	7.2	9.2	-	褐色	にぶい褐色	
405	129	32	包含層	土師器	壺	(95%)	-	(1.7)	5.6	褐色	褐色	
407	129	32	包含層	土師器	甕	50%	20.0	28.4	8.0	明赤褐色	赤褐色	
408	129	32	包含層	土師器	坏	(15%)	14.0	(4.0)	-	にぶい褐色	にぶい褐色	
409	129	32	包含層	土師器	坏	(10%)	15.0	(4.0)	-	赤褐色	褐色	
410	129	32	包含層	土師器	鉢	(50%)	12.9	5.0	2.9	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	
411	129	32	包含層	土師器	鉢	50%	12.8	4.6	5.2	褐色	にぶい褐色	
412	130	32	包含層	土師器	坏	15%	10.8	3.6	6.0	赤褐色	赤褐色	駿東坏
413	130	32	包含層	土師器	坏	(35%)	-	(3.0)	-	にぶい褐色	にぶい褐色	甲斐型坏
414	130	32	包含層	土師器	坏	(25%)	-	(2.8)	6.4	赤褐色	赤褐色	体部に墨書あり
415	130	32	包含層	土師器	坏	(50%)	-	(2.7)	6.0	にぶい黄褐色	褐色	
416	130	32	包含層	土師器	坏	50%	10.6	4.2	5.4	褐色	明赤褐色	駿東坏、体部に墨書「中」
417	130	32	包含層	土師器	坏	15%	11.6	4.1	6.5	にぶい褐色	にぶい褐色	駿東坏、体部に墨書「吉」
418	130	32	包含層	土師器	坏	30%	10.8	3.9	4.0	赤褐色	赤褐色	駿東坏、体部に墨書あり
419	130	32	包含層	土師器	壺	(95%)	-	(1.5)	4.2	灰黄褐色	明赤褐色	
420	130	32	包含層	土師器	壺	-	-	-	-	赤	赤	駿東坏、体部に墨書「中」
421	130	32	包含層	土師器	坏	15%	11.2	3.1	5.8	にぶい褐色	にぶい褐色	駿東坏
422	130	32	包含層	土師器	坏	15%	11.4	3.7	6.6	暗赤褐色	赤褐色	駿東坏
423	130	32	包含層	土師器	坏	(60%)	-	(1.9)	5.8	赤褐色	赤	駿東坏、底面に墨書「吉」

遺物 番号	博図	図版	遺構 番号	種別	細別	残存率	口径	器高	底径	内面色調	外面色調	備考
424	130	33	包含層	土師器	坏	(20%)	12.6	3.7	7.0	赤褐	赤褐	腹東坏
425	130	33	包含層	土師器	罍	(50%)	-	(3.8)	6.8	橙	赤褐	
426	130	33	包含層	土師器	碗	(15%)	14.0	(3.2)	-	明赤褐	明赤褐	
427	130	33	包含層	土師器	壺	(50%)	-	(1.6)	6.0	赤褐	赤褐	
428	130	33	包含層	土師器	碗	(50%)	20.6	(4.0)	-	赤	赤褐	
429	130	33	包含層	土師器	坏	(10%)	-	(0.9)	7.2	明赤褐	明赤褐	腹東坏、見込みに墨書あり
430	130	33	包含層	土師器	坏	(10%)	-	(1.9)	7.4	赤	赤褐	腹東坏、体部に墨書あり
431	130	33	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤	赤	腹東坏、体部に墨書あり
432	130	33	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	体部に墨書あり
433	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	腹東坏、体部に墨書あり
434	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤	赤褐	腹東坏、体部に墨書「中」
435	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	暗赤褐	にぶい赤褐	腹東坏、体部に墨書あり
436	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	腹東坏、体部に刻書「中」
437	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	にぶい褐	赤褐	腹東坏、見込みに墨書あり
438	130	34	包含層	土師器	碗	-	-	-	-	赤褐	にぶい赤褐	腹東坏、体部に刻書「中」
439	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	にぶい赤褐	体部に墨書あり
440	130	34	包含層	土師器	坏	-	-	-	-	赤褐	赤褐	腹東坏、体部に刻書あり
441	130	34	包含層	山茶碗	小皿	(25%)	10.8	(3.0)	-	灰黄	黄灰	
442	130	34	包含層	土師器	碗	(25%)	-	(1.4)	5.4	赤褐	赤褐	見込みに放射状凹文
443	130	34	包含層	土師器	碗	(15%)	-	(1.9)	7.0	明赤褐	明赤褐	
444	130	34	包含層	土師器	碗	(30%)	-	(1.6)	7.4	明赤褐	明赤褐	灰釉模倣
445	130	34	包含層	土師器	碗	(15%)	-	(2.2)	7.0	赤褐	赤褐	
446	130	34	包含層	土師器	碗	(25%)	-	(2.6)	9.6	暗赤褐	暗赤褐	
447	130	34	包含層	土師器	不明	-	-	-	-	橙	明赤褐	
448	130	34	包含層	土師器	小皿	65%	9.0	2.3	4.6	にぶい橙	にぶい橙	
449	130	34	包含層	土師器	小皿	20%	7.4	2.1	4.6	黄灰	にぶい橙	
450	130	34	包含層	土師器	小皿	(90%)	-	(1.7)	5.0	明赤褐	明赤褐	
451	130	34	包含層	土師器	小皿	35%	8.0	1.8	5.2	灰黄褐	灰黄褐	
452	130	34	包含層	土師器	瓦甔網?	(10%)	18.4	(4.2)	-	-	黒	にぶい褐
453	130	34	包含層	土師器	柱状台	(95%)	-	(3.0)	5.5	にぶい褐	にぶい褐	
454	130	35	包含層	須恵器	坏蓋	(17%)	9.2	(2.3)	9.2	黄灰	黄灰	
455	130	35	包含層	須恵器	坏	(15%)	-	(3.8)	-	灰	灰	
456	130	35	包含層	須恵器	坏	-	-	-	-	灰	灰	
457	130	35	包含層	須恵器	高坏	(80%)	-	(4.2)	-	黄灰	黄灰	
458	130	35	包含層	須恵器	坏	(20%)	7.0	(2.0)	-	灰	灰	
459	130	35	包含層	須恵器	高台坏	(15%)	-	(1.6)	6.0	灰白	灰白	
460	130	35	包含層	須恵器	高台坏	(95%)	-	(1.8)	11.8	灰	灰	
461	130	35	包含層	須恵器	坏	(50%)	-	(2.0)	4.8	灰	灰	軟質須恵器
462	130	35	包含層	灰釉陶器	小碗	(35%)	-	(5.1)	-	灰オリーブ	灰白	
463	130	35	包含層	灰釉陶器	碗	(50%)	-	(1.4)	5.4	灰黄	灰黄	
464	130	35	包含層	灰釉陶器	碗	(50%)	-	(1.3)	7.8	黄灰	黄灰	
465	130	35	包含層	灰釉陶器	壺	(15%)	-	(1.9)	7.0	灰白	灰白	
466	130	35	包含層	灰釉陶器	碗	(70%)	-	(1.6)	7.2	灰白	灰白	
467	130	35	包含層	須恵器	坏	(30%)	11.8	(3.8)	-	褐灰	褐灰	
468	130	35	包含層	山茶碗	小皿	(25%)	9.6	(2.0)	-	灰	灰	
469	130	35	包含層	須恵器	高台坏	(70%)	-	(3.0)	9.0	青灰	青灰	
470	130	35	包含層	灰釉陶器	碗	(25%)	-	(3.3)	8.0	灰白	灰白	
471	130	35	包含層	灰釉陶器	盥	(30%)	-	(2.8)	5.0	灰褐	にぶい黄褐	焼成前へう書?
472	130	35	包含層	灰釉陶器	碗	(30%)	-	(2.2)	7.8	灰	灰	東遠江産
473	130	35	包含層	灰釉陶器	壺	(25%)	-	(4.8)	13.8	灰黄	灰	
474	130	35	包含層	須恵器	坏	(15%)	15.6	(2.9)	-	灰白	褐灰	
475	130	35	包含層	須恵器	坏	(15%)	16.0	(4.6)	-	青灰	灰	
476	130	35	包含層	灰釉陶器	壺	(15%)	-	(7.4)	11.8	灰	灰	

遺物 番号	神宮 図版	遺構 番号	種別	細別	残存率	重量	長さ	幅	厚さ	内面色調	外面色調	その他
169	50	20	S816	土製品	手づくね (30%)	6.13		器高(1.9)		底径3.8	にふい黄褐色	褐色
170	50	20	S816	土製品	土馬	22.94	(3.1)	2.7	4.7		褐色	褐色
199	61	21	S820	土製品	手づくね	90%	25.8	口径2.4	器高2.9		明赤褐色	赤褐色
215	66	22	S817	土製品	轡の羽口	131.38	(9.2)	逆風孔径	1.8	5.9	赤褐色	赤褐色
406	129	32	包含層	土製品	台座状土製品	15%		7.4	5.3		にふい褐色	にふい褐色
477	130	35	包含層	土製品	不明	(20%)	85.25		器高(8.7)	底径9.8	にふい褐色	にふい褐色

遺物 番号	神宮 図版	遺構 番号	種別	細別	材質	重量	長さ	幅	厚さ	
221	69	22	S818	石製品	磁石	28.67	9.5	3.9	8.3	
263	77	25	S824	石製品	磨石	817.93	9.5	7.6	8.3	
264	77	25	S824	石製品	磨石	1148.5	10.2	9.9	8.0	
306	94	27	S830	石器	石鏃	0.71	2.2	1.4	0.3	
349	110	29	S842	石製品	磨磁石	177.85	22.5	10.5	7.0	
478	130	36	包含層	石器	線石刃	黒曜石	0.18	1.6	0.5	0.1
479	130	36	包含層	石器	石鏃	黒曜石	1.22	2.2	1.6	0.5
480	130	36	包含層	石器	スレハ-	14.84	3.5	4.7	0.8	
481	130	36	包含層	石器	石匙	28.55	4.7	5.0	1.2	
482	130	36	包含層	石器	石匙	7187716A	12.5	2.7	4.9	0.8
483	130	36	包含層	石器	打製石斧	76.28	11.1	3.6	1.4	
484	131	36	包含層	石製品	叩き石	71.7	11.0	2.8	1.4	
492	131	36	包含層	石製品	磁石	87.48	7.7	3.2	1.2	
486	131	36	包含層	石製品	磁石	67.99	8.6	2.0	1.6	
487	131	36	包含層	石製品	石鏃	99.85	7.6	5.0	1.7	
488	131	36	包含層	石製品	鏃鏃?	5.92	3.7	2.2	0.4	
489	131	36	包含層	石製品	小銅蹄舌?	20.27	6.6	2.7	0.7	

遺物 番号	神宮 図版	遺構 番号	種別	細別	重量	長さ	幅	厚さ	
57	22	14	S810	鉄器	不明	7.92	6.5	1.0	0.6
62	25	14	S84	鉄器	鉄鏃	6.45	5.9	0.6	0.7
68	28	14	S811	鉄器	鉄鏃	14.51	9.5	1.6	0.3
84	32	16	S85	鉄器	不明	4.23	2.9	2.0	0.3
121	37	17	S86	鉄器	不明	3.4	3.4	1.4	0.3
126	45	17	S88	鉄器	鉄鏃	9.38	9.0	1.1	0.8
146	48	19	S823	鉄器	鉄鏃	10.09	8.0	1.0	0.8
178	56	20	S844	鉄器	不明	10.63	4.1	3.4	0.3
280	84	26	S827	鉄器	不明	9.14	4.2	1.8	0.5
281	84	26	S827	鉄器	不明	16.21	5.4	2.8	0.6
490	131	36	包含層	鉄器	刀子	8.61	5.7	1.8	0.3
491	131	36	包含層	鉄器	鉄鏃	5.49	4.1	0.7	0.5
492	131	36	包含層	鉄器	鉄鏃	7.11	4.8	0.7	0.6
493	131	36	包含層	鉄器	不明	11.32	6.2	1.0	0.6
494	131	36	包含層	鉄器	不明	9.81	7.0	0.4	0.5
495	131	36	包含層	鉄器	鉄釘	4.95	5.1	0.6	0.6
496	131	36	包含層	鉄器	不明	15.68	9.0	0.6	0.6

遺物 番号	神宮 図版	遺構 番号	種別	細別	重量	a	b	c	d	e	
502	131	37	S821	玉類	管玉	0.86	1.61	0.52	0.54	0.53	0.25
503	131	37	包含層	玉類	管玉未製品	1.4	3.12	0.48	0.48	0.43	-
504	131	37	S81	玉類	管玉未製品	1.33	2.04	0.58	0.56	0.55	-
505	131	37	S816	玉類	ガラス小玉	0.08	0.46	0.42	(0.41)	(0.42)	(0.09)
506	131	37	S833	玉類	白玉	0.27	0.34	0.69	0.70	0.71	0.30
507	131	37	包含層	玉類	白玉	0.08	0.22	0.43	0.41	0.41	0.12
508	131	37	S817	玉類	白玉	0.06	0.24	0.41	-	0.40	0.24
509	131	37	S817	玉類	白玉	0.08	0.25	0.43	0.42	0.41	0.21
510	131	37	S817	玉類	白玉	0.42	0.35	0.89	0.86	0.85	0.33
511	131	37	S817	玉類	白玉	0.26	0.32	0.67	0.67	0.67	0.23
512	131	37	S817	玉類	白玉	0.48	0.48	0.75	0.74	0.71	0.25
513	131	37	S817	玉類	白玉	0.11	0.41	0.46	0.44	0.44	0.22
514	131	37	S817	玉類	白玉	0.06	0.24	0.37	0.36	0.36	0.20
515	131	37	S817	玉類	白玉	0.04	0.15	0.38	0.70	0.37	0.20

白玉



遺物 番号	神宮 図版	遺構 番号	種別	細別	重量	a	b	c	d	
229	72	23	S819	古銭	延喜通宝	1.61	1.97	1.96	1.57	1.57

銭

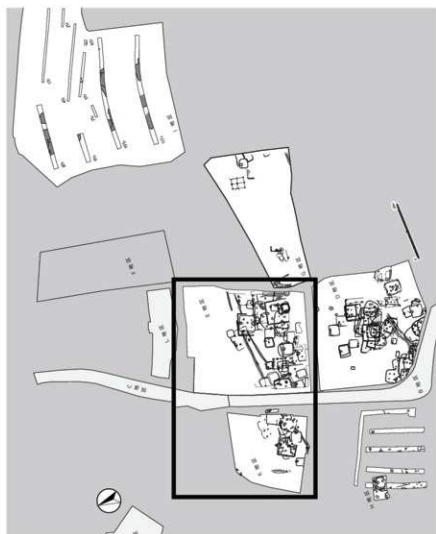


図 版



宮添遺跡E地区 SB 24出土土器
火山噴火物（大淵スコリア）にバックされた建物跡
古墳時代後期初頭

（撮影 小田貴子）





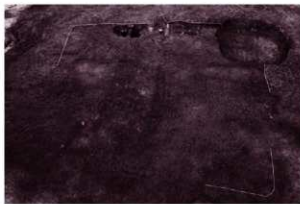
1. 調査区垂直写真 E地区とK地区（「平成16年調査」『宮部遺跡』1）との合成写真



1. 調査区と愛鷹山丘陵を望む（南から）



2. 調査区と駿河湾を望む（北から）



1. SB 1 (南から)



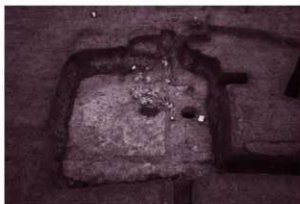
2. SB 1 カマド (南から)



3. SB 2 (西から)



4. SB 2 カマド・遺物出土状況 (南から)



5. SB 3 (南から)



6. SB 3 カマド・遺物出土状況 (南から)



7. SB 11・SB 10・SB 12 (西から)



8. SB 12 カマド (西から)



1. SB 10 カマド・遺物出土状況 (南から)



2. SB 11 カマド (南から)



3. SB 4 (西から)



4. SB 4 カマド (西から)



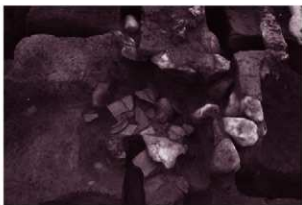
5. SB 7 (南から)



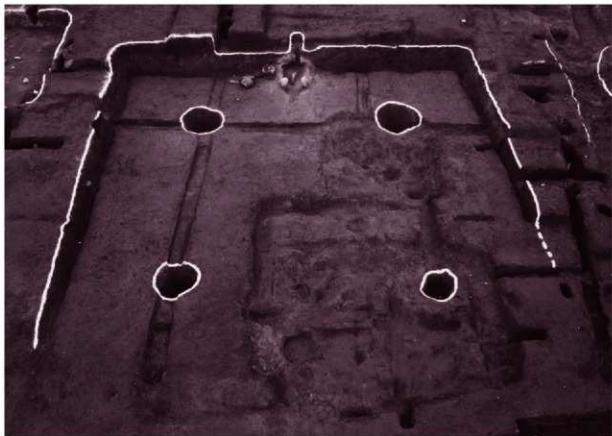
6. SB 6・SB 9 (南から)



7. SB 6 カマド (南から)



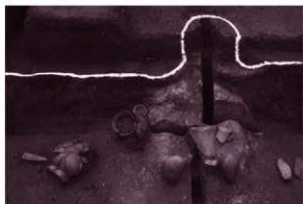
8. SB 6 カマド遺物出土状況 (南から)



1. SB5 (南から)



2. SB5 作業風景 (南から)



3. SB5 カマド遺物出土状況 (南から)



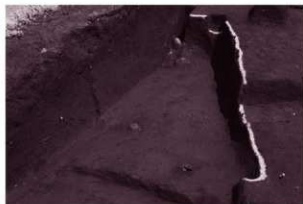
4. SB8 (南から)



5. SB8 カマド (南から)



1. SB 23・SB 13 (南から)



2. SB 16 (南から)



3. SB 23・SB 13 (南から)



4. SB 15 (北から)



5. SB 17 (東から)



6. SB 17 カマド (南から)



7. SB 18 (東から)



8. SB 18 カマド (南から)



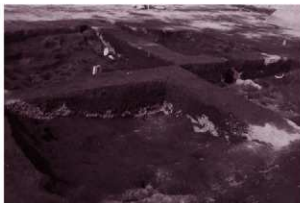
1. S B 24 遺物出土状況 (南から)



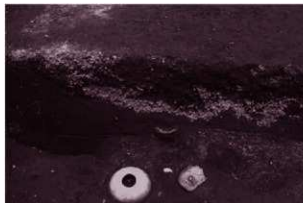
2. S B 24 カマド遺物出土状況 (南から)



3. S B 24 遺物出土状況 (西から)



4. S B 24 土層(大淵スコリア)堆積状況(南西から)



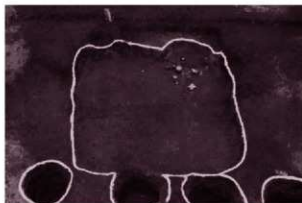
5. S B 24 スコリア下層 土器(255・260)出土状況



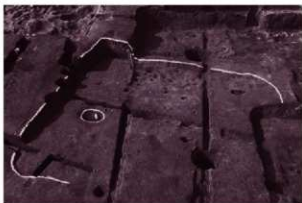
1. SB 19 (西から)



2. SB 19 カマド (西から)



3. SB 26 (南から)



4. SB 27 (南から)



5. SB 27 缸 (南から)



6. SB 27 土層堆積状況 (北東から)



7. SB 29 (南から)



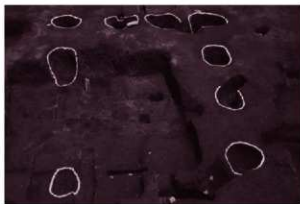
8. SB 30 (南から)



1. S B 42 (東から)



2. S B 42 遺物出土状況 (南から)



3. S H 1 (南から)



4. S H 2 (南から)



5. S X 1 (北から)



6. S X 1 遺物 (373) 出土状況



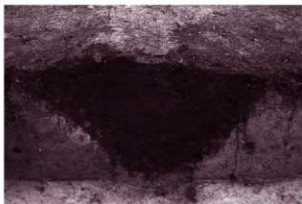
7. S K 7 (南から)



1. SD1・SD2 (東から)



2. SD1・SD2土層 (東から)



3. SD2土層 (東から)



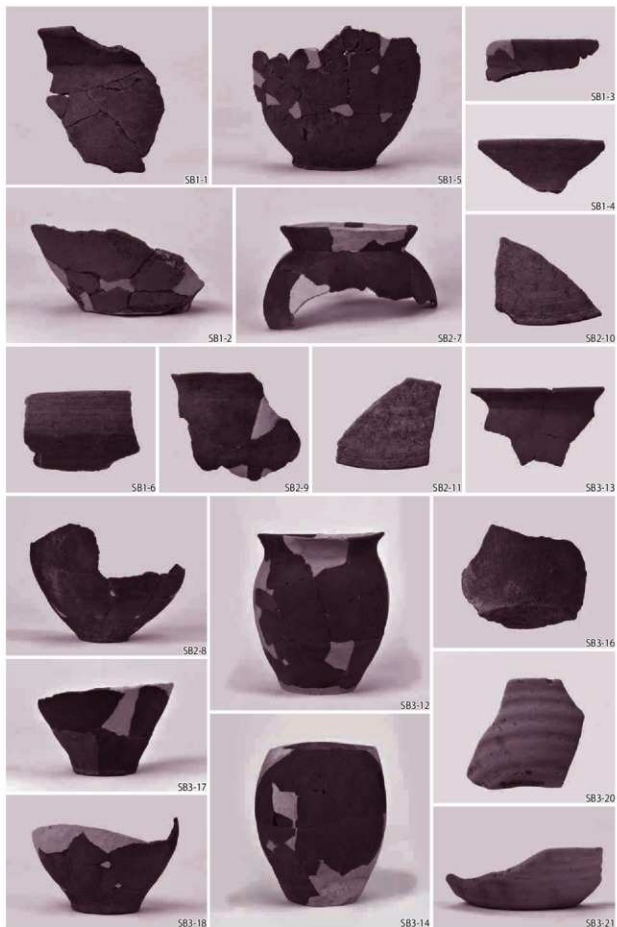
4. SD1 遺物出土状況 (1) (西から)

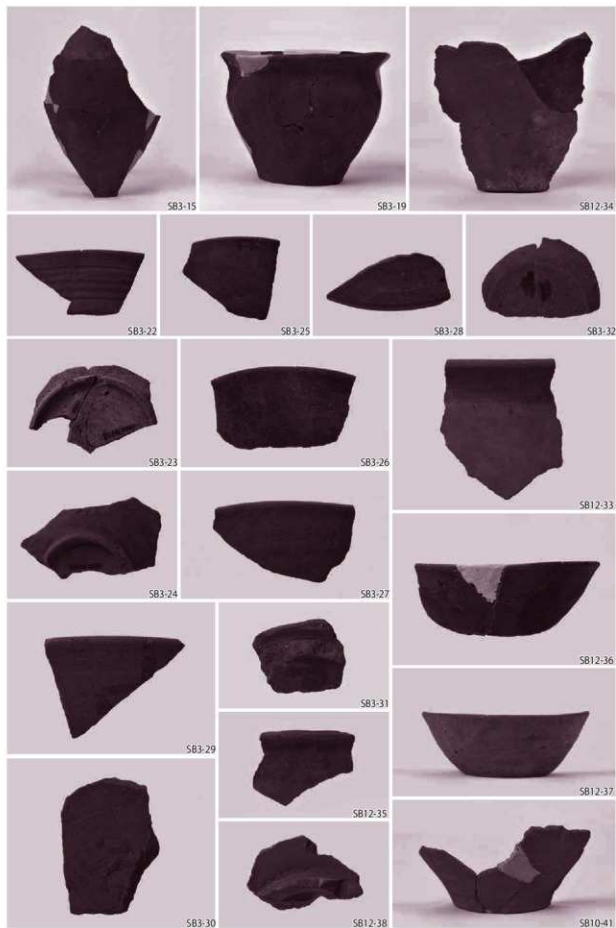


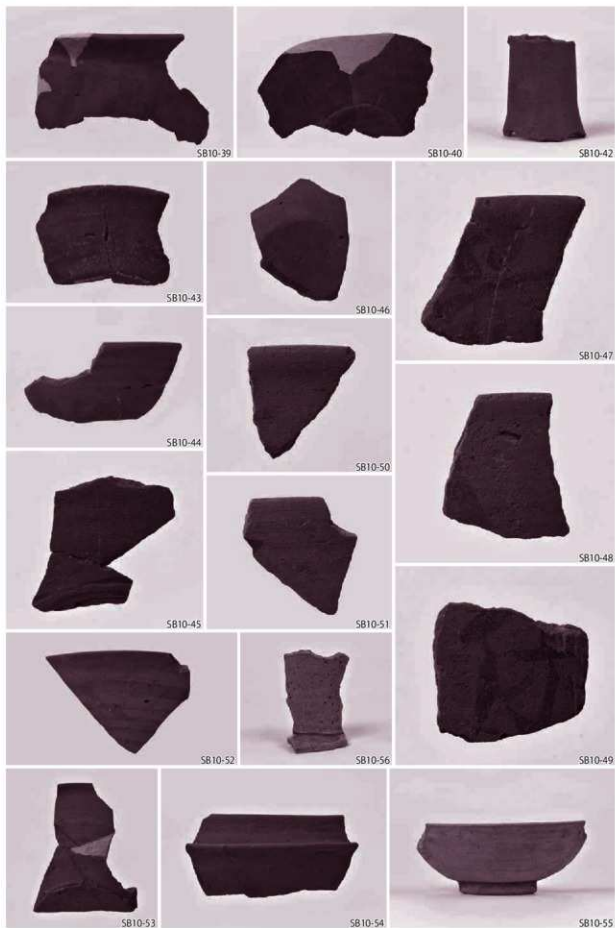
5. SD1 遺物出土状況 (2)

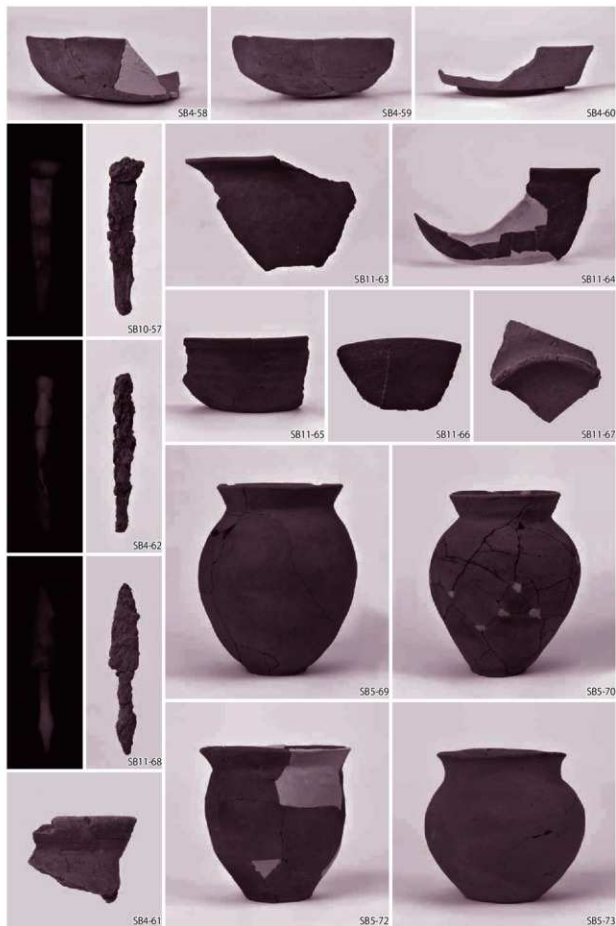


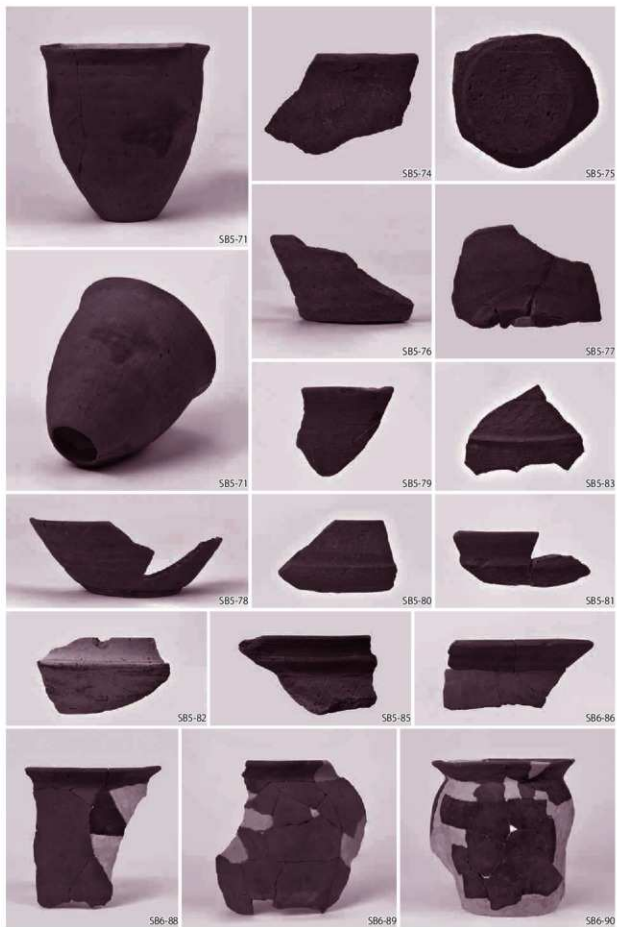
6. SD1 遺物出土状況 (3)













SB5-84



SB6-87



SB6-91



SB6-92



SB6-93



SB6-97



SB6-98



SB6-94



SB6-95



SB6-96



SB6-99



SB6-100



SB6-101



SB6-102



SB6-103



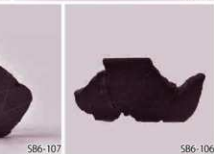
SB6-104



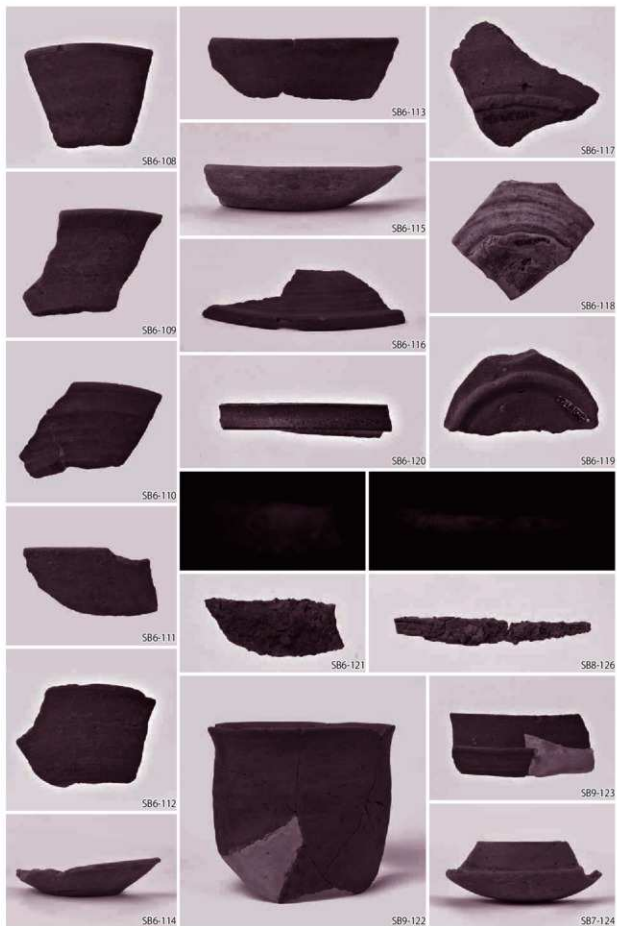
SB6-105



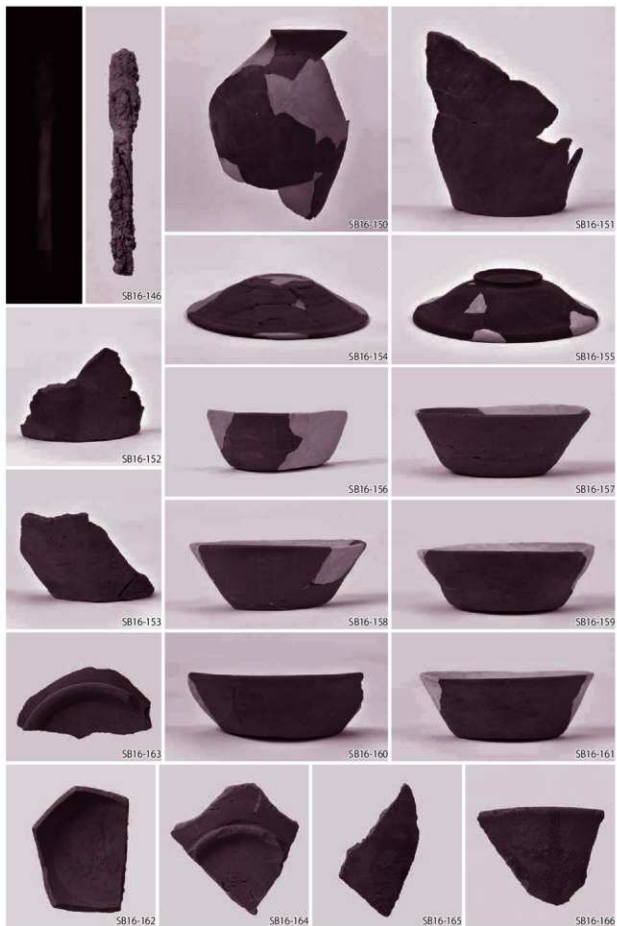
SB6-107

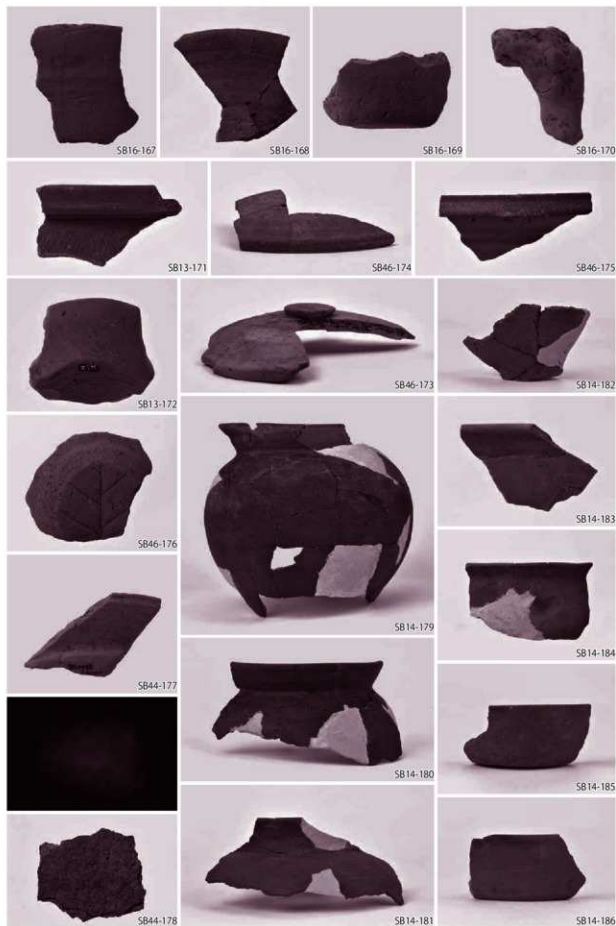


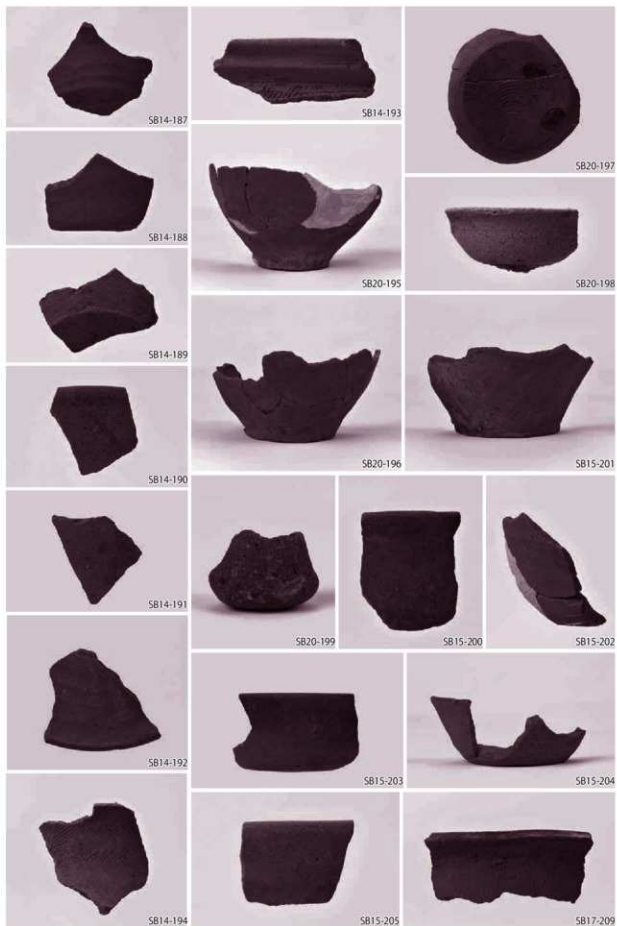
SB6-106



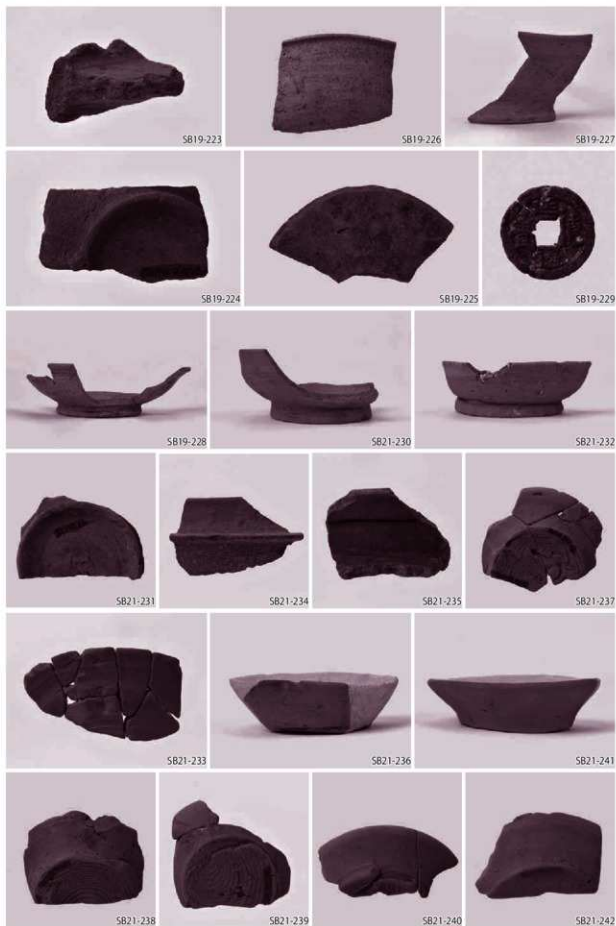




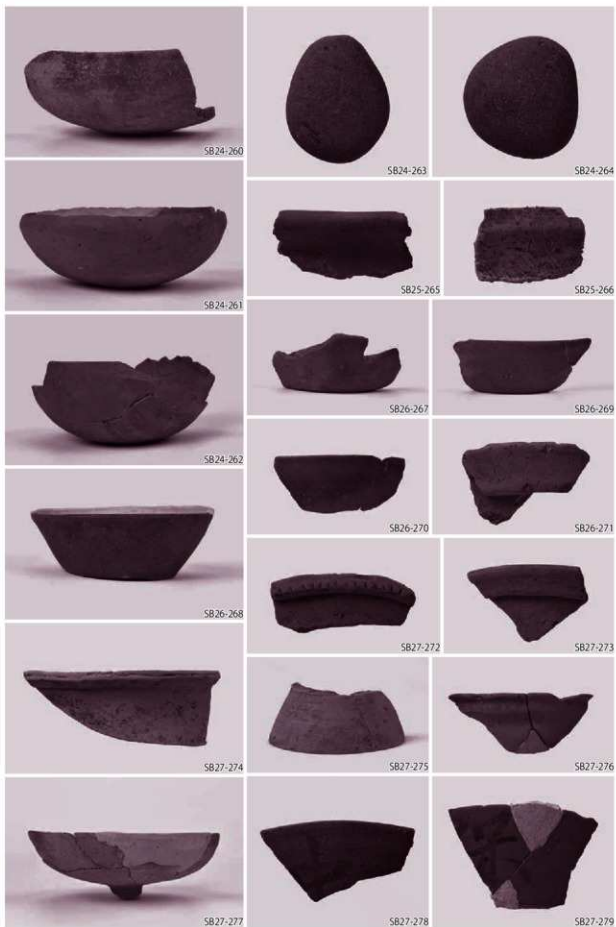


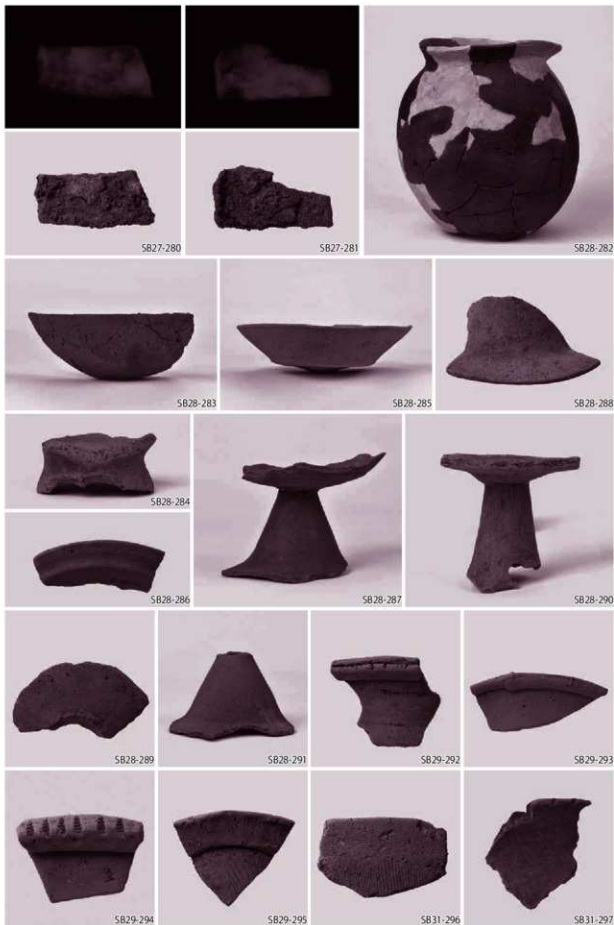


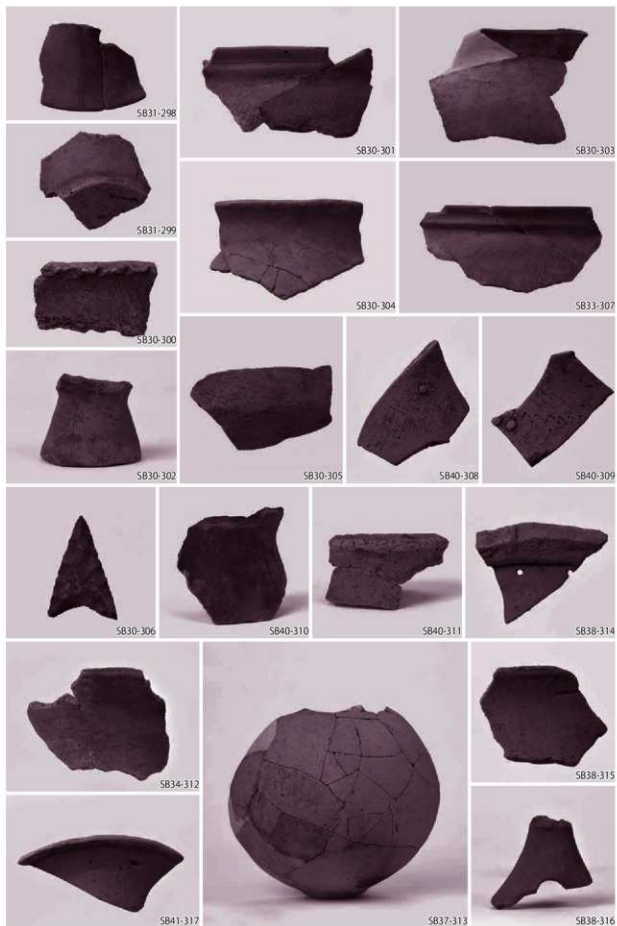


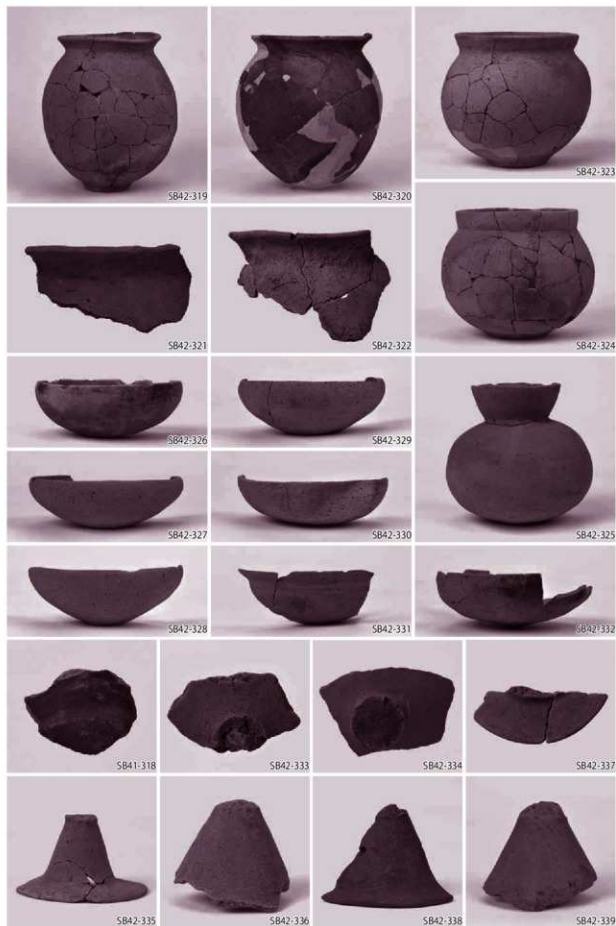


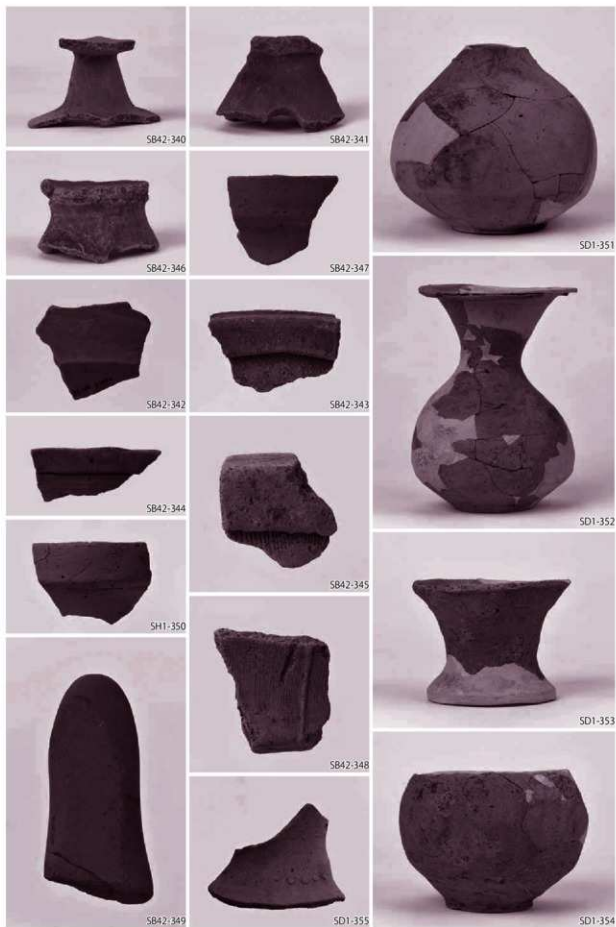




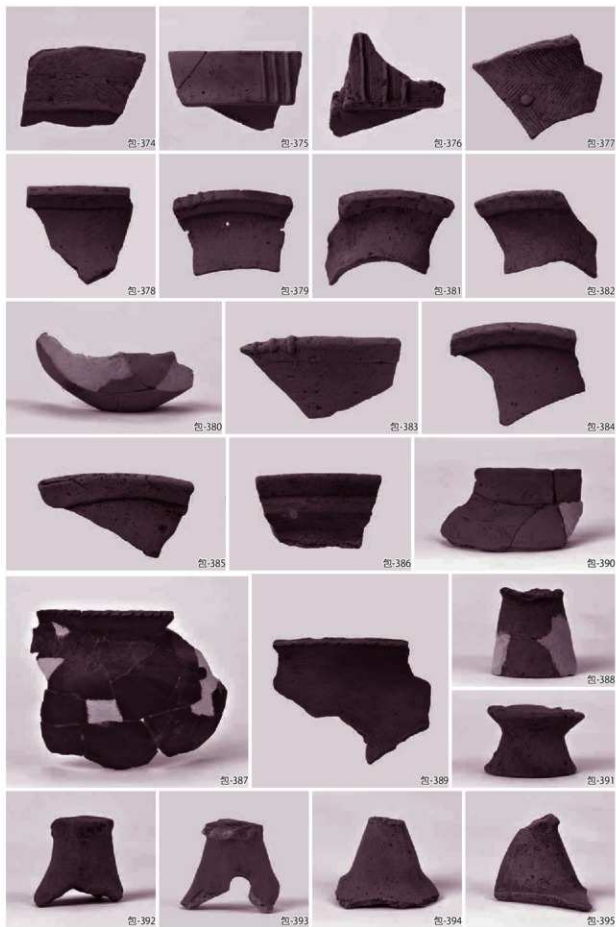


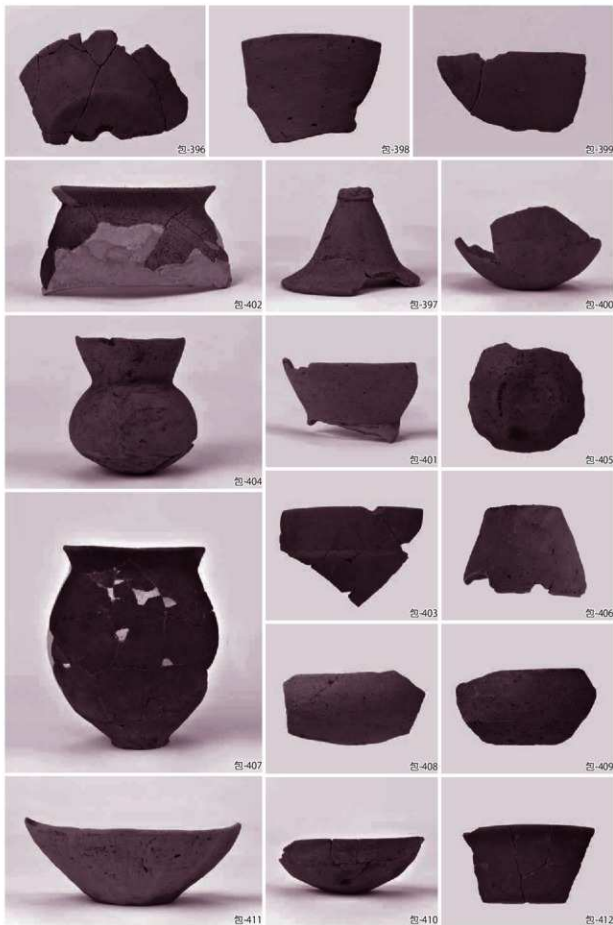


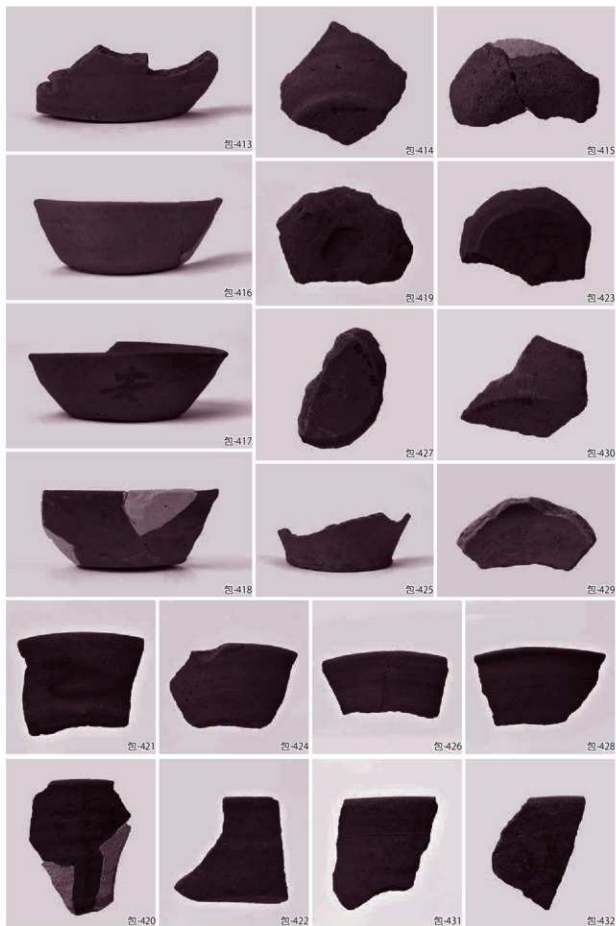


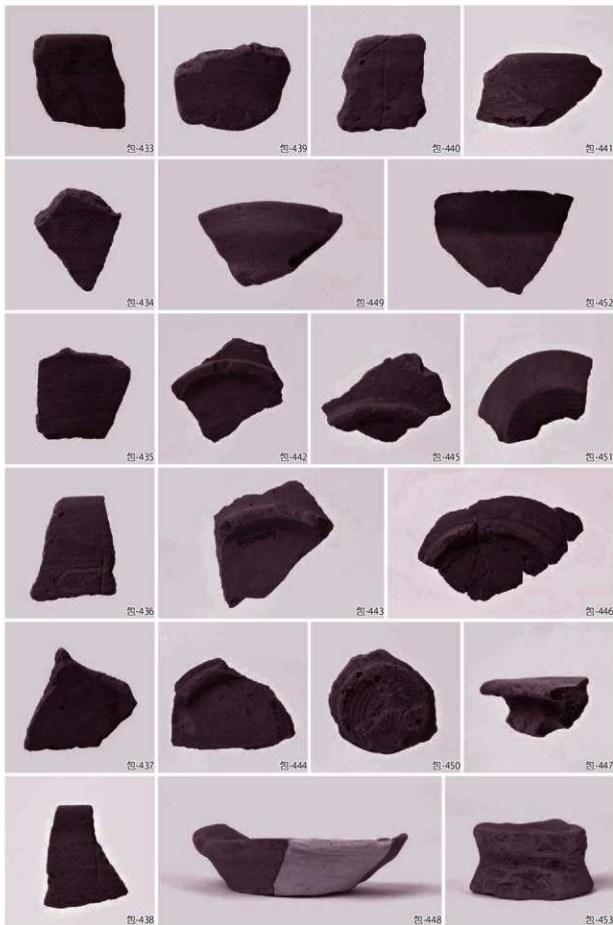


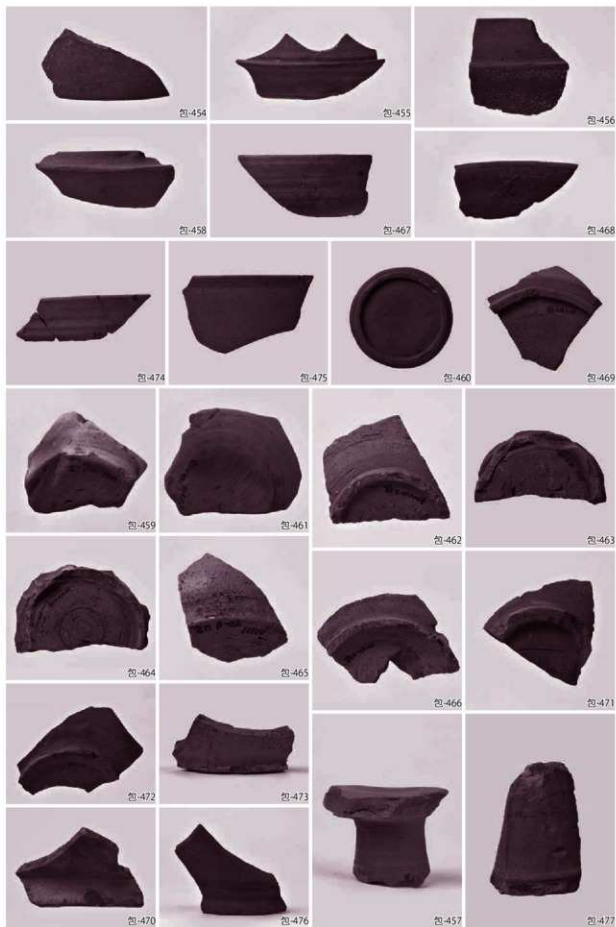


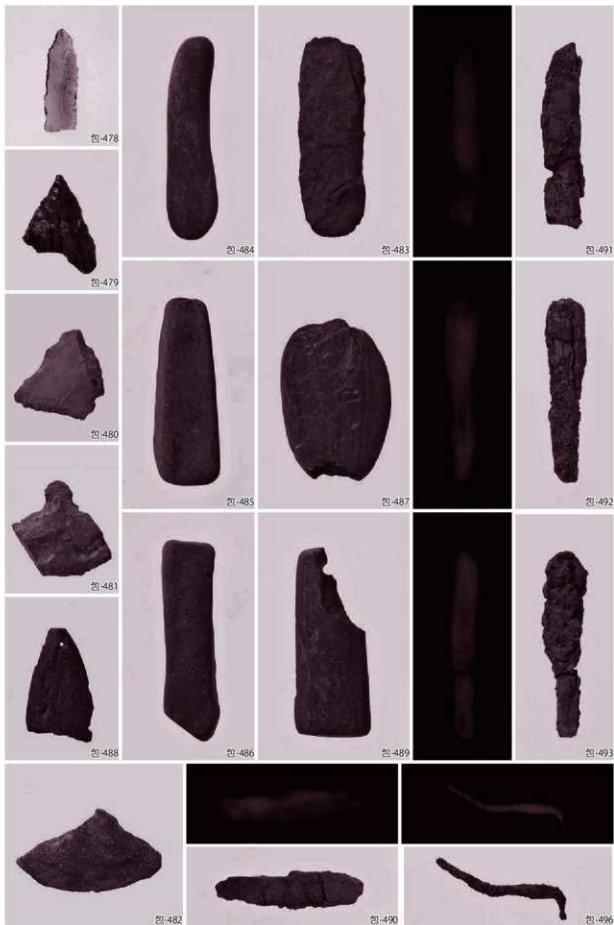












報告書抄録

ふりがな	みやぞえいせき							
書名	宮添遺跡IV							
副書名	個人農地改良工事に伴うE地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	富士市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	佐藤花樹(編)・佐野五十三・小島利史							
編集機関	富士市教育委員会(担当課:文化振興課)							
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL.0545-55-2875 E-mail:ky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp							
発行年月日	平成23年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積(m ²)	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町	遺跡	世界測地系		19981020 ～ 19990319	1,532	記録保存調査
みやぞえ	しずおかけいふんじますがわ	22210	S067	35° 09' 36.93"	138° 44' 53.28"			
宮添	静岡県富士市増川			日本測地系		19990419 ～ 19991122		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮添	集落	旧石器 弥生 古墳 奈良 平安 近世	竪穴建物跡 42軒 掘立柱建物跡 2棟 溝状遺構 4条 炉跡 2基 土坑 6基 性格不明遺構 4	石器(石斧・石鏃など)、 弥生土器、土師器、須恵器、 金属製品(鉄鏃・刀子など)、 古銭(延喜通宝)				
要約	<p>北に富士火山、南に田子浦砂丘と駿河湾を望む愛鷹南麓には、旧鎌倉往還である「根方街道」が存在し、現在も富士市から沼津市を経て三島市に至る「静岡県道22号三島富士線」として利用されている。「根方街道」沿いの丘陵先端には数多く集落が存在し、宮添遺跡も周辺の集落と伴に弥生時代後期に形成が開始される。</p> <p>集落形成期には東西方向約60mの断面V字状の溝が2条掘削され、防部・区画・象徴・結束の機能を複合的に有する意味での「環濠」と呼称した。古墳時代前期後半には、集落は一旦断絶し、その後100年近く経過した後、再度集落化する。活動が再開する段階には、カマドの導入や須恵器の流入など生活スタイルにも変化が見られ、列島規模での変革に対応するものと考えられる。</p> <p>平安時代まで継続する宮添遺跡の今回の調査において、皇朝十二歳の第11番目「延喜通宝」が出土したことや、鍛冶生産の存在を想定させる遺構や遺物(騎の羽口、鉄滓)が出土したことは、古代交通路の在り方を考える上でも重要な成果である。</p> <p>加えて、自然環境の変化の側面として、富士山南麓の寄生火山である高鉢山から噴出したと考えられる「大淵スコリア」の降下年代を竪穴建物の覆土堆積状況や出土土器の検討より約1,500年前と推定し、浮島ヶ原低地の水位上昇など生活環境の変化が、当地域における前方後円墳築造や他地域からの影響を受け入れる背景である可能性について考察した。</p>							

富士市埋蔵文化財発掘調査報告書

宮 添 遺 跡 IV

個人農地改良工事に伴う E 地区埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成 23 年 3 月 31 日

編集・発行 富士市教育委員会
〒 417-8601 静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789
E-mail ky-bunkashinkou@div.city.fujishizuoka.jp

印刷・製本 文光堂印刷株式会社
〒 410-0871 静岡県沼津市西間門 68 番地の 1

(富士市行政資料登録番号 22-60)